

ファカティリンケージ・プログラム Faculty Linkage Program

社会的ニーズに直結した、多彩な「学びの場」

活動報告書

2016年度

中央大学全学連携教育機構

FLP 2016 年度 活動報告書の発刊に寄せて

2016 年度ファカルティ・リンケージプログラム「Faculty-Linkage Program」(通称 FLP) の活動報告書が、ここに完成しました。

FLP は、総合大学として確固たる実績と伝統ある中央大学だからこそ構築できる全学横断的な学修システムです。現在開講の 5 プログラム(環境、ジャーナリズム、国際協力、スポーツ・健康科学、地域・公共マネジメント)の担当教員は、中央大学に置かれるすべての学部並びに FLP の運営組織である全学連携教育機構から、それぞれの専門分野に応じてプログラム教育の担い手として構成されています。

学生諸君が所属する学部では学びきれない視点や活動を FLP は実践することを目指し、併せて、その結果をもって、さらに所属学部での勉学を向上させるという、FLP は、まさに教育活動の相乗効果をも期待した教育プログラムといえます。そのため、学生諸君が担当教員と最も近い距離で学ぶ「ゼミナール方式」を中心に教育活動が展開されています。

FLP の 3 年間では、所属学部で修得した内容の向上、FLP でのゼミナール方式による教育の実践と担当教員からの直接指導、ゼミ生同士のふれあいと切磋琢磨といったことを通じて、研究テーマの深化のみならず、全人格的な涵養も修めることができると申し上げます。

「FLP 活動報告書」は、学生と担当教員のこうした教育実践の記録です。

ここに表現されている内容は、ごく一断面でしかありません。この内容以上の教育的成果と学生諸君の達成感がこの冊子には無限に詰まっています。

ご高覧いただく皆様におかれましては、表現し切れない担当教員や学生諸君の思いに幾ばくかの思いをはせていただければ幸甚に存じます。

改めまして、FLP に対し、なお一層のご理解とご支援を賜りたくお願いを申し上げます。

最後になりましたが、この活動報告書をまとめるに際し多大なご尽力いただきました関係各位への御礼をこの場をお借りして申し上げる次第でございます。

2017 年吉日

中央大学全学連携教育機構
機構長 石川 鉄郎

目次

I. 環境プログラム	5
1. 設置の趣旨と教育の目的	5
2. 2016 年度演習科目担当者および履修者数	6
3. プログラムスケジュール	6
4. プログラムの活動	7
5. 2016 年度までの環境プログラム修了生の主な就職・進学先	7
6. 演習教育活動	8
(1) 牛嶋 仁 (法学部・教授)	8
(2) 星野 智 (法学部・教授)	11
(3) 佐々木 創 (経済学部・准教授)	13
(4) 田中 廣滋 (経済学部・教授)	16
(5) 藪田 雅弘 (経済学部・教授)	18
(6) 西川 可穂子 (商学部・教授)	19
(7) 大内 俊二 (理工学部・教授)	21
(8) 谷下 雅義 (理工学部・教授)	23
(9) 盛田 富容子 (文学部・兼任講師)	25
(10) ハリスン・ブライアン (総合政策学部・教授)	27
(11) 横山 彰 (総合政策学部・教授)	28
II. ジャーナリズムプログラム	31
1. 設置の趣旨と教育の目的	31
2. 2016 年度演習科目担当者および履修者数	32
3. プログラムスケジュール	32
4. プログラムの活動	33
5. 2016 年度までのジャーナリズムプログラム修了生の主な就職・進学先	33
6. 演習教育活動	34
(1) 臼井 敏男 (経済学部・客員講師)	34
(2) 鈴木 俊幸 (文学部・教授)	38
(3) 辻 泉 (文学部・教授)	40
(4) 松田 美佐 (文学部・教授)	42
(5) 市川 哲夫 (総合政策学部・特任教授)	44
(6) 大橋 正和 (総合政策学部・教授)	47
(7) 松野 良一 (総合政策部・教授)	49
III. 国際協力プログラム	63
1. 設置の趣旨と教育の目的	63
2. 2016 年度演習科目担当者および履修者数	64
3. プログラムスケジュール	64

4. プログラムの活動	65
5. 2016 年度までの国際協力プログラム修了生の主な就職・進学先	65
6. 演習教育活動	66
(1) 牛嶋 仁 (法学部・教授)	66
(2) 小森谷 徳純 (経済学部・准教授)	69
(3) 林 光洋 (経済学部・教授)	70
(4) 武石 智香子 (商学部・教授)	85
(5) 中迫 俊逸 (商学部・教授)	90
(6) 平澤 敦 (商学部・教授)	92
(7) 新原 道信 (文学部・教授)	94
(8) 野宮 大志郎 (文学部・教授)	100
(9) 佐々木 弘世 (全学連携教育機構・客員教授)	102
(10) 三次 啓都 (全学連携教育機構・客員教授)	110
IV. スポーツ・健康科学プログラム	115
1. 設置の趣旨と教育の目的	115
2. 2016 年度演習科目担当者および履修者	116
3. プログラムスケジュール	116
4. プログラムの活動	117
5. 2016 年度までのスポーツ・健康科学プログラム修了生の主な就職・進学先	117
6. 演習教育活動	118
(1) 宮崎 伸一 (法学部・教授)	118
(2) 村井 剛 (法学部・准教授)	120
(3) 市場 俊之 (商学部・教授)	126
(4) 小峯 力 (理工学部・教授)	127
(5) 加納 樹里 (文学部・教授)	133
(6) 布目 靖則 (文学部・教授)	137
(7) 森 正明 (文学部・教授)	139
(8) 小林 勉 (総合政策学部・教授)	141
V. 地域・公共マネジメントプログラム	151
1. 設置の趣旨と教育の目的	151
2. 2016 年度演習科目担当者および履修者数	152
3. プログラムスケジュール	152
4. プログラムの活動	153
5. 2016 年度までの地域・公共マネジメントプログラム修了生の主な就職・進学先	153
6. 演習教育活動	154
(1) 牛嶋 仁 (法学部・教授)	154
(2) 工藤 裕子 (法学部・教授)	155
(3) 山崎 朗 (経済学部・教授)	157

(4) 斯波 照雄 (商学部・教授)	160
(5) 根本 忠宣 (商学部・教授)	163
(6) 御船 洋 (商学部・教授)	172
(7) 植野 妙美子 (理工学部・教授)	181
(8) 新原 道信 (文学部・教授)	184
(9) 黒田 絵美子 (総合政策学部・教授)	190
(10) 小林 勉 (総合政策学部・教授)	196
(11) 堤 和通 (総合政策学部・教授)	205
(12) 細野 助博 (総合政策学部・教授)	207

I. 環境プログラム

1. 設置の趣旨と教育の目的

社会経済システムのグローバルな拡大は、世界各地で深刻な環境・資源問題を引き起こしています。自然の浄化能力を超える環境汚染、自然が再生できない資源の枯渇、多くの生物種の絶滅など、人間の生存基盤である地球・地域の生態系は危機的状況にあります。資源やエネルギーを大量に利用して物質的に豊かな生活を追求した人間の諸活動が、地球温暖化から身近なごみ問題までさまざまな環境問題を引き起こしています。経済社会のグローバル化は、地球規模での持続可能な社会の構築を求めています。

こうした問題を解決するために、われわれの社会はどのような取り組みを必要としているのでしょうか。

環境・資源問題は人間活動の総体がもたらす問題であり、その解決には自然科学・社会科学・人文科学にまたがる学際的なアプローチが必要になります。気候変動問題の解決一つをとっても、気候変化の観測・予測などに関する自然科学的知識が必要であるばかりか、経済・社会への影響や二酸化炭素などの温室効果ガス排出をいかに抑制するか政策設計、開発途上国の経済発展や国際協定などに関する社会科学・人文科学的知識が必要になります。

さらに、二酸化炭素排出の大半を占める化石燃料燃焼に代わる、原子力、さらには風力、太陽光、バイオマスなどの再生可能エネルギーに関する総合的な技術開発、省エネ型住宅や都市およびそれを支える都市交通システムの構築などの脱温暖化の社会づくりには、文理融合的な自然科学・社会科学の教育とともに、人々のライフスタイルなど価値形成にも関連した歴史・文化・哲学などの人文科学の教育を受けた人材が求められています。

また、市場経済システムの中心的な活動主体である企業が、環境保全についての社会的責任を認識して積極的な取り組みを行っている今日、標準・モニタリング・評価や環境会計・環境監査・環境報告書などに関する環境経営および社会会計や国際会計などの知識をもった人材や、製品などのライフサイクル全体の環境負荷の最小化を目指すエコデザインなどの知識をもった人材、さらには環境保全活動を営利活動に結びつけることができるような企業家精神をもった人材が求められています。

以上から、環境に関する体系的で学際的な教育工房としての「環境プログラム」の意義はたいへん高いと考えられます。広い視野を持って、持続可能な経済社会の実現を目指して環境・資源問題に取り組もうという意欲をもった学生の参加を期待しております。

2. 2016 年度演習科目担当者および履修者数

氏名	所属学部	FLP演習A(2年次)	FLP演習B(3年次)	FLP演習C(4年次)	実施形態
牛嶋 仁	法学部	-	-	5	合併（環境C、国際協力C、地域・公共B・C）
星野 智	法学部	4	2	-	合併（A・B）
佐々木 創	経済学部	-	1	4	単独（B・C）
田中 廣滋	経済学部	-	3	4	合併（B・C）
薮田 雅弘	経済学部	-	-	5	単独（C）
西川 可穂子	商学部	4	2	-	合併（A・B）
大内 俊二	理工学部	-	3	1	合併（B・C）
谷下 雅義	理工学部	4	5	2	単独（C） / 合併（A・B）
盛田 富容子	文学部	3	-	-	単独（A）
ハリスン、ブライアン	総合政策学部	2	1	1	合併（A・B・C）
横山 彰	総合政策学部	2	-	2	合併（A・C）
合計		19	17	24	

3. プログラムスケジュール

- 4 月 履修ガイダンス
第一回部門授業担当者委員会
- 6 月 2017 年度募集に伴う総合ガイダンス
- 7 月 第二回部門授業担当者委員会
- 10 月 2017 年度募集に伴うプログラム別ガイダンス
学内活動（中間報告会）
- 11 月 2017 年度募集に伴う選考試験
- 12 月 第三回部門授業担当者委員会
学内活動（期末成果報告会）
- 1 月 第四回部門授業担当者委員会
- 3 月 FLP 修了発表
FLP 修了証書授与

4. プログラムの活動

①中間報告会

実施日： 2016年10月10日（月）16:40～18:10

実施施設： 中央大学 多摩キャンパス 5204 教室

担当者名： [発表者1] 星野ゼミ

実施内容： ゼミでの学び

担当者名： [発表者2] 大内ゼミ

実施内容： 多摩キャンパスの生物多様性

実施日： 2016年10月11日（火）16:40～18:10

実施施設： 中央大学 多摩キャンパス 11430 教室

担当者名： [発表者1] 田中ゼミ

実施内容： ESG（環境・社会・ガバナンス）の統合評価について

担当者名： [発表者2] 西川ゼミ

実施内容： 水質汚染（原発・化学物質汚染）が与える影響評価

②期末成果報告会

実施日： 2016年12月17日（土）9:15～

実施施設： 中央大学 多摩キャンパス 7203 教室

実施内容： 各ゼミによる年度活動報告

5. 2016年度までの環境プログラム修了生の主な就職・進学先

東北電力、トヨタ自動車、三井住友銀行、三菱東京UFJ銀行、三菱UFJ信託銀行、住友信託銀行、日本放送協会（NHK）、河北新報社、博報堂プロダクツ、リクルート、INAX、小松製作所、シャープ、東芝、住商スチール、住友重機械エンバイロメント、日立ビルシステム、富士ゼロックス、富士通、住友林業、日本電設工業、千代田化工建設、日本工営、住友化学、三井化学、凸版印刷、資生堂、イトーヨーカ堂、JTB 法人東京、エイチ・アイ・エス、小田急箱根ホールディングス、ヤマト運輸、NTT コミュニケーションズ、明治安田生命、りそなホールディングス、新日本有限責任監査法人、国家・地方公務員（農林水産省、公正取引委員会、会計検査院、北海道庁、東京都庁、埼玉県庁、栃木県庁、岐阜県庁、大阪市役所、日野市役所、習志野市役所など）、東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻、東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻、上智大学大学院地球環境学研究科、筑波大学大学院生命環境科学研究科、慶應義塾大学法科大学院、中央大学法科大学院、中央大学大学院（経済学研究科、理工学研究科、公共政策研究科）など

6. 演習教育活動

(1) 牛嶋 仁 (法学部・教授)

FLP 演習C

<テーマ>

環境法政策と地域・国際協力の諸問題

<授業の概要>

国境を越える環境法政策を素材に、社会における法の機能や公共政策の形成・実施等を事例により主体的に学んだ。

<活動内容>

演習では、グローバリゼーションとその地域との関係に焦点をあて、動態的な環境法政策の理解を深めた。そのため、海外研修（海外の大学との合同ゼミおよび実地見学・実態調査）を行い、一部学生が参加した。

対象テーマは、担当教員と相談した上で、受講者が決定し、昨年度のテーマを引き継いで、「2020年東京オリンピックに関する環境影響評価」とした。

春学期は、文献調査を中心に行い、秋学期は、上記テーマを小テーマに分類した上で、小テーマごとの報告・修正を繰り返し、合同のゼミ論文にまとめた。ゼミ論文は、2016年度FLP牛嶋ゼミ・ゼミ論文集にまとめている。

<実態調査>

以下の海外研修に一部学生が参加した。

対象演習：演習C

実施日：2016年9月6日（火）～ 9月10日（土）

実施都市：バンコク（タイ）

実施施設：タマサート大学他

実施内容：別紙

成 果：以下により、学生のグローバル人材教育に寄与した。

- 1.熊本大学（法学部、大学院）、タマサート大学（法学部、人文学部日本語学科）と合同の学生交流を実施することができた。
- 2.国際自然保護連合、現地日本企業の工場など（以上、バンコク）日本にない関連施設を訪問、ブリーフィングを受けた。
- 3.白門会バンコク支部との交流会を開催した。

バンコク・ビエンチャン研修実施概要（別紙）

＊環境プログラム学生は、下記プログラムのうち、バンコクのみ参加した。

1. 研修の目的

本海外研修は、熊本大学大学院・法学部（引率・葉陵教授、本学大学院修了）と合同で、本学学生がタイ・タマサート大学、ラオス・ラオス国立大学学生と交流するとともに、バンコク、ビエンチャン所在施設を訪問することにより、学生の知見と経験を深め、環境法政策及び法律学・政治学の学習効果を向上させるために行った。

2. 研修の意義

タマサート大学及びラオス国立大学は、本学と交流協定がある他、タマサート大学には、本学事務所もおかれているなど本学と関係の深い大学である。今回の本学学生の訪問は、昨年引き続き、タマサート大学Narong Jaiharin法学部長、Naphat Sorrat法学部長補佐（本学大学院修了）、Amnat Wongbandit教授（環境法）、Warrington教授（日本語）等の援助により実現した。今回の訪問により、本学と同大学との関係がますます進展したと考えられる。牛嶋ゼミのラオス国立大学訪問は、今年度が初めてであり、これを機会にした今後の交流が期待された。

研修では、タマサート大学の2キャンパス訪問の他、研究計画記載（下記4参照）のとおり、バンコク所在施設3箇所（国際環境NGO、企業、文化施設）を訪問する他、白門会バンコク支部の懇親会に参加し、それらの経験も、学生にとっては、今後の学習を進める上で、貴重な経験になったと考えている。

3. 研修前後の学修計画と期待される効果

法学部環境法ゼミは、春学期の授業及び夏季休暇において、英語の報告準備や各機関訪問準備を行っている。研修後（秋学期）は、研修の成果をまとめる作業として、学生のグループによる調査・報告を中心に演習とゼミ論文執筆を行う予定である。FLP演習は、4年生における就職活動のため、春学期は、進んでいないが、研修を利用して演習論文を執筆する予定である。

本研修は、学内外の各種プログラムとの相乗効果により、学生のコミュニケーション能力や基礎学力について、加速度的成長を期待することができる。

4. 研修計画

（1）タマサート大との交流

タマサート大との交流は、3つの要素に分けて行った。第一に、ランシット・キャンパスにおける交流のうち、環境法のアムナート教授が参加するセミナーである。本学学生が環境法に関する報告を行った（英語）。第二に、ランシット・キャンパスにおける交流のうち、日本語学科ワリントン教授、学生とのセミナーである。時事的なテーマについて議論した（日本語、英語）。第三に、タープラチャン・キャンパスにおいて破産法のナパット講師（本学大学院修了）及び大学院生によるキャンパス案内である（日本語、英語）。

交流においては、必要に応じて、引率教員が通訳した。

(2) 各機関、文化施設訪問

バンコク、ビエンチャン各機関を訪問して、その職務およびその現状と課題について説明を受けた。

文化施設の訪問によって、文化の多様性とその保存など政策課題について知見を深めた。

(3) 日程

9月6日	東京ーバンコク着 熊本大学参加者との懇親会
9月7日	IUCN（国際自然保護連合）アジア事務所訪問 タマサート大訪問（タープラチャン・キャンパス） 法学部教員・院生による案内
9月8日	タマサート大訪問（ランシット・キャンパス） 法学部および日本語学科教員・学生と交流
9月9日	白門会バンコク支部紹介による日系企業工場 （エンケイタイ http://www.enkeithai.co.th/ ）訪問 白門会バンコク支部懇親会参加（法学部酒井ゼミも参加）
9月10日	アユタヤ見学
9月11日	学生7名は、バンコクービエンチャン着。タート・ルアン見学
9月12日	ラオス国立大学訪問（日本語学科学生との交流会）
9月13日	ラオス・日本法教育研究センター訪問 JICA法律人材育成強化プロジェクト
9月14日	都市水環境改善プロジェクトまたは都市開発管理プロジェクト 国立博物館見学、ラオス・タイ友好橋・ブッダパーク見学 ビエンチャン21時30分発日本等へ

以上

（２）星野 智（法学部・教授）

FLP演習A・B

<テーマ>

環境政治とガバナンス

<授業の概要>

環境政治についての基本的な文献を購読することを通じて、各国および地球社会に生じている環境問題への取り組みを研究する。森林破壊、大気汚染、水質汚染、河川・海洋汚染、地球温暖化、オゾン層破壊、生物多様性喪失、有害廃棄物の越境移動などへの取り組みを考察し、そこでのガバナンスとレジームの構造を検討する。環境政治は、基本的には、環境破壊の歴史、グローバル、リージョナル、ナショナル、ローカルな領域での環境政策や環境運動、資源をめぐる紛争などを主な対象としている。授業では、これらの問題を取り上げたい。

<活動内容>

今年度、FLP 環境の星野ゼミは、環境政治論という視点から、主に、環境問題からみた世界歴史、環境ガバナンスと環境レジーム、環境保護運動などを取り上げた。前期は、テキストとして、星野智『環境政治とガバナンス』（中央大学出版部）を使って、世界システムと地球環境問題、環境政治とデモクラシー、環境政治のグローバル化、地球環境政策と環境 NGO、ドイツの環境政治と環境政策、EU の環境政策、アジア太平洋地域の環境ガバナンスなどを取り上げた。

夏休みは、海外での実態調査を実施した。

後期は、前期のテキストの触れられなかった部分を使い、東アジアの環境ガバナンス、北米自由協定と環境ガバナンス、地球環境問題と UNEP などを取り上げ、その後、学生の自由テーマで報告してもらった。学生の自由研究のテーマは、生態系のメカニズム、物流とエネルギー・環境問題、食品残渣とその再利用政策、アメリカにおける絶滅危惧種の再生と生態系、気候変動など、多岐にわたった。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習A・B

実施日：2016年9月6日（火）～ 9月10日（土）

実施都市：北京（中国）

実施施設：清華大学・世界遺産

実施内容：中央大学とも協定ある中国北京の清華大学を訪問し、清華園という歴史的な公園でもあるキャンパスや施設を見学し、清華大学の学生との交流を深めた。学生交流の場では、中国の環境問題についての意見交換を行い、中国の大気汚染、水質汚濁、廃棄物問題、気候変動対策などについて議論した。また北京の世界遺産、頤和園、万里の長城、故宫博物院などを見学し、中国の歴史と自然に触れた。

成果：まず中国の環境についての現状を直接的に体験することによって、日本における中国の環境に関する報道の内容を自ら検証することができた。とりわけ大気汚染

とPM2.5の状況に関しては、実感したようである。また水問題については水道水を直接飲用に供することを避け、ミネラルウォーターを飲用したという体験は、中国の飲料水の現状についての理解を深めた。何よりも成果として挙げることができるのは、清華大学の学生との意見交換であった。中国の環境問題の現状について、ざくばらんに意見交換ができたという点は、学生にとってたいへん有益であった。最後に、中国の世界遺産の見学についても、中国の自然と歴史を実際に学ぶことができ、中国についての認識を深めることができた。

(3) 佐々木 創 (経済学部・准教授)

FLP 演習 B

<テーマ>

リユース（再使用）について学際的に研究し、実践しながらリユース促進策を立案する

<授業の概要>

これまで日本の循環型社会の形成における政策・施策はリサイクル関連法令を中心に実施されてきました。しかし、平成 24 年 4 月に閣議決定された第四次環境基本計画において、「リユースに係るビジネスの市場につながるような環境を整備し、ライフスタイルの変革を目指す」ことが初めて言及されており、今後リユース関連施策が立案されることになると考えられます。

リユースの経済活動に着目すると、従来リユースは新規需要の抑制としてマイナスな活動として捉えられてきましたが、近年では新商品を取り扱う小売店が、売上の相乗効果があるとしてリユース商品を取り扱う事例が増えているなど変化しています。

また、リユースの環境負荷削減効果に着目すると、リユースをすることは新規投入資源や最終処分量の削減が見込める一方で、省エネ性能に劣る製品を長期使用することで環境負荷が増加します。

このようなリユースの経済的、環境的側面について学際的に研究を行うだけでなく、実際に施策や事業を実施している環境省、自治体、リユースショップ等へのヒアリング、また自らもリユースの取組を実践する中で、リユースの促進策を検討していきます。

<活動内容>

佐々木創ゼミは、リユースの促進策を検討している。この検討過程では、リユースの経済的側面、環境的側面、関連政策などを学際的に研究し、課題を解決していくための理論や分析手法について環境経済学を中心に学習した。

5 月 30 日に第 3 回リユース市の報告会を実施し、八王子市、環境省、三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング、中央大学職員等の外部関係者に対して、第 1～3 回のリユース市の総括を報告した。主な内容は以下の通りである。

- 第 3 回リユース市の回収物品は 228 品（昨年比 156%）のうち 159 品を提供し、49 品をリユースショップへ引渡し、廃棄は 20 品目。これは廃棄物削減効果では約 1.2 トンの粗大ゴミを削減でき、八王子市における年間粗大ゴミ再生量 117 トンの約 1%に相当する。
- 八王子市との 3 年間のモデル事業の成果として、大学関係部局、ボランティアセンター・生協・管弦楽部との関係構築により、大学内で自立してリユース市を実施するという目標は 2015 年度の最終年度に達成できた。
- 3 年間のリユース市の成果として、リユース市マニュアルを HP で公開し、八王子市と同様に学園都市である福岡市、町田市、江別市の担当者より実施方法などのヒアリングを受けるなど、一定の波及効果があった。
- しかし、当初より課題であったマンパワー不足に関しては、ボランティアセンターの協力、チラシの配布、ポスター掲示、SNS での広報、各学部での協力など、想定される手段を全て

講じたが、必要とするボランティア人数の確保は困難であった。

- ボランティア人数の確保のため、他の自治体が実施しており、学生が就活に活用可能な「学生ボランティアの認定制度」を八王子市に打診したが固辞され、持続可能なボランティア人数の確保の目途が立たないため、2015年度を持って当リユース市は中止することと決定した。
- なお、2017年度を目途に再開を目指して協議は継続している。

FLP演習C

<テーマ>

環境問題を学際的に分析し、解決策を検討する

<授業の概要>

履修生各個人が課題とする環境問題を設定し、卒業論文を作成します。

本演習の具体的な到達目標は以下の2つであり、3年間の演習での取り組みの集大成として履修生各個人が課題とする環境問題を設定し、卒業論文を作成した。

1. 環境問題の分析枠組みについて経済学、政策学、行政学、法学、工学などの学際的な理解をすること。
2. 多種多様な環境問題の中から、自ら課題を設定し、その課題を改善する具体的な政策提案について、自らの考えを論理的に表現できるようになること。

履修者が作成した卒業論文のテーマは、以下の通りである。

- 少子高齢化の日本農業 ～若者が参入しやすい農業になるには～
- 若者の車離れ
- 中野区における空き家対策の提案
- 廃棄物の共同収集による静脈物流の促進

(4) 田中 廣滋 (経済学部・教授)

FLP演習B・C

<テーマ>

環境と市場経済

<授業の概要>

グローバル化された経済社会のなかで地域および企業は持続可能性を実現しなければならない。この目標を達成するためには、公民のパートナーシップが効率的に実行されなければならない。本演習の目標は地域と企業が協働して持続可能な社会を実現するシステム設計を容易にする分析手法を習得することである。

グローバル市場において引き起こされた問題は単独の国家で対応することは、不可能な状況になっており、パリ協定などの国際的な国家間の協力の枠組みが必要になっている。地球規模の課題として環境問題の重要性は、温暖化問題だけでなく、資源や廃棄物など広い範囲のテーマにおいて認識されなければならない。本年度は、環境問題との関連においてグローバル市場のダイナミズムを特徴づける環境技術のイノベーションや企業の社会的責任の議論の基本的な考え方を学ぶ。

経済社会のグローバル化、地方分権などに対応して、地域あるいは企業がそのガバナンスを実施するためには、それぞれの主体は自らの課題を正確に評価して、その分析結果に基づく目標あるいは計画を明確に設定して、地域あるいは組織の能力を結集してその実現に取り組むことが不可欠である。多数のステークホルダーと良好な関係を築いていかななければならない、多数のステークホルダーから構成される社会において、ガバナンスの主体である自治体や企業によって推進される成果はこの主体の活動に対応するステークホルダーの活動水準によって規定される。自治体や企業が持続可能なガバナンスが実現できるかどうかは、住民、従業員、取引先、産業界、中央政府などステークホルダーの反応あるいは評価によって決定される。いずれかのステークホルダーからその活動内容が拒絶される判定を下された自治体や企業の執行部はガバナンスの主役としての座を追われるか、あるいは、当該の地域あるいは企業自体の存立そのものが危機に直面するといっても過言ではない。このように、持続可能な社会のための管理経営は個々の主体のリスク管理にも役立つのである。授業の中では、日本と米国、中国などの経済と環境に関する最新のデータの収集と分析を行いながら、企業と地域の持続可能性を考察する。また、英国を中心として、EUの地球環境問題への取組を紹介する。

<活動内容>

田中ゼミは、2006年に国連によって発表された責任投資原則PRIの狙いとそれを推進する役割を演じているGSIAの活動の検証を行った。特に、ESGは毎年10%以上の成長の実績を示しており、世界の投資基金の安定的な運用に関して、重要な標準となっている。本ゼミはこのESGにおける次の文章で要約されるような性質の理解を得るために、種々の角度からの討論を行った。

The post industrial society tends to be declining the weight of large scale manufacturing industries in the world economies. The regions and the populations

benefited from the economic growth are shrinking clearly¹. The globalized markets have not only enlarged market economies but also appeared diversified consumers and suppliers. The corporation should communicate not only with large members of several stakeholders but also even with some anonymous stakeholders. The multinational corporations must be confronted with fierily competition for the global market and with market and social risks not to be anticipatable. They may become more vulnerable on the business troubles and are afraid of turning into the passive mind. The rapidly growing market systems have been distracting social and natural infrastructures. Although we must restore the sustainable economical, social and environmental systems, the social and environmental issues are recognized as global market and government failures and increase negative pressures on them. The prospects of global economies become to be depressed by foggy and risk full issues deeply. Since the global economies seem to be trapped to turn into the slow down trends apparently, we should attempt to clear up the cloud filled with many risks. The globally developed discussion on the sustainability seeks the construction of integrated global system for the sustainability².

Tanaka(2016) “The Sustainability Theorem in the ESG Mechanism” より

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習 B

実施日：2016 年 12 月 1 日（木）～12 月 5 日（月）

実施都市：マニラ（フィリピン）

実施施設：フィリピン大学ディリマン校周辺

実施内容：ジプニー（フィリピンで公共交通機関として使われている、約 20 人の乗客が乗ることができる小型バス）の実態調査

成果：フィリピン大学発着のジプニー路線を対象に、ジプニーの運転手 57 人に対しジプニーに関する聞き取り調査を実施して、次年度の卒業論文作成に必要なデータを入手することができた。

¹ Richardson, H. W. and C. W. Nam (eds) (2014) research many types of the shrinking cities.

² UNEP FI and UN Global Compact (2006) present a discussion on the principle of responsible investment.

(5) 薮田 雅弘 (経済学部・教授)

FLP 演習 C

<テーマ>

2016 年度の演習 C については、環境と地域発展を中心テーマとして卒業研究を行なった。

<授業の概要>

演習 C に関しては、卒研が中心となるので、各自のテーマに沿ってゼミ形式で議論を進めていく。

<活動内容>

卒研のテーマ設定；テーマ設定の動機に関する議論を行ったうえで、先行研究を調べ、レビューを行う。重要な作業なので、きっちりと議論を重ねる。その後、論文の章構成を確定し、記述作業に入る。文章の校正、脚注の書き方などを丁寧に確認する。議論を進めるために、問題意識を精査し、内容の整合性を見ながら進めていく。最終的に、2、3 年時の共同研究論文と卒研をまとめた冊子「2016 年度 中央大学 FLP 環境薮田ゼミナール」を 2017 年 3 月に刊行した。具体的な論文集の目次（総ページ数 134 頁）は、以下の様である。

目 次

●2014 年度共同論文

『佐渡におけるエコツーリズムの展開と環境保全：生物多様性保全と持続可能な地域発展』*加藤成貴（法）、沖星歌（法）、稲村行真（法） 高橋潤哉（経）、北野亜衣（経）、瀬尾千尋（総政）（*代表）

●2015 年度共同論文

『栃木市における蔵の街の景観保全と観光発展』*加藤成貴（法）、沖星歌（法）、稲村行真（法）高橋潤哉（経）、北野亜衣（経）、瀬尾千尋（総政）

●2016 年卒業研究論文

『古民家の価値について－活用と事業創造の観点から』稲村行真（法）

『日本における農業問題と政策の検討～持続可能な農業及び地域発展：栃木県を中心に～』沖 星歌(法学部)

『広島における日本の平和学習－日本における平和思想の展開と学び』瀬尾千尋（総合政策）

『金融機関における戦略的 CSR の位置付けと課題』高橋潤哉（経済）

（６）西川 可穂子（商学部・教授）

FLP演習A・B

<テーマ>

水環境を中心とした環境問題とその対策

<授業の概要>

本演習では主に水環境に焦点をあて、履修学生がグループに分かれて実態調査（フィールドワーク）を行い、分析をする。大学や研究所における現在開発中の最先端技術に関しても理解を深めるため、テーマに関連のある研究について、学会やシンポジウムの参加や大学や企業の訪問を通して、理解を深める。

演習の前半では、水とその利用について基礎的な知識を習得する。それと同時に環境問題が生じる原因とそれによってもたらされる影響を書籍、論文、記事などを読んで討論し、理解を深める。その後、中間報告として、一つテーマを選択して文献調査を行いまとめる。演習後半では、主に文献調査報告をした関連テーマの中から自分が最も疑問に思うことや調べたい研究対象を決める。その後、自分の研究目的を達成するために関連の企業や官庁・自治体などを訪ねたり、フィールドワークでデータを収集・分析したりして、活動をする。また、外部講師招聘による実態調査も予定している。詳細は、履修学生と相談し決定する。

<活動内容>

昨年に引き続き、以下のテーマについて活動を行った。

テーマ１：都市河川・湖沼における抗生物質汚染による耐性菌調査

テーマ２：東日本大震災における福島原子力発電所による海洋放射線汚染の風評被害について
前期は、指定図書 “Fukushima Nuclear Accident”（英文）の輪講も行った。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習A

実施日：2016年8月29日（月）～8月31日（水）

実施都市：滋賀県大津市・高島市

実施施設：大津市・高島市新旭町針江

実施内容：フィールドワーク（他大学と共同）として、滋賀県琵琶湖での水質調査および針江地区の井戸水利用、農薬を使わない水田耕作の見学を行い、河川から琵琶湖へ流入する栄養塩の供給源である高島市の山の状態を視察した。

成果：琵琶湖ではここ数年、家庭雑排水からのリンの制限を徹底しているおかげで、アオコの発生がおさえられているが、同時に魚の漁獲量も減少しているようだ。また、近くの針江地区では、きれいな地下水を生活の中で使用しており、これらの水を使った生活について見学をした。次の日は、琵琶湖に流入する栄養塩の元になっている森林公園くつきの森への見学を行った。くつきの森では現在鹿が増えすぎて、レインディアラインが観察された。レインディアラインとは、鹿の頭より下の草がほとんど食べつくされて、肌木になっている

る状態を指す。また、新芽や若木が食べつくされるため、新たな樹木が育たず、正常な樹木の変遷交代が難しい状態であることが指摘された。



全体写真



針江地区 井戸水利用見学 農薬を使わず生態系を利用した水田耕作の見学

対象演習：演習A・B合同

実施日：2016年11月26日（土）

実施都市：東京都目黒区

実施施設：東京共済病院周辺

実施内容：水試料のサンプリング

成果：水試料を河川から採取し、生菌数の計測、および耐性菌検査を実施し、抗生物質に耐性を持つ菌について、薬剤とその耐性の強さについて調査を行い、報告書へまとめた。また、フィールドワークの様子を中央大学教養番組「知の回廊」112回(2016年12月放映)「都市河川・湖沼の抗生物質汚染の拡大と耐性菌の出現」で紹介した。

(7) 大内 俊二 (理工学部・教授)

FLP演習B・C

<テーマ>

我々にとって環境問題とは何なのだろうか？そもそも環境とは何なのだろうか？地球や自然は人間がいなくても地球・自然であるが、地球・自然がなければ人間の存在もない。つまり、人間が自らを地球・自然から一線を画した存在となったところから「環境問題」が始まったと考えられる。したがって、「環境問題」の本質は、地球・自然を人間がどのようにとらえ、かかわっているかという点にあると言えよう。今、このまま人間社会が発展していけばすぐに地球の限界を超えてしまう状況の中で、「環境問題」についてより深く理解することが求められている。

このような観点から、現在我々が直面している環境問題の根の深さを認識することがとりあえずのテーマとなる。最終的には、今後人間社会が進むべき方向を考えられるようにしていきたい。

<授業の概要>

環境そのものを理解する第一歩として、我々が持つ「自然あるいは環境のイメージ」について学習する。これまで、テーマパークなどに見られる明らかな作り物の“自然”とそうでない“自然”、そして我々が生活する場所の“自然”について考えてきた。今後は、実際に自分自身と“自然”との関係についても考察を加える。ただし、授業内容はその都度の議論の方向によって大きく変わる可能性が高い。

<活動内容>

本年度は、理工学部西田教授の在外研究に伴って西田ゼミとの合同で活動することになった。西田ゼミの諸君はこれまでのテーマであった中央大学多摩キャンパスの植生について引き続き調査を行うこととし、当ゼミとしては「子供の遊びと自然」という観点から調査を行うことにした。子供の遊びと遊び場は、「環境」や「自然」のイメージを決定する「原風景」の基礎となるものとして重要である。環境問題に取り組み、その解決策を探るための議論には、各自が、あるいは人々の集団が、持つ「環境」や「自然」のイメージがどのようなものであるかを理解しておく必要がある。今年は、仙田満「子どもとあそび」(1992、岩波新書)、岩本廣美「子どもの心像環境における「身近な地域」の構造」(1981、地理学評論 54) 購読と、実際の子どもの遊びと遊び場の現状を見学・調査することを中心とした。活動の結果は、それぞれ年末の環境 FLP プログラム期末成果報告会にて発表した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習B・C

実施日：2016年4月16日（土）

実施都市：東京都八王子市

実施施設：中央大学 多摩キャンパス

実施内容：FLP環境プログラムのスプリングスクールに参加。多摩キャンパスの植生状況を観察した。

成 果：ここ3年ほどこの時期に自然と環境を考える手始めとして、多摩キャンパスの植生、地質、地形などの観察をこの時期に行ってきたが、今回は西田ゼミのゼミ生が中心となって案内したので、多摩キャンパスに分布する植物についてより深く理解することができた。人工的改変の影響や外来植物をどう考えるのかなど、いろいろな問題を考えるきっかけともなった。

対象演習：演習B・C

実 施 日：2016年5月5日（木）

実施都市：東京都文京区

実施施設：中央大学 後楽園キャンパスから柳町小学校付近

実施内容：岩本廣美(1981)の研究対象地域である文京区立柳町小学校の子どもの遊び環境（特に児童公園）を見学・調査した。

成 果：岩本の研究以来すでに35年たっており、子どもたちの遊び環境がどのようなになっているのかを見て歩いた。公園の整備は進んでいたが、休みの日にもかかわらず子供たちの姿はあまりなく、校庭でのスポーツとしての野球をやっているところや施設の多い大きな公園での遊びの様子が見られたくらいであった。少子化に伴う遊び仲間の減少、塾や習い事に時間をとられて遊び時間がなくなったこと、ゲームなどの室内遊びが多くなったこと、などこの35年間の変化が出ているようであった。しかし、大きな公園で遊んでいた子供たちでも、植え込みの中にもぐって泥んこで遊んでいた集団が（本来はしてはいけないはず）なんだか楽しそうにしている様子が見受けられ、やはり町の整備に伴って子供たちが遊べる自然スペースがなくなったことも子どもの遊びに大きな影響をもっているのではないかと考えた。環境問題の正しい理解のためには子どもの遊ぶ自然スペースがなくなることが大きな問題となるのではないだろうかと考えさせられた。

（８）谷下 雅義（理工学部・教授）

FLP演習A・B

<テーマ>

エコツーリズムを通じて農山漁村の未来を考える

<授業の概要>

持続可能な地域社会について考える際には、都市と農山漁村をセットで議論する必要がある。都市で十分生産できない資源である食やエネルギーを提供してきたのが農山漁村である。これまでこうした地域では過疎化が進み、地方財政の悪化とともに、「撤退」や「たたむ」という議論が行われている一方で、地域にある資源：森川里海の連環を強化して、新しい暮らし方がはじまっている場所も少なくない。農山漁村で十分ないのは、「仕事」であるが、その一つとして「観光、ツーリズム」があげられる。このゼミでは、「エコツーリズム」に着目し、また農山漁村のフロンティア地域として石川県能登半島や宮城県南三陸町を取り上げ、持続可能な地域社会について、現地の方から学び、一緒に考える。

<活動内容>

前 期：エコツーリズムとは何かについての学習（4～7月）

高峰博保氏（ぶなの森） 高野千鶴氏（日本エコツーリズム協会）

をお招きしての学習会

能登・黒川地区についての事前学習（6月）

能登・黒川地区でのゼミ合宿（8月）

鉢伏山エコツーリズム、公民館活動、天領庄屋中谷家の学習

ゼミ合宿のふりかえり（7月）

夏休み：能登・黒川地区でのゼミ合宿

公民館活動 天領庄屋中谷家を拠点にした活動 海のアクティビティ体験

後 期：夏休みの活動のふりかえり（9～10月）

エコツーリズム学生大会の発表準備（11月）

農山村漁村集落の持続可能性に関連するテーマでのグループ学習と発表（10～1月）

春休みのゼミ合宿の事前学習・ゼミ生による連絡調整・企画立案（1月）

春休み：能登・黒川地区でのゼミ合宿

（現在、最終調整中）

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習A・B・C

実 施 日：2016年8月10日（水）～ 8月12日（金）

実施都市：石川県能登町

実施施設：ぶなの森

実施内容：鉢伏山エコツーリズム、公民館活動、天領庄屋中谷家の拠点整備、農作業体験など

成 果：活動を報告書としてまとめている。

F L P 演習 C

<テーマ>

エコツーリズムを通じて農山漁村の未来を考える

<授業の概要>

前期はゼミ論文のテーマ及び研究計画に基づく先行研究整理やデータ収集を行い、後期はゼミ論文の中間報告と作成を行います。

<活動内容>

前 期：先行研究レビュー(4～7 月)

夏休みの南三陸エコツアーの企画立案 (6、7 月)

夏休み：能登・黒川地区でのゼミ合宿 (8 月)

南三陸エコツアーの企画実施 (9 月)

後 期：夏休みのふりかえり (9 月)

学部の卒業論文 (1 名) および環境と健康に関する先行研究レビューのまとめ (1 名)
(10～1 月)

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習A・B・C

実 施 日：2016年8月10日（水）～ 8月12日（金）

実施都市：石川県能登町

実施施設：ぶなの森

実施内容：鉢伏山エコツーリズム、公民館活動、天領庄屋中谷家の拠点整備、農作業体験など
成 果：活動を報告書としてまとめている。

（９）盛田 富容子（文学部・兼任講師）

F L P 演習 A

<テーマ>

都市環境マネジメント

<授業の概要>

環境マネジメントの観点から都市環境をめぐる様々な問題を整理し、持続可能な都市構造のあり方について考察する。持続可能な都市の基本的概念やその計画手法等について、基本的な文献を講読し、内容に関するディスカッションによって理解を深める。また、国内外の事例研究を通じて、持続可能な都市づくりについて基本的かつ総合的な議論を進めていく。

<活動内容>

盛田ゼミは、本年度から始まった新しいゼミであり、まだ活動実績もなく、履修者も全員初学者であったことから、これを考慮して、都市の環境問題について基礎的知識を習得することに重点を置き、年間を通して、関連文献等の講読とそれらを題材として様々な課題・論点について各自の専門領域とも関係づけながら議論を行った。後期には、都市環境の現状と課題について認識と理解を一層深めるために国内外の事例研究も行った。議論を通じて各自の都市環境問題に対する意識や、課題解決に向けた都市政策理念としての持続可能な都市への関心が相当高まったようである。これを基に、次年度に向けて、各自関心のあるテーマを絞り込むことを春期休暇中の課題とした。

また、本ゼミでは、毎回「今週のトピック」として、担当者に１週間に起きた環境関連のニュース等から関心のある出来事を選んでもらい、ゼミの最初の 15 分間でプレゼンテーションを行っている。「パリ協定」や「AI（人工知能）と環境問題」など様々な話題が取り上げられ、それについて議論を積み重ねていくことを通じて、多様な知識を共有する機会が得られたのみならず、分析能力やコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力の向上にも大いに役立つものとなった。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習A

実施日：2016年8月24日（水）～ 8月25日（木）

実施都市：宮城県松島町

実施施設：ホテル松島大観荘

実施内容：新しいゼミということもあり、ゼミ生同士の交流会も兼ねて、一泊二日の勉強合宿を行った。前期のゼミの内容を振り返り、各自課題を報告し合い、議論することで理解を深めた。

成果：今回の合宿は、ゼミ生同士お互いを良く知る機会となり、交流も一層深まったようである。また、各自の知識も向上し、ゼミの活動内容の理解を深めることができた。
なお、今回の宿泊先は、東日本大震災から５年が経過した町の様子を知りたいという

ゼミ生の希望もあり、宮城県松島町を選んだ。今回は実地調査が直接の目的ではなかったが、移動中の車窓から見る町の景色や人々の様子など、当地の様子を肌で感じ取り、災害による環境問題と都市政策のあり方について考えることができた。

(10) ハリスン・ブライアン (総合政策学部・教授)

FLP演習A・B・C

<テーマ>

Environmental studies: pollution control and environmental management

<授業の概要>

We will cover various aspects of environmental management and pollution and consider the countermeasures used; we will also look at sustainable approaches to energy supplies and general management of the environment (e.g. desertification).

<活動内容>

- ・ All work was conducted entirely in English.
- ・ Discussions were held in each class time, some of which were student-led and some instructor-led. As preparation for these discussions, the student was expected to read various materials in advance (copies of these were supplied by the instructor, and came from sources such as British newspapers).
- ・ A broad range of topics were covered. Examples were acid rain, the Chernobyl nuclear accident and nuclear power in general, coral reefs, ecotowns and the banning or restrictions on cars, over-fishing, resources underneath tropical forests and ecotourism, plastics in the oceans, problems of the Arctic and Antarctic, etc.
- ・ In addition to the regular classroom discussions, the students conducted individual library research under the guidance of the instructor in preparation for presentation both orally and in written form; the FLP-C student self-selected the topic of the environmental causes and effects of the drought in the Murray-Darling basin in Australia. Besides the final report, the student was required to produce regular progress reports. One other student prepared an in-progress report on the most suitable forms of renewable energy that would be suitable for Japan. The remaining two students also prepared short reports on self-selected topics.

(11) 横山 彰 (総合政策学部・教授)

FLP演習A・C

<テーマ>

環境政策論

<授業の概要>

【演習A】

日本が実施している環境政策について、法律・政治・経済・社会などの多角的視点から実証的に評価・検証し、政策改善案を考え論証します。その研究成果は共同論文にまとめて、12月上旬に実施する5大学環境経済学交歓セミナー（京都大学植田ゼミ・一橋大学山下ゼミ・慶應義塾大学細田ゼミ・同志社大学岸ゼミ・中央大学横山ゼミ）や12月中旬のISFJ（Inter-University Seminar for the Future of Japan: 日本政策学生会議）の場で発表討論して他大学との研究交流を行います。

【演習C】

演習Cでは、前年度までに5大学環境経済学交歓セミナーやISFJで発表討論した共同論文の研究を基礎に、個人で個別事例研究を行って卒業論文を作成します。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習A・C

実施日：2016年9月15日（木）～9月18日（日）

実施都市：新潟県津南町

実施施設：ニューグリーンピア津南

実施内容：総合政策学部横山ゼミと合同合宿

成果：合宿に参加した総合政策学部横山ゼミのOBたちや現役生の前で、演習Aの学生は12月の「5大学環境経済交歓セミナー」への提出論文草稿に関する研究発表のプレゼンテーションを行い、そして演習Cの学生は卒業論文の中間報告を行い、先輩たちから有益な指導を受け、後期における研究の課題を明確にした。

対象演習：演習C

実施日：2016年12月17日（土）

実施都市：東京都八王子市

実施施設：中央大学多摩キャンパス 11号

実施内容：5大学環境経済交歓セミナーの運営と意見交換

成果：5大学環境経済交歓セミナーは、京都大学・一橋大学・慶應義塾大学・中央大学・同志社大学の環境経済系5ゼミのインターゼミナールで、毎年11月下旬から12月上旬に開催される。今年は、京都大学の植田和弘教授が退官を迎えるため参加ゼミ生がなく、一橋大学山下ゼミ・慶應義塾大学細田ゼミ・同志社大学岸ゼミ・中央大学横山ゼミの4大学のインゼミとなるとともに、横山FLP演習Cは論文発表ではなく主催校と

して交歓セミナーの運営責任としての役割を果たした。この運営について、演習Cの学生は参加大学の教員たちから高く評価された。

対象演習：演習C

実施日：2017年2月16日（木）～2月18日（土）

実施都市：東京都渋谷区

実施施設：国立オリンピック記念青少年総合センター

実施内容：総合政策学部横山ゼミと合同合宿

成果：合宿に参加した総合政策学部横山ゼミのOB・OGたちや現役生及び2017年度演習A履修予定者の前で、演習Cの学生は卒業論文の最終報告を行った。さらに、演習Cの学生は、合宿を通じて、2017年度演習A履修予定者に対し有益な学習指導をした。

Ⅱ. ジャーナリズムプログラム

1. 設置の趣旨と教育の目的

本プログラムは、長谷川如是閑や杉村楚人冠といった日本の歴史に残る著名なジャーナリストを輩出した中央大学の伝統を継承し、ジャーナリズム全体のさらなる発展をこの中央大学から巻き起こすことを目的としている。

所属する学部で学ぶ専門知識と本プログラムのフィールドワークを融合させることにより、広い視野を持ち物事の本質を深く考察・分析・報告できる人材を育てる。さらには、企画力、文章力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力などの社会人基礎力を向上させ、ジャーナリズムの世界で活躍できる人材を育成する。

また、学生諸君が個々の目的と将来に向けてのキャリアデザインを描けるように、担当教員はマスメディア界を含めた広い社会の要請に十分応えられる指導と教育を行う。



長谷川如是閑



杉村楚人冠



山根真治郎

中央大学は、1909年に新聞学科を設置。日本では、最も早くジャーナリスト養成に取り組んだ大学のうちの1つである。これまで、東大、早慶とともに、マスコミ業界に多数の人材を輩出してきた。また、戦前に、「新聞学院」という民間のジャーナリズムスクールがあったが、それを設立した山根真治郎も、中央大学出身であった。この「新聞学院」はのちに、日本新聞協会付属の機関となり、終戦まで続いた。

戦後も駿河台にキャンパスがあった時代には、朝毎読の新聞社の各部長、デスクに必ず1人は中大出身者がいたという時代もあるほど、ジャーナリストを輩出していた。しかし、1978年の多摩全面移転以降、マスコミ志望者の減少、大学としての公的教育プログラムの消滅によって、ジャーナリストの道へ進む学生数が激減した。権力を監視し弱者の声を代弁し社会に対し大きな影響力をもつジャーナリストを中央大学が育成することは、大学のみならず民主的な社会を構築する上で極めて重要である。

このため、2003年に「FLP ジャーナリズムプログラム」を設置。戦前戦後に渡って、優秀なジャーナリストを輩出してきた中央大学の名誉と勢いを回復せんとするものである。実際、2003年以降、このFLPの演習を受講した後、朝日・毎日・読売などの新聞業界、NHKや

民放などの放送業界、電通などの広告業界、講談社などの出版業界などのマスコミへ就職した学生の数は、100 人以上に及んでおり、本プログラムは確実に実績を出している。

2. 2016 年度演習科目担当者および履修者数

氏名	所属学部	FLP演習A(2年次)	FLP演習B(3年次)	FLP演習C(4年次)	実施形態
臼井 敏男	経済学部	5	5	－	単独 (A・B)
鈴木 俊幸	文学部	5	4	1	合併 (A・B・C)
辻 泉	文学部	7	7	7	合併 (A・B・C)
松田 美佐	文学部	8	7	10	合併 (A・B・C)
市川 哲夫	総合政策学部	11	11	8	単独 (A) /合併 (B・C)
大橋 正和	総合政策学部	1	－	11	単独 (A・C)
松野 良一	総合政策学部	13	14	10	単独 (A・B・C)
合計		50	48	47	

3. プログラムスケジュール

- 4 月 履修ガイダンス
第一回部門授業担当者委員会
- 6 月 2017 年度募集に伴う総合ガイダンス
- 7 月 第二回部門授業担当者委員会
- 10 月 2017 年度募集に伴うプログラム別ガイダンス
- 11 月 2017 年度募集に伴う選考試験
- 12 月 第三回部門授業担当者委員会
学内活動（期末成果報告会）
- 3 月 FLP 修了発表
FLP 修了証書授与

4. プログラムの活動

期末成果報告会

実施日： 2016年12月17日（土）13:10～

実施施設： 中央大学 多摩キャンパス 11430 教室

実施内容： 各ゼミによる年度活動報告

5. 2016年度までのジャーナリズムプログラム修了生の主な就職・進学先

日本放送協会（NHK）、テレビ朝日、中部日本放送、東海テレビ放送、朝日新聞社、読売新聞社、毎日新聞社、中日新聞社、中国新聞社、岐阜新聞社、新潟日報社、共同通信社、NTT データ、電通、小学館、ベネッセコーポレーション、文藝春秋、光文社、白泉社、ダイヤモンド社、有斐閣、WOWOW、東北新社、京王エージェンシー、読売広告社、IMAGICA、PRAP JAPAN、デジタル・アドバタイジング・コンソーシアム、学情、リクルート、みずほフィナンシャルグループ、日本銀行、三井住友銀行、三菱東京 UFJ 銀行、千葉銀行、京葉銀行、八十二銀行、日本政策金融公庫、東京海上日動火災保険、損害保険ジャパン日本興亜、野村総合研究所、野村証券、富士通、リコー、凸版印刷、野村不動産パートナーズ、ヤフー、全日本空輸、ANA エアポートサービス、日本旅客鉄道、JTB 首都圏、地方公務員（県庁・市役所など）、慶應義塾大学、早稲田大学大学院政治学研究科 ジャーナリズムコース、中央大学大学院（文学研究科、総合政策研究科）など

6. 演習教育活動

(1) 臼井 敏男（経済学部・客員講師）

F L P 演習 A

<テーマ>

タフで心優しい新聞記者を育てることです。

<授業の概要>

授業は①作文の講評②日々の新聞記事の分析③入社試験を突破するための技術を磨くことの3本立てです。①の作文は毎週、宿題として800字を書いてもらいます。テーマは新聞社、通信社、NHKの過去の入社試験の課題です。作文を書く狙いは、一つには分かりやすく論理的な文章を書く訓練をすることです。もう一つは、自分を見つめ、社会の問題を深く考えることです。②では、いい記事と悪い記事、特ダネ、ユニークな記事などを取り上げます。③では、現代の社会の問題の考え方、エントリーシートの書き方、面接での答え方などを指導します。いずれも講師が学生に質問して、学生に自ら考えてもらうのが授業の特徴です。

講師は38年間、朝日新聞社で社会部記者、週刊誌記者、社会部長、論説委員を務めました。その経験を学生に伝えたいと思っています。

<活動内容>

受講生は5人。ゼミでは、1年間に29本の作文を書いてもらった。毎週、講師がそれぞれの作文について添削したうえで講評した。

作文の手本は朝日新聞の「天声人語」、読売新聞の「編集手帳」、毎日新聞の「余録」などの新聞のコラムだ。とはいえ、新聞のコラムの構成をそっくりまねるわけではない。新聞のコラムは通常、書物や映画、ことわざなどを引用して書き出し、社会で起きている問題と重ねる。ゼミ生に書いてもらう作文では、前半で自分の体験を書いてもらう。体験のなかには自分で取材した経験も含まれる。自分の体験をどうやって社会問題につなげていくかが腕の見せ所だ。

なぜ自分の体験を書くのか。一つは、自分がどういう人間であるのかを読者に知らせるためだ。もう一つは、自分の体験を書けば、ほかの人とは違う独自の作品をつくれるからだ。自分はどんな人間であり、どんなことをしてきたのかを伝えることは、新聞社や放送局の入社試験に合格するために欠かせない。

作文の後半では新聞のコラムと同じように社会問題を書いてもらう。自分の話だけでなく社会問題を扱うのは、記者をめざす者として当然だからだ。

作文の29本のテーマは次の通り。

①日本社会の歪み②税③坂④色⑤退⑥こんなものいらない⑦男女格差⑧食のこれから⑨人工知能⑩隣人といかに付き合うか⑪指導者⑫門⑬備える⑭地図⑮朝日、読売、日経、共同のインターンシップのエントリーシート(ES)＝夏休みの宿題⑯人口減社会⑰声⑱ヘイトスピーチ⑲尊⑳災前・災後㉑選㉒学力㉓わたしが大切にしているもの㉔譲る㉕豊㉖大学㉗壊す㉘分断㉙順境と逆境

ゼミの2本目の柱として、日々の新聞記事を取り上げて、議論してもらった。議論の軸は主に「いい記事か、悪い記事か」「記事からなにを読み取るのか」「記事で取り上げている出来事についてどう考えるのか」だった。取り上げた記事や議論した主な内容は次の通り。

▽死人欄、皇室記事で各新聞社の違いはなにか。

▽各新聞社は自画像をどう描いているのか。

▽「衝突続く辺野古 両者の主張は」という記事をどう読み解くのか。

▽社説について、論説委員室で意見が対立したらどうするのか。社説は時代によって変わるのか。一般記事は社説の主張に合わせるのか。社説で皇室を批判したことがあるのか。

▽「子ども食堂広がる」の記事をどう読み解くか。

▽「同時進行ルポ 漂う民」をどう読み解くのか。

▽「医療ルネサンス」と「患者を生きる」はどちらがよいか。

▽「中国強制連行」で朝日と読売の社説はどう違うのか。

▽相模原殺傷事件で警察の実名発表拒否をどう考えるのか。

▽「盲導犬の男性 線路に転落」の記事をどう読み解くのか。

このほか、テレビ局と新聞社の違いはなにか、テレビ局と新聞社は権力との距離にどう違いがあるのかを議論してもらった。

<講演会>

前期では、講師が担当しているインターンシップ新聞社コースの受講生で朝日新聞と読売新聞に内定した4年生2人来てもらい、就活のコツを話してもらった。

後期には、読売新聞の前採用担当デスク、朝日新聞の採用担当部長をそれぞれ招き、ESや作文の書き方、面接の受け方を語ってもらった。

3回の講演会のあと、引き続き高幡不動や多摩センターで懇親会を開いた。

F L P 演習 B

<テーマ>

タフで心優しい新聞記者を育てることです。

<授業の概要>

授業は①作文の講評②日々の新聞記事の分析③入社試験を突破するための技術を磨くことの3本立てです。①の作文は毎週、宿題として800字を書いてもらいます。テーマは新聞社、通信社、NHKの過去の入社試験の課題です。作文を書く狙いは、一つには分かりやすく論理的な文章を書く訓練をすることです。もう一つは、自分を見つめ、社会の問題を深く考えることです。②では、いい記事と悪い記事、特ダネ、ユニークな記事などを取り上げます。③では、現代の社会の問題の考え方、エントリーシートの書き方、面接での答え方などを指導します。いずれも講師が学生に質問して、学生に自ら考えてもらうのが授業の特徴です。

講師は38年間、朝日新聞社で社会部記者、週刊誌記者、社会部長、論説委員を務めました。その経験を学生に伝えたいと思っています。

<活動内容>

受講生は5人。ゼミでは、1年間に29本の作文やエントリーシートを書いてもらった。毎週、講師がそれぞれの作文について添削したうえで講評した。

作文の手本は朝日新聞の「天声人語」、読売新聞の「編集手帳」、毎日新聞の「余録」などの新聞のコラムだ。とはいえ、新聞のコラムの構成をそっくりまねるわけではない。新聞のコラムは通常、書物や映画、ことわざなどを引用して書き出し、社会で起きている問題と重ねる。ゼミ生に書いてもらう作文では、前半で自分の体験を書いてもらう。体験のなかには自分で取材した経験も含まれる。自分の体験をどうやって社会問題につなげていくかが腕の見せ所だ。

作文の後半では新聞のコラムと同じように社会問題を書いてもらう。自分の話だけでなく社会問題を扱うのは、記者をめざす者として当然だからだ。

作文のほか、前期ではインターンシップに応募するためにエントリーシートを書いてもらった。インターンシップで体験する街ダネ取材の練習もしてもらった。

作文やエントリーシート(ES)、街ダネの29本のテーマは次の通り。

①ES＝記者になりたいきっかけ。記者になったら、どんな仕事をしたいか。学生時代に力を入れたこと②ES＝各社で評価する記事と評価しない記事③ES＝一番つらかったこと。感動したこと。自分の好きなところときらいなところ④街ダネ取材⑤街ダネ取材⑥色⑦男女格差⑧食のこれから⑨人工知能⑩隣人といかに付き合うか⑪指導者⑫門⑬備える⑭地図⑮前年の新聞社、通信社、NHKの入社試験のES(夏休みの宿題)⑯人口減社会⑰声⑱ヘイトスピーチ⑲尊⑳災前・災後㉑選㉒学力㉓わたしが大切にしているもの㉔譲る㉕豊㉖大学㉗壊す㉘分断㉙順境と逆境

ゼミの2本目の柱として、日々の新聞記事を取り上げて、議論してもらった。議論の軸は主に「いい記事か、悪い記事か」「記事からなにを読み取るのか」「記事で取り上げている出来事についてどう考えるのか」だった。取り上げた記事や議論した主な内容は次の通り。

▽死人欄、皇室記事で各新聞社の違いはなにか。

▽各新聞社は自画像をどう描いているのか。

▽「衝突続く辺野古 両者の主張は」という記事をどう読み解くのか。

▽社説について、論説委員室で意見が対立したらどうするのか。社説は時代によって変わるのか。一般記事は社説の主張に合わせるのか。社説で皇室を批判したことがあるのか。

▽「子ども食堂広がる」の記事をどう読み解くか。

▽「同時進行ルポ 漂う民」をどう読み解くのか。

▽「医療ルネサンス」と「患者を生きる」はどちらがよいか。

▽「中国強制連行」で朝日と読売の社説はどう違うのか。

▽相模原殺傷事件で警察の実名発表拒否をどう考えるのか。

▽「盲導犬の男性 線路に転落」の記事をどう読み解くのか。

このほか、テレビ局と新聞社の違いはなにか、テレビ局と新聞社は権力との距離にどう違いがあるのかを議論してもらった。

<講演会>

前期では、講師が担当しているインターンシップ新聞社コースの受講生で朝日新聞と読売新聞に内定した4年生2人来てもらい、就活のコツを話してもらった。

後期には、読売新聞の前採用担当デスク、朝日新聞の採用担当部長をそれぞれ招き、ESや作文の書き方、面接の受け方を語ってもらった。

3回の講演会のあと、引き続き高幡不動や多摩センターで懇親会を開いた。

<インターンシップへの応募>

夏と冬の各社の公募のインターンシップに5人全員が応募した。

夏のインターンシップでは、朝日新聞に1人、読売新聞に2人、日経に1人、共同通信社に4人が参加した。冬のインターンシップでは、朝日新聞に2人、読売新聞に2人、毎日新聞に3人、日経に1人、共同に1人、NHKに2人が参加した。

(2) 鈴木 俊幸 (文学部・教授)

FLP 演習 A・B・C

<テーマ>

明治前期のメディア史研究

<授業の概要>

本年度は、昨年度から継続の課題を完結させ、成果を公表することを第一として授業を進める。すなわち、明治十年代後半から始まる競争的書籍安売りという現象を、新聞広告を素材として追うことにより、書籍出版・流通史上の一大変革期の実相を捉えるとともに、新聞受容の変化、それに伴う新聞という広告メディアの変化をたどっていくことを目標に、授業を進めた。

授業内容は、学生の作業に基づく報告と討議を主軸とし、それに基づいて共同の論文に仕上げるまでを行った。また、新たな研究資料を得るために調査合宿も行った。

<活動内容>

当ゼミでは、明治期における書籍出版・流通の歴史の展開に大きく関わった競争的書籍安売りの実態を、広告を通して把握し、そこからさらに広告メディアとしての新聞について、また広告そのものについて考究することを行ってきた。本年度は、前年までに収集した諸新聞のデータを整備し、相互的比較が容易になるように努めた。さらに、前年度末に収集した『山梨日日新聞』と『朝日新聞』、また今年度収集の『中越新聞』、さらに合宿調査で収集した『伊勢新聞』の分析を行い、これまでのデータに追加していった。

後期はその作業と並行して、これまでの成果を形にすべく、分担を決めて、原稿を作成し、それに基づく発表を行い、原稿を整備していった。

集積した原稿は、2017 年 1 月発行『書籍文化史』第 18 集に「共同研究 書籍安売りの新聞広告」と題して公刊した (31p)。

また、今年度の活動を振り返って、今後の研究方針を話し合い、これまでの研究成果を踏まえ、さらにそれを充実・発展していくことを合意し、今年度を終了した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習 A・B・C

実施日：2016 年 9 月 1 日 (木) ～ 9 月 2 日 (金)

実施都市：三重県津市

実施施設：三重県立図書館

実施内容：明治 15 年から 21 年までの『伊勢新聞』を精査し、書籍安売り広告、予約出版に関わる広告、地元書店の実態を示す資料を網羅的に収集した。

成果：当該資料は、その後、後期授業の検討材料として活用し、伊勢新聞流通域における書籍安売り広告の実態と、また当地における書籍安売りの動向とを、ある程度とらえることができた。また、広告主や広告頻度から、他紙にない当該新聞の特色を析出し、地方新聞における、また地方における書籍安売りの一事例を加える

ことができた。そのことにより、これまで継続的に行ってきた研究に厚みと広がりを付与することができた。

(3) 辻 泉 (文学部・教授)

FLP演習A・B・C

<テーマ>

ポピュラー文化とメディア変容

<授業の概要>

本演習は、ポピュラー文化に関連するメディアの実態について、広く理解を深めることを目的としている。たとえば、趣味やファッション、ライフスタイルに関する雑誌やインターネット情報であったり、あるいはスポーツジャーナリズムであったりというように、われわれの日常生活において身近な、ポピュラー文化を切り口にして、今日のメディアの実態や問題点について考察することが主たる目的である。

具体的には、関連する文献の読解からスタートして、実際にメディア情報の内容分析を行ったり、あるいはこれらの情報発信に携わる現場への訪問調査なども織り交ぜつつ取り組んできた。

なお2016年度は、趣味雑誌とそのオルタナティブメディア（インターネット、インディーズ雑誌など）を中心テーマとして取り上げた。

<活動内容>

辻ゼミは、上記したような目的に基づき、『Myojo』『BOMB』『ROCK' IN ON JAPAN』『Number』『Animage』『週刊少年ジャンプ』『週刊ファミ通』の7誌を主たる対象として、こうした系統の雑誌を購読するような読者たちの文化、およびこれらのメディアを作り出すメディア産業を対象とした実態調査を行った。

具体的な活動内容などは、下に掲載した日程表などを参照のこと。

<前期>	予定	文献(要約/コメント)	雑誌ウォッチ担当	その他
4月13日	(1) ガイダンス・分担決めなど			
4月20日	(2) 基礎論①「文化の楽しさと時代変化」	※前日正午までにfacebookに論文についてコメント		
4月27日	(3) 基礎論②「MMA」	※前日正午までにfacebookに論文についてコメント		
5月4日	みどりの日			
5月11日	(4) 文献購読①『出版メディア入門』4章雑誌	森田/笠本	『Myojo』 白石 『BOMB』 岸田	雑誌一覧表締切・仮説構成開始
5月18日	(5) 文献購読②『出版メディア入門』10章読者と読書	平川/真壁	『Rockin'on Japan』 井口 『number』 中島	
5月25日	(6) アンケート分析			各誌ごとの作業仮説提出・質問項目作成開始
6月1日	(7) 班ごと作業日			
6月8日	(8) 文献購読③『オルタナティブ・メディア』解説+はしがき+1章	石原/阿部	『Animage』 木下 『週刊少年ジャンプ』 田中	
6月15日	(9) 班ごと作業日			
6月22日	(10) 文献購読④『オルタナティブ・メディア』7・10章	室屋/辻	『週刊ファミ通』 奥村	質問項目提出
6月29日	(11) インタビュー項目調整①			
7月6日	(12) インタビュー項目調整②			
7月13日	(13) 休講			
7月20日	(14) 内容分析			
7月27日	(15) ゲストスピーカー			

※このほかに、9月8～10日に愛媛県松山市において実態調査（合宿）を行った。

<後期>	予定	項目①	その他
9月21日	(1) ガイダンス		
9月28日	(2) 今後の進め方・予定相談(これまでの進行状況報告)		
10月5日	(3) 休講		
10月12日	(4) 合宿のおさらい① (Animage, ジャンプ, ファミ通)	3160教室へ	ゼミ見学会
10月19日	(5) 合宿のおさらい② (Myojo, BOMB, Rockin'on, Nunber)	3160教室へ	ゼミ見学会
10月26日	(6) 班ごと中間報告①(おさらい①の班)		
11月2日	学祭前休講		
11月9日	(7) 休講		11月14～16日ゼミ選考
11月16日	(8) 班ごと中間報告②(おさらい②の班)		
11月23日	(9) 年表作成&プレゼン準備①		
11月30日	(10) 報告書執筆指示&プレゼン準備②		
12月7日	(11) 休講		12月10日(土)年表最終〆切
12月14日	(12) リハーサル		12月17日(土)成果報告会
12月21日	(13) 報告書執筆作業		
12月28日	冬期休業		
1月4日	冬期休業		1月6日(金)報告書〆切
1月11日	(14) 班ごと最終報告会①		
1月18日	(15) 班ごと最終報告会②		

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習A・B・C

実施日：2016年12月21日（水）

講演者：丸山 信人 氏

演 題：雑誌の過去・現在・未来

実施都市：東京都八王子市

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 3256教室

実施内容：株式会社インプレスホールディングスの丸山信人氏をお招きして、雑誌の過去・現在・未来について、幅広く展望を語っていただいた。

成 果：雑誌の過去と現在と未来に関する、最新の研究成果、企業の取り組みなどをご紹介いただき、学生の知的好奇心が強く喚起された。

(4) 松田 美佐 (文学部・教授)

FLP 演習 A・B・C

<テーマ>

ジャーナリズムの理解と取材・表現活動の実践

<授業の概要>

ネット社会の進展にともない新聞やテレビなど伝統的メディアの報道に批判の目が向けられるなか、ジャーナリズム機能をどう維持、発展させるかが問われている。本演習では既存メディアのジャーナリズムのありようを検討すると同時に、ネット社会におけるジャーナリズムの可能性を探ることを目的とする。具体的には、ジャーナリズムの原理・理念について文献で学んだ後、さまざまに展開しているネット上でのジャーナリズム活動の現状と可能性を把握することとする。

それと並行する形で、受講生自らが取材し、記事にまとめる活動をおこなう。具体的には、夏期ゼミ合宿を取材・調査にあてることとし、前期には取材地の選定から始め、グループに分かれて取材の準備をおこなう。後期にはゼミでの発表などを通じて、記事にまとめることとする（なお、2015 年度は広島県広島市、2014 年度は宮城県石巻市、2013 年度は山梨県甲府市、2012 年度は沖縄県那覇市をベースにおこなった）。このような取材・表現活動の実践により、ジャーナリズムだけでなく現代社会で広く必要とされている「主体的に情報収集し、議論を通じて理解し、自分なりの見解をまとめ、わかりやすく表現する力」を磨くことを目的とする。

<活動内容>

本年の活動は3つに大きく分けることができる。

まず、文献講読によるジャーナリズムの理解とそれに基づき議論をおこなう訓練である。文献講読で取り上げた本は、早稲田大学ジャーナリズム教育研究所編、2013、『レクチャー現代ジャーナリズム』早稲田大学出版部である。この文献を講読しながら、ジャーナリズムについて理解を深め、さらに、関連するさまざまなテーマについて、受講生の専門領域と関係づけながら議論をおこなった。次に、例年議論の練習のためにディベートをおこなうこととしているが、本年も受講生からテーマの希望を募り、「東日本大震災における震災遺構保存の是非」「全国紙における『社の意見』掲載の是非」「自動車普通免許の上限年齢策定の是非」「給付型奨学金導入の是非」などのテーマで、ディベートをおこなった。さらに、三点目として、本年は夏に高知県で調査・取材合宿をおこなうこととし、グループに分かれ事前取材・調査をした上で、9月5～8日に実態調査に出かけた。取材地の決定から、具体的な取材計画立案、取材の申し込みなど、取材合宿の全ての過程は学生たち自身が企画・実行する。成果はすべてのグループが後期に行われた新2年生の見学が可能なゼミにおいて発表し、全員が3,000字程度の記事にまとめた。そのうち6名の記事は『Hakumon CHUO』冬号と早春号に掲載された。

以上の活動を通じて、学年末に受講生それぞれが選んだテーマに関する論文を執筆し、ゼミ論集としてまとめた。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：FLP 演習 A・B・C

実施日：2016 年 9 月 5 日(月)～ 9 月 8 日(木)

実施都市：高知県高知市

実施施設：公益財団法人 高知県観光協会、土佐御苑、NPO 法人土佐山アカデミー 他

実施内容：取材合宿

成果：全員が取材成果を 3,000 字程度の記事にまとめ、そのうち 6 名の記事が『Hakumon CHUO』冬号と早春号に掲載された。

(5) 市川 哲夫 (総合政策学部・特任教授)

FLP 演習 A

<テーマ>

放送文化論

<授業の概要>

前期：全 15 回にわたり、映像アーカイブを参照しながら、放送の生成・発展・未来を考察
後期：『二十歳の自画像』というタイトルのオムニバス・ドキュメンタリー制作に取り組む

<活動内容>

市川ゼミは、上記授業の一方、ゲスト講演会、テレビ局スタジオ見学、学外での映像撮影を行った。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習 A・B・C

実施日：2016 年 4 月 23 日 (土)

講演者：TBS テレビ編成部企画統括 石丸 彰彦 氏

演 題：テレビドラマのプロデューサーとは

実施都市：東京都八王子市

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 11400 教室

実施内容：本学の OB でもある、石丸氏から体験的テレビ論を縦横に語ってもらった。

成 果：たんなる夢ではなく、現実的な目標として「テレビの仕事」をゼミ生が考えられるようになった。

対象演習：演習 A

実施日：2016 年 6 月 25 日 (土)

見学調査：TBS『王様のブランチ』生放送

実施都市：東京都港区

実施施設：TBS 赤坂スタジオ

実施内容：生放送の模様をスタジオフロアで見学後、上階のサブ（副調整室）に上がり
番組プロデューサーから、放送の仕組みについて解説してもらう。

放送終了後は、別室会議室で報道制作局担当部長の中野匡人氏から「テレビの仕事」と題してレクチャー、のち質疑応答。

成 果：放送現場（O・A 中）を目の当たりにし、かつ番組プロデューサーと担当部長から、テレビの仕事について話してもらった。ゼミ生の感想レポートによれば、二年生ながら、将来の職業選択において大きな刺激を受けたとの異口同音の感想が記されていた。

対象演習：演習 A・B・C

実施日：2016 年 12 月 10 日（土）

講演者：小島 英人 氏

演 題：民間放送各局の過去・現在・未来

実施都市：東京都八王子市

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 11410 教室

実施内容：志望者の多い、民放テレビ局だが、その現況はどのようなものか。

各局の内情に詳しい、TBS 経営企画局の小島氏の講演だった。

報道出身の氏は、現在は TBS の放送アーカイブスの再発見にも尽力。

放送音源を、続々と CD として商品化。昨年レコードアカデミー賞を受賞した。

さらに、今年三島由紀夫の長時間インタビューの音源を発見。各メディアが大々的に報じた。そうした多面的な活動をする放送マンが、「放送の仕事」の魅力について、語った。

成 果：就活直前に行われた企画だったので、実践的な助言をゼミ生にもらった。

二年生にとっては、放送を目指すには、「何をしたらよいのか」という具体的なオリエンテーションとなった。

対象演習：演習 A

実施日：2017 年 3 月 20 日（月）～ 3 月 22 日（水）

実態調査：ドキュメンタリー制作『二十歳の自画像』ロケーションと OB 訪問

実施都市：宮城県仙台市

実施施設：県立仙台一高及び、東北放送（TBC）

実施内容：市川ゼミのドキュメンタリー競作で、選ばれた三作品の一つ、千田裕貴の作品を撮影する為、千田の出身地での撮影を行った。21 日の夜には、市川ゼミの先輩（13 年卒・阿部航介）が、現在 TBC（東北放送）でラジオ制作局のディレクターを勤めているので、ゼミ生との懇親会を行った。アナウンサー志望のゼミ生もあり、阿部の計らいで、TBC の現役アナウンサーも同席した。

成 果：毎年 2 年生ゼミ生に課している、オムニバス・ドキュメンタリー『二十歳の自画像』制作。16 年度は千田の他、西島希世（経済・2 年）、栗原明里（法学・2 年）の 3 人の企画が選ばれた。撮影後、ポスト・プロを行い、年度が替わった 17 年 5 月 5 日に漸く三部構成の作品が完成翌日のゼミ内で、ゼミ生（2～4 年）の前で完成試写を行った。市川の指示で、当日のゼミ参加者全員が作品評（600 字）執筆と作品評価（最高★5 つ）を行った。千田のパートについては、「3・11」の被災地の 6 年後の風景も取り込まれており、地方ロケーションの効果が、本ドキュメンタリーを一段上のレベルに引き上げていた。さらに再編集をして、コンペ出品も検討中である。

F L P 演習 B・C

<テーマ>

放送文化論

<授業の概要>

2015 年夏に、上梓された『70 年代と 80 年代～テレビが輝いていた時代』（市川哲夫編・毎日新聞出版刊）をテキストに、16 年度は 1970 年代の十年間（ディケード）を研究対象とし、所収の 30 本の論文を毎回ゼミ生が輪番で報告し、各テーマについてゼミ生相互のディスカッションを行い、締め括りの解題を市川が行った。

（引き続き、80 年代の 30 本については演習 B・C で 17 年度に同形式で行う）

<活動内容>

市川ゼミは、上記授業の一方、ゲスト講演会の聴講を行った。
また、演習 B のゼミ生については個別の進路相談を随時行った。

<講演会>

対象演習：演習 A・B・C

実 施 日：2016 年 4 月 23 日（土）

講 演 者：TBS テレビ編成部企画統括 石丸 彰彦 氏

演 題：テレビドラマのプロデューサーとは

実施都市：東京都八王子市

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 11400 教室

実施内容：本学 OB でもある、石丸氏から体験的テレビ論を縦横に語って貰った。

成 果：放送メディアを目指すゼミ生に、きわめて啓発的だった。

対象演習：演習 A・B・C

実 施 日：2016 年 12 月 10 日（土）

講 演 者：小島 英人 氏（TBS 経営企画局担当部長）

演 題：民間放送各局の過去・現在・未来

実施都市：東京都八王子市

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 11410 教室

実施内容：放送記者出身で、現在は経営企画に携わる氏の語る「民放各局の現在」の講話は、就活を控える演習 B のゼミ生には極めて有用であった。

成 果：メディア論としてのみならず、ジャーナリズムにおけるプロフェッショナリズムについても、示唆に富んだ講話であった。

(6) 大橋 正和 (総合政策学部・教授)

FLP 演習 A

<テーマ>

現代社会の変容と Social Media 研究

<授業の概要>

現代社会の変容について様々な視点から学習し、Social Media の急進展と社会への影響についてコミュニケーションの変容などの視点から調査研究を行う。現代社会を情報社会として認識し社会への影響や変容を明らかにし 21 世紀の社会をどのように設計したらよいかデザインサイエンスの立場から研究する。

個人およびグループで研究対象を設定し学習・調査等を行う。PBL(プロジェクト ベーストレーニング)として研究をまとめる方法を学習し研究成果をまとめ国内外でプレゼンテーションを実施する。

<活動内容>

今年度の研究テーマは、「第 4 次産業革命による社会システムの変容」をテーマに、AI(人工知能)、IoT(Internet of Things)、ビッグデータ、フィンテックなどの具体的事例にそって研究を行った。その中でも、自動運転について実際に行われている技術と事例について突っ込んだ研究を行った。

ゼミ中には、共通テーマである「現代社会の変容」「Social Media の社会への影響」などについて、最新の事例と研究成果について議論した。

2016 年 7 月には、情報社会学会の年次研究発表大会(東京大学福武ホール)に参加し、学会での研究発表の実際に触れた。

2016 年 11 月台湾国台南市の南台科技大学で開催された第 12 回知識経済とグローバルマネジメント国際会議に参加し、総合政策学部専門演習大橋ゼミ生と合同で第 4 次産業革命に関する研究発表を行った。

2017 年 2 月には、ハワイ大学マノア校で開催された 4th International Workshop Transformation of human behavior under the influence of Infosocionomics Society に参加し、Workshop 運営に参加した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習 A

実施日：2017 年 2 月 26 日～ 3 月 2 日

実施都市：ハワイ州ホノルル市(米国)

実施施設：East-West Center, University of Hawaii, Manoa

実施内容：4th International Workshop Transformation of human behavior under the influence of Infosocionomics Society の運営および研究発表を聴講し、議論に参加した。

成果：国際 Workshop の準備・運営、研究発表および議論に参加することにより、グローバル社会人基礎力を身につけた。

F L P 演習 C

<テーマ>

現代社会の変容と Social Media 研究

<授業の概要>

現代社会の変容について様々な視点から学習し、Social Media の急進展と社会への影響についてコミュニケーションの変容などの視点から調査研究を行う。現代社会を情報社会として認識し、社会への影響や変容を明らかにし、21 世紀の社会をどのように設計したらよいかデザインサイエンスの立場から研究する。

個人およびグループで研究対象を設定し学習・調査等を行う。PBL(プロジェクト ベーストレーニング)として研究をまとめる方法を学習し、研究成果をまとめ国内外でプレゼンテーションを実施する。

<活動内容>

大橋ゼミは、PBL の手法を用いて個人もしくはグループごとに研究テーマを定めその研究テーマに沿った活動を行った。

今年度の研究テーマは、「第 4 次産業革命による社会システムの変容」をテーマに、AI(人工知能)、IoT(Internet of Things)、ビッグデータ、フィンテックなどの具体的事例にそって研究を行った。その中でも、自動運転について実際に行われている技術と事例について突っ込んだ研究を行った。また、フィンテックの主要技術であるブロックチェーンの重要な技術である時刻認証について研究を行った。

ゼミ中には、共通テーマである「現代社会の変容」「Social Media の社会への影響」などについて最新の事例と研究成果について議論した。

2016 年 7 月には、情報社会学会の年次研究発表大会(東京大学福武ホール)に参加し、学会での研究発表の実際に触れた。

12 月には経済産業省主催の社会人基礎力育成グランプリ地方大会に参加し、代表者が海外での学術発表、ニューヨーク研修等について英語で発表を行った。奨励賞を獲得した。

(7) 松野 良一 (総合政策部・教授)

FLP 演習 A・B・C

<テーマ>

番組制作およびノンフィクション執筆活動

<演習のスケジュール>

1. 4月～12月 「多摩探検隊」番組制作活動
2. 3月ゼミ合宿、10月ゼミ合宿 (制作会議)
3. 9月～3月 模擬面接の設営、ゼミ活動報告書の作成
4. ノンフィクションの執筆は、年間で行う

<活動内容 (学内・学外・講演会等) >

多様な能力開発およびジャーナリストマインドの育成のために、実践的な活動を行なった。主として、①実際にケーブルテレビで放送するための番組制作、②各種活字メディアへの執筆活動、を2本柱とした。

- ① 番組制作については、ケーブルテレビ向けの番組「多摩探検隊」および「につぼん列島探検隊」の2本を制作しているほか、小中学生に番組制作を教える「子ども放送局」の活動を行なった。視聴可能世帯数は、多摩探検隊はJCOM系列の約270万世帯、につぼん列島探検隊はイッツコム系列の約68万世帯である。

1) 「中央大学と戦争」プロジェクト

2010年に出版された『戦争を生きた先輩たちⅠ』、『戦争を生きた先輩たちⅡ』、2013年に出版された『中央評論 戦争を生きた先輩たち (完結編)』の取材対象者に再度取材を行い映像化した。2016年度は、朝鮮人の元学徒兵にインタビューを行い、映像を制作している。

- ② 執筆活動については、学内のメディアである『中央評論』、『草のみどり』に定期的にルポルタージュ等を投稿し掲載された。さらに、独立した取材・執筆プロジェクト立ちあげ、実行した。

1) 「沖縄」プロジェクト

沖縄の戦中・戦後を取材し、その記憶を後世に残す活動。2008年に出版された『中央評論 沖縄問題は今…』と2014年に出版された『証言で学ぶ沖縄問題』の続編である。2016年度は、「久米島守備隊住民虐殺事件」や「豚輸送作戦」などの歴史的事件、出来事の関係者に取材を行った。2016年12月には、中央評論297号『沖縄の記録をつなぐ』を刊行した。

1、番組「多摩探検隊」¹制作

放送月	企 画	D	番 P	進行状況
16 年 1 月	八王子空襲の謎	平木場	平木場	放送済み
2 月	対馬丸生存者の証言	馬田	名越	放送済み
3 月	多摩地域最古のビール	本庄	福田	放送済み
4 月	電気自動車たま	神野	神野	放送済み
5 月	緊急通報犬	渡辺	渡辺	放送済み
6 月	ライオンバス	平安山	平安山	放送済み
7 月	ミゾゴイ	中川	中川	放送済み
8 月	風船爆弾	広瀬	広瀬	放送済み
9 月	風船爆弾	広瀬	広瀬	放送済み
10 月	シバ君一再会編一	原	原	放送済み
11 月	ひまわり号	荒川	荒川	放送済み
12 月	清瀬こども放送局	會田	大塚	放送済み
17 年 1 月	清瀬こども放送局	會田	大塚	放送済み
2 月	東村山に墜ちた B29	山田	山田	放送済み
3 月	東光寺大根	尾崎	平木場	放送中

① 「中央大学と戦争」プロジェクト

取材対象者	住所	取材者	進行状況
神原 侖	京都府	名越	放送済み
仲田 清一郎	埼玉県	馬田	放送済み
細井 巖	東京都	渡邊	完パケ済み
梁 敬宣	台湾 台北	柚木	編集中
ファン ヨンジュン	韓国 ソウル	鈴木	編集中

¹東京・多摩地域のケーブルテレビ局6局、J:COM 系列12局、九州地域の2局の計20局（視聴可能世帯数:約270万）で放送されている10分間の地域再発見番組。

2、番組「にっぽん列島探検隊」²制作

放送月	番組回	企 画	キャスター	ゲスト	番 P
‘16 年 1 月	21 回	清瀬子ども放送局特集	山岸	大塚	前田
2 月	〃	〃	〃	〃	〃
3 月	20 回	八王子子ども放送局特集	山岸	尾崎・前田	大塚
4 月	22 回	中央大学と戦争	山岸	馬田	和田
5 月	〃	〃	〃	〃	〃
6 月	23 回	多摩最古のもの特集	山岸	神野	星
7 月	〃	〃	〃	〃	〃
8 月	24 回	名物リポーター特集	山岸	渡邊	原
9 月	〃	〃	〃	〃	〃
10 月	25 回	あきる野の珍しい動物	山岸	前田	村瀬
11 月	〃	〃	〃	〃	〃
12 月	26 回	風船爆弾	堀場	広瀬・和田	藤江
‘17 年 1 月	27 回	清瀬こども放送局特集	堀場	會田	仲山
2 月	〃	〃	〃	〃	〃
3 月	26 回	風船爆弾	堀場	広瀬・和田	藤江

3、「子ども放送局」プロジェクト³

活動名	活動日程	場所	内容	アウトプット
清瀬 子ども放送局	2016 年 6 月 4 日 ～6 月 27 日	・信愛の園	・清瀬ジュニアリーダーズクラブの子どもたちが清瀬市の特別養護老人ホーム「信愛の園」を訪れ、高齢者にインタビューをした。	インタビューやふれあいのシーンを DVD にし上映したほか、多摩探検隊 2016 年 12 月放送、2017 年 1 月放送で、ふれあいの様子を放送した。

² 佐世保ケーブルテレビと東急沿線イツコムエリア（約 68 万世帯）で放送されている全国の土地に密着した 30 分番組。

³ 小学生・中学生が自ら企画・撮影・編集の作業を行う。中央大学 FLP ジャーナリズムプログラム・松野良一ゼミの学生が指導・支援し番組を制作する活動。

4、地域密着プロジェクト⁴

活動日程	場所	内容	アウトプット
2016 年 8 月 19 日～21 日	福井県高浜町	高浜町で開催されるお祭り「漁火想」に密着したドキュメンタリー。	2016 年 12 月、編集した映像を高浜町に送達。町の中で上映会を実施。

5、執筆プロジェクト

①中央評論グラビア

掲載号	執筆者	内容
No.295	平木場 大器	八王子空襲の謎
No.296	荒川 あずさ	肥沼信次医師
No.297	平安山 絢可	沖縄問題
No.298	渡邊 七海	B29 慰霊碑

②草のみどり（「多摩探検隊」制作日誌）

納品月	執筆・タイトル
‘16 年 3 月 (295 号)	「八王子空襲」の謎に迫った一年間 平木場 大器
5 月 (296 号)	台湾二二八事件は、父を奪い、母を奪い、そして私の尊厳を奪った 青山 拓冬
7 月 (297 号)	終戦直後の日本を走った電気自動車「たま」ーその知られざる歴史と熱い思い 神野 菜々
9 月 (298 号)	「シバくん」「ライオンバス」の番組リポーターを経験して 渡辺 紗千
11 月 (299 号)	絶滅寸前の「ミゾゴイ」を追いかけて 中川 健太郎
‘17 年 1 月 (300 号)	「被害者は加害者で、加害者は被害者」 広瀬 愛奈恵
3 月 (301 号)	「あの名物看板犬・シバ君は今・・・」 原 啓介

⁴ 地域に密着したドキュメンタリーを撮ることによって、地域の魅力の再発見を目指したプロジェクト。

③2016 年度に取材をしたプロジェクト

【沖縄プロジェクト】

トピック	取材対象者	住所	進行状況	取材者
日系2世の通訳兵	タジロウ・ヒガ	ハワイ・オアフ島	原稿執筆済み	神野
豚輸送作戦	糸村・ジョン 照屋文雄 新垣善昭・他	ハワイ・ホノルル 沖縄県うるま市	原稿執筆済み	平安山
久米島守備隊 住民虐殺事件	喜久永米正譜久 里広貞 島袋由美子	沖縄県久米島町	原稿執筆済み	

6、コンテストの受賞歴について

日時	コンテスト名	賞	作品	制作者	時間	内容
2016 年 11 月	「地方の時代」 映像祭	奨励賞	元特攻志願兵の 証言	名越	14 分	神原侖さん、91 歳。神原さんは中央大学に在籍中、自ら志願して特攻隊員となった。なぜ必ず死ぬ特攻隊員に志願したのか。その思いに迫る。
2017 年 1 月	東京ビデオ フェスティバル	入賞	たま～現存する 最古の 電気自動車	神野	10 分	1947 年。日本で初めて電気自動車が作られた。知られざる日本最古の電気自動車とその関係者たちに話を聞く。

① 2016 年 11 月 12 日 「地方の時代」映像祭 奨励賞



7、松野ゼミについて取り上げた新聞記事・テレビ番組について

2016 年	掲載紙・出演番組	取り上げられた活動	
3 月 25 日	毎日新聞	ゼミ生の紹介	資料①
5 月 14 日	朝日新聞	「八王子空襲の謎」	資料②
9 月 29 日	朝日新聞出版	建学の精神で知る 大学の力 2017	資料③

資料① 2016 年 3 月 25 日 毎日新聞

命のいとおしさを忘れない



熊本にある実家は地元の銘菓を作るお菓子屋だ。創業70年になる。しかし、5年前に故郷の町が熊本市と合併。町の名前は消えた。看板商品の知名度は下がり、作ることが難しくなった。一つの町が合併しただけで、お菓子に込められた先祖や地域の人々の思いが消えた。懸命に積み上げてきた社会は簡単に崩れさせる。もういかなる世の中に嫌気がさした。

大学に入り、熊本県という新しい移住の形を社会に定着させようと活動する女性に出会った。彼女の言葉が印象に残っている。「親と一緒に住めるのも20年くらい。そして、新しい命がバツと生まれて、つながっていく。人生ってなんでもなんにもいとおしいんですよね」。消えるモノや習慣に思いがけなかった。その中で、必死に命を輝かせようとする人々の生活に回を向けられていなかった。

「人々の生活に耳を澄ませたい」。そう思い3年間、多摩地域研究のゼミに所属した。雅楽園の壁をつく

る職人、多摩で生まれた超手紙にそっと心の面をしたためる東北の被災者、多摩川の外来魚問題に立ち向かう漁師。土地に根を張って暮らす人々の命の積み重ねは、日常となっていた。世の中はもういい。だからこそ、その一瞬一瞬が美しいと思う。

4月からテレビ局にディレクターとして就職する。課題であることしか取りえない私だが、誰かの心をそっと救える番組を作りたい。そして、風が吹けど、雨がふれど、ちゃんと咲き誇る花のいとおしさに気付ける大人になろう。

【中実大・福田夢友園】

2016年 平成28年 5月14日
土曜日
14版
26

企画に奨学金 形残す経験を

中央大

こどもの未来へ 大学の挑戦

優秀で表現性の高い企画やアイデアに対し、その活動費を支援する。中央大の総合政策学部（八王子市）は、独自の奨学金制度「プロジェクト奨学金」で学生たちの夢への一歩を後押ししている。

「交通費さえ用意できない、奨学金がなければ、あきらめていました」。4年生の平本大樹さん（22）は「防空法が拡大されて避難被褥費」という企画で、2015年度のプロジェクト奨学金の給付を受けた。

防空服を研究

東京都府中市出身。8人きょうだいの末っ子で、日本学生支援機構の奨学金と中央大総合政策学部の経済奨励奨学金の給付を受けながら学んでいる。研究テーマは



八王子空襲の体験者をインタビューする
平本大樹さん（左）＝平本大樹さん提供

戦の年に空襲があった地を訪ね、被害者や研究者をインタビューした。機密資料の心づかりを教った日本人記者の訪問。「パリ島から帰らなかった残飯日本兵」などテーマは幅広く、海外で調査を行った学生もいる。今年度は、過去最多の55件が応募があった。

企画の選考に合格した平本大樹さんは、八王子のほか大阪や青森、鹿児島など数

松野良一・総合政策学部部長は「講義と研究のせいで教えるだけでは、いまの若者たちの意欲は引き出せない」と話す。企画を練る人を促して連絡する▽話を聞く▽アウトプットして形を練る。そんな一連の経験が将来のために大切だという。「そうした学びへの支援としての奨学金は、決して無駄じゃない」

私の理想図



松野良一・総合政策学部部長

プロジェクト奨学金は、個人だけでなくチームの代表者でも企画を応募できる。中央大は毎年、学部の関係して好きな活動目標を掲げられる「リアルタイム（Real-time）」を導入。このため総合政策学部の学生が代表を務めるチームなら、他学部の学生もその一員としてプロジェクトに参加できる。（高取麻子）

経験が自信に 夢への一歩

やりたいことを形にするための計画を立て、評価される経験を積むことが将来のためには大切です。企画のプレゼンから、中間発表、最終報告という過程に多様な能力の開発が内包され、それが自信になる。プロジェクト奨学金は、夢への一歩です。



8、合宿について

- ・2016年10月8日、9日 奥多摩「三河屋」にて合宿を行った。
- ・2017年3月4日、5日 箱根「むさしや」にて合宿を行った。

9、見学調査

・見学調査 演習A・B・C

実施日： 2016年4月～7月

実施場所： 清瀬市児童センター
信愛の園

実施内容： 清瀬子ども放送局の活動

成果： 作品「清瀬のおじいちゃんおばあちゃんに会いに行こう」を制作。
上映会を行った。
また、制作した番組はCATVで放送やWEBで配信した。

・見学調査 演習A・B・C

実施日： 2016年5月

実施場所： むいから民家園
長崎原爆資料館

実施内容： 多摩探検隊「棕の木」の制作

成果： 制作した番組はCATVで放送やWEBで配信する予定。

・見学調査 演習A・B・C

実施日： 2016年6月11日

実施場所： 井の頭自然文化園

実施内容： 多摩探検隊「象のはなこ」の制作

成果： 制作した番組はCATVで放送やWEBで配信する予定。

・見学調査 演習A・B・C

実施日： 2016年6月～7月

実施場所： 元鈴木たばこ店

実施内容： 多摩探検隊「シバ君と再会」の制作

成果： 制作した番組はCATVで放送し、更にWEBで配信した。

・見学調査 演習A・B・C

実施日： 2016年6月

実施場所： 賤機山山頂

実施内容： B29慰霊碑の関係者と米軍にインタビューする

成果： 第298号中号評論グラビアに掲載予定。

・見学調査 演習 A・B・C

実 施 日： 2016 年 7 月
実施場所： 細井 巖さん宅
実施内容： 多摩探検隊放送「中央大学と戦争」の制作
成 果： 制作した番組は CATV で放送や WEB で配信する予定。

・見学調査 演習 A・B・C

実 施 日： 2016 年 7 月
実施場所： 八王子市役所
八王子市学園都市センター
実施内容： 「八王子空襲の謎」の上映
成 果： 八王子市民に、空襲について考えてもらえる機会を作った。

・見学調査 演習 A・B・C

実 施 日： 2016 年 7 月～12 月
実施場所： JAXA 相模原キャンパス
国分寺市立第四小学校
垣見 恒男さん
国分寺市役所
実施内容： 多摩探検隊「ペンシルロケット」の制作
成 果： 制作した番組は CATV で放送や WEB で配信する予定。

・見学調査 演習 A・B・C

実 施 日： 2016 年 7 月～2017 年 1 月
実施場所： 宮城県七原町
高千穂コミュニティーセンター
深広寺
横浜市 福島さん
実施内容： 中央評論特集のための取材
成 果： 中央評論 299 号に掲載予定。

・見学調査 演習 A・B・C

実施日： 2016年8月19日～21日
実施場所： 福井県 若宮海水浴場
実施内容： 「漁火想」ドキュメンタリーの制作
成果： 高浜町で上映会を行った。

・見学調査 演習 A・B・C

実施日： 2016年10月2日
実施場所： 上智大学四ツ谷キャンパス
実施内容： 他大学のジャーナリズム系のゼミと交流
成果： 撮影技法などを勉強した。

・見学調査 演習 A・B・C

実施日： 2016年10月～11月
実施場所： 藤倉地区福祉モノレール日向平線、猿江線
実施内容： 多摩探検隊「福祉モノレール」の制作
成果： 制作した番組はCATVで放送やWEBで配信する予定。

・見学調査 演習 A・B・C

実施日： 2016年10月～12月
実施場所： JA 東京みなみ 日野支店
奥住喜則さん
七ツ塚ファーマーズセンター
実施内容： 多摩探検隊「東光寺大根」の制作
成果： 制作した番組はCATVで放送やWEBで配信する予定。

・見学調査 演習 A・B・C

実施日： 2016年10月25日
実施場所： 藤倉地区福祉モノレール日向平線、猿江線
実施内容： 多摩探検隊「福祉モノレール」の制作
成果： 制作した番組はCATVで放送やWEBで配信する予定。

・見学調査 演習 A・B・C

実 施 日： 2016 年 11 月～12 月
実施場所： 武蔵村山市 成迫政則さん
実施内容： 「人間地雷」の制作
成 果： 中央評論グラビアで掲載予定。

・見学調査 演習 A・B・C

実 施 日： 2016 年 12 月
実施場所： 明治大額等戸研究所資料館
実施内容： 多摩探検隊「偽札工作」
成 果： 制作した番組は CATV で放送や WEB で配信する予定。

・見学調査 演習 A・B・C

実 施 日： 2016 年 12 月 14 日
実施場所： 東洋装具医療器具製作所
実施内容： 多摩探検隊「動物技師装具士」の制作
成 果： 制作した番組は CATV で放送や WEB で配信した。

・見学調査 演習 A・B・C

実 施 日： 2016 年 12 月 23 日
実施場所： NPO 法人 Ohana 事務所
実施内容： 多摩探検隊「ひまわり号」の制作
成 果： 制作した番組は CATV で放送や CATV で配信した。

・見学調査 演習 A・B・C

実 施 日： 2017 年 1 月 19 日
実施場所： 田中清さんアトリエ
実施内容： 多摩探検隊「型染版画家」の制作
成 果： 制作した番組は CATV で放送や WEB で配信予定。

10、国外実態調査

・国外実態調査 演習 A・B・C

実 施 日： 2016 年 8 月 3 日～7 日

実施場所： 大韓民国 ソウル・光州

実施内容： 「中央大学と戦争」の取材

成 果： 制作した番組は CATV で放送や WEB で配信する予定。

・国外実態調査 演習 A・B・C

実 施 日： 2016 年 9 月 2 日～5 日

実施場所： 台湾 大隠村

実施内容： 「中央大学と戦争」の制作

成 果： 制作した番組は CATV で放送や WEB で配信する予定。

・国外実態調査 演習 A・B・C

実 施 日： 2016 年 9 月 4 日～9 日

2016 年 11 月 2 日～5 日

実施場所： 台湾 台北・台南・高雄

実施内容： 日台の関係を学べるスタディーツアーを構築。

成 果： スタディーツアーについて記した本を刊行予定。

Ⅲ. 国際協力プログラム

1. 設置の趣旨と教育の目的

21 世紀、人類の抱えるもっとも深刻な問題は、アジア、中東、アフリカ、中南米諸国に広く見られる貧困問題です。地球上の多くの人々が、依然として経済的に厳しい貧困な状況に喘いでおり、栄養、人口、教育、衛生疾病、人権、環境、時には難民、紛争などの側面で、様々な深刻な問題が生じています。

途上国の経済社会が、この厳しい貧困の悪循環から抜け出して、持続的な成長の軌道に乗るには、そこに住んでいる人々自身による自立した自助努力が不可欠です。まだ未成熟の市場の機能を強めるような民間の産業や企業を開発育成していくことが重要ですが、さらに社会の様々な領域で効率的な政府が積極的に介入し、単に市場機能だけでは解決できない深刻な構造的な問題を解決していかなければなりません。幅広い分野にわたる社会開発、ハード・ソフトのインフラ整備、計画的な経済開発の推進など、今後も長い時間をかけて継続的に全力で取り組むべき問題が山積しています。

同時に、貧困問題の解決には、南北間の継続的かつ大規模な国際協力も不可欠な条件になっています。豊かな先進国が、途上国との緊密な協力のもとに、資金面、人材面、貿易面、情報面の幅広い分野で、今後も長期間にわたって継続して積極的に開発問題に参加しなければ、人類の貧困問題の根本的な解決は極めて困難と考えられます。国家レベルでの多様な国際協力、NGO など民間レベルでの国際協力、さらに、先進国の優れた技術の国際移転や途上国におけるグローバル企業の活動などが、貧しい途上国の経済社会の活性化（テイクオフ）に非常に重要な貢献をしていることは、確かな事実です。

国際協力の諸活動を支え主導しているのは、開発問題に関する様々な分野で高度に優れた専門能力をもつ人材です。すなわち、高度な語学力による国際コミュニケーション能力、柔軟な異文化理解・異文化適応能力、途上国問題に関する国際政治や経済社会の分析における高度な専門的知識・技術などが、国際協力に参加する人材にとって不可欠の個人的資質能力として強く求められています。異文化社会の複雑な社会経済構造を的確に分析し、様々な困難な環境の中でも経済社会の発展の方策を具体的に模索試行する、逞しい精神力と高度な専門能力を持った人材こそが、21 世紀の人类的な課題に挑戦することができるのです。

「国際協力プログラム」は、貧困問題の解決という、21 世紀の人类的課題に挑戦する人材の基礎的な専門能力を養成する場として設定されました。国際的なコミュニケーション能力を継続的に強化するとともに、複数学部にまたがる様々な開発問題の専門科目群の学修を進めていきます。

さらに、本プログラム独自に開講する演習科目の履修を通じて、複数の担当教員とより緊密に協力しながら様々な視点から開発問題の専門的な研究を行い、総合的かつ体系的な能力育成を目標にしています。特に、途上国社会に密着した現地感覚と鋭い問題意識を深めるよう、アジアなどでの現地社会調査「Project-Based Field Work」による調査報告書を執筆する、実践的教育を重視しています。

2. 2016 年度演習科目担当者および履修者数

氏名	所属学部	FLP演習A(2年次)	FLP演習B(3年次)	FLP演習C(4年次)	実施形態
牛嶋 仁	法学部	-	-	4	合併（環境C、国際協力C、地域・公共B・C）
小森谷 徳純	経済学部	3	-	-	単独（A）
林 光洋	経済学部	10	4	5	単独（A・B・C）
武石 智香子	商学部	3	5	-	合併（A・B）
中迫 俊逸	商学部	-	3	2	単独（B・C）
平澤 敦	商学部	8	9	-	単独（A・B）
新原 道信	文学部	3	2	1	単独（A・B・C）
野宮 大志郎	文学部	2	2	-	合併（A・B）
佐々木 弘世	全学連携教育機構	25	23	9	単独（A・B・C）
三次 啓都	全学連携教育機構	4	3	5	単独（A）/合併（B・C）
合計		58	51	26	

3. プログラムスケジュール

- 4 月 履修ガイダンス
第一回部門授業担当者委員会
- 6 月 2017 年度募集に伴う総合ガイダンス
- 7 月 第二回部門授業担当者委員会
第三回部門授業担当者委員会（持ち回り開催）
- 10 月 2017 年度募集に伴うプログラム別ガイダンス
- 11 月 2017 年度募集に伴う選考試験
- 12 月 第四回部門授業担当者委員会
第五回部門授業担当者委員会（持ち回り開催）
学内活動（期末成果報告会）
- 3 月 FLP 修了発表
FLP 修了証書授与

4. プログラムの活動

期末成果報告会

実施日： 2016年12月17日（土）10:00～

実施施設： 中央大学 多摩キャンパス 3453、3454、3455 教室

実施内容： 各ゼミによる年度活動報告

特別講演会(下記に記載)

講演者： 角 潤一 氏（外務省）

実施施設： 中央大学 多摩キャンパス 3453 教室

演 題： 外交官という仕事

5. 2016年度までの国際協力プログラム修了生の主な就職・進学先

国際協力機構（JICA）、日本国際協力センター（JICE）、伊藤忠商事、日本郵船、全日本空輸、日本航空インターナショナル、シンガポール航空、エバー航空、東日本旅客鉄道、東海旅客鉄道、JTB 首都圏、三菱東京 UFJ 銀行、三菱 UFJ 信託銀行、三井住友銀行、みずほフィナンシャルグループ、横浜銀行、信金中央金庫、大和証券、岡三証券、石川島播磨重工業、キヤノン、日産自動車、NEC、日本 IBM、日立製作所、ブリヂストン、清水建設、三井物産、大王製紙、中外製薬、アビームコンサルティング、日食、セブン-イレブン・ジャパン、LIXIL、北海道新聞社、テレビ信州、コナミデジタルエンタテインメント、KDDI、AIU 高校生国際交流プログラム事務局、日本赤十字社、国家・地方公務員（厚生労働省、会計検査院、県庁、市役所など）、東京大学大学院農学生命科学研究科、東京大学大学院新領域創成科学研究科学科、一橋大学国際・公共政策大学院、一橋大学大学院社会学研究科総合社会学研究科、名古屋大学大学院国際協力研究科、大阪大学大学院高等司法研究科、慶應義塾大学法科大学院、早稲田大学大学院法務研究科、中央大学大学院（経済学研究科、商学研究科、文学研究科、総合政策研究科、公共政策研究科）など

6. 演習教育活動

(1) 牛嶋 仁 (法学部・教授)

FLP 演習C

<テーマ>

環境法政策と地域・国際協力の諸問題

<授業の概要>

国境を越える環境法政策を素材に、社会における法の機能や公共政策の形成・実施等を事例により主体的に学んだ。

<活動内容>

演習では、グローバリゼーションとその地域との関係に焦点をあて、動態的な環境法政策の理解を深める。そのため、海外研修（海外の大学との合同ゼミおよび実地見学・実態調査）を行い、一部学生が参加した。

対象テーマは、担当教員と相談した上で、受講者が決定し、「排出権取引」とした。

春学期は、文献調査を中心に行い、秋学期は、上記テーマを小テーマに分類した上で、小テーマごとの報告・修正を繰り返し、合同のゼミ論文にまとめた。ゼミ論文は、2016年度 FLP 牛嶋ゼミ・ゼミ論文集にまとめている。

<実態調査>

以下の海外研修（別紙参照）に一部学生が参加した。

対象演習：演習C

実施日：2016年9月6日（火）～2016年9月15日（木）

実施都市：バンコク（タイ）、ビエンチャン（ラオス）

実施施設：タマサート大学・ラオス国立大学他

実施内容：別紙

成果：以下により、学生のグローバル人材教育に寄与した。

1. 熊本大学（法学部、大学院）、タマサート大学（法学部、人文学部日本語学科）、ラオス国立大学（人文学部日本語学科）と合同の学生交流を実施することができた。
2. 国際自然保護連合、現地日本企業の工場など（以上、バンコク）、JICA、名古屋大学日本法センターなど（以上、ビエンチャン）日本にない関連施設を訪問、ブリーフィングを受けた。
3. 白門会バンコク支部との交流会を開催した。

バンコク・ビエンチャン研修実施概要（別紙）

1. 研修の目的

本海外研修は、熊本大学大学院・法学部（引率・葉陵教授、本学大学院修了）と合同で、本学学生がタイ・タマサート大学、ラオス・ラオス国立大学学生と交流するとともに、バンコク、ビエンチャン所在施設を訪問することにより、学生の知見と経験を深め、環境法政策及び法律学・政治学の学習効果を向上させるために行った。

2. 研修の意義

タマサート大学及びラオス国立大学は、本学と交流協定がある他、タマサート大学には、本学事務所もおかれているなど本学と関係の深い大学である。今回の本学学生の訪問は、昨年引き続き、タマサート大学Narong Jaiharin法学部長、Naphat Sorrat法学部長補佐（本学大学院修了）、Amnat Wongbandit教授（環境法）、Warrington教授（日本語）等の援助により実現した。今回の訪問により、本学と同大学との関係がますます進展したと考えられる。牛嶋ゼミのラオス国立大学訪問は、今年度が初めてであり、これを機会にした今後の交流が期待された。

研修では、タマサート大学の2キャンパス訪問の他、研究計画記載（下記4参照）のとおり、バンコク所在施設3箇所（国際環境NGO、企業、文化施設）を訪問する他、白門会バンコク支部の懇親会に参加し、それらの経験も、学生にとっては、今後の学習を進める上で、貴重な経験になったと考えている。

3. 研修前後の学修計画と期待される効果

法学部環境法ゼミは、春学期の授業及び夏季休暇において、英語の報告準備や各機関訪問準備を行っている。研修後（秋学期）は、研修の成果をまとめる作業として、学生のグループによる調査・報告を中心に演習とゼミ論文執筆を行う予定である。FLP演習は、4年生における就職活動のため、春学期は、進んでいないが、研修を利用して演習論文を執筆する予定である。

本研修は、学内外の各種プログラムとの相乗効果により、学生のコミュニケーション能力や基礎学力について、加速度的成長を期待することができる。

4. 研修計画

（1）タマサート大との交流

タマサート大との交流は、3つの要素に分けて行った。第一に、ランシット・キャンパスにおける交流のうち、環境法のアムナート教授が参加するセミナーである。本学学生が環境法に関する報告を行った（英語）。第二に、ランシット・キャンパスにおける交流のうち、日本語学科ワリントン教授、学生とのセミナーである。時事的なテーマについて議論した（日本語、英語）。第三に、タープラチャン・キャンパスにおいて破産法のナパット講師（本学大学院修了）及び大学院生によるキャンパス案内である（日本語、英語）。

交流においては、必要に応じて、引率教員が通訳した。

(2) 各機関、文化施設訪問

バンコク、ビエンチャン各機関を訪問して、その職務およびその現状と課題について説明を受けた。

文化施設の訪問によって、文化の多様性とその保存など政策課題について知見を深めた。

(3) 日程

9月6日	東京ーバンコク着 熊本大学参加者との懇親会
9月7日	IUCN（国際自然保護連合）アジア事務所訪問 タマサート大訪問（タープラチャン・キャンパス） 法学部教員・院生による案内
9月8日	タマサート大訪問（ランシット・キャンパス） 法学部および日本語学科教員・学生と交流
9月9日	白門会バンコク支部紹介による日系企業工場 （エンケイタイ http://www.enkeithai.co.th/ ）訪問 白門会バンコク支部懇親会参加（法学部酒井ゼミも参加）
9月10日	アユタヤ見学
9月11日	学生7名は、バンコクービエンチャン着。タート・ルアン見学
9月12日	ラオス国立大学訪問（日本語学科学生との交流会）
9月13日	ラオス・日本法教育研究センター訪問 JICA法律人材育成強化プロジェクト
9月14日	都市水環境改善プロジェクトまたは都市開発管理プロジェクト 国立博物館見学、ラオス・タイ友好橋・ブッダパーク見学 ビエンチャン21時30分発東京へ

以上

（２）小森谷 徳純（経済学部・准教授）

FLP 演習 A

<テーマ>

グローバル経済環境における多国籍企業

<授業の概要>

本演習では経済学を用いて多国籍企業に関する様々なトピックをみていきます。現在のグローバル経済環境が多国籍企業にどのような変化を促すのか、あるいは多国籍企業が国々にどのような変化をもたらすのかなどがその例です。そして各トピックの中にどのような問題が存在しているのかを考えます。

その上で具体的な課題について研究を進めていくことになりますが、どのようなトピックの、どのような課題に挑戦するかは履修者の問題意識次第です。

どのような問題を考えるにしても何らかのツールが必要であり、本演習では経済学がそれになります。したがって演習 A では考えるためのツールとして経済学（経済学入門、国際経済学）を学びながら、演習 B 以降で本格的な研究を行うために、多国籍企業に関してどのようなトピックがあるのかを知り、研究課題を見つけていきます。

もちろん履修者の熱意と努力があれば、演習 A においても独自の研究に着手することも可能です。その場合は第 16～21 回の内容を夏休み中の合宿で済まし、空いた時間に第 23～28 回の内容を前倒しするなどのスケジュール変更を行います。

<活動内容>

2016 年度の小森谷ゼミ演習 A は、法学部と総合政策学部の学生のみで構成されており、前期は経済学（国際経済学を含む）を基礎から学びました。早い段階で経済開発・国際協力への多国籍企業の関わり方にゼミ生の関心が収斂したため、後期は当該テーマについて現状を把握すること、関連知識を学ぶことに尽力しました。12 月 17 日開催の 2016 年度 FLP 国際協力プログラム成果報告会では『経済開発における CSR 活動の活用』を報告しました。



(3) 林 光洋 (経済学部・教授)

FLP 演習 A

<テーマ>

発展途上国の格差・貧困問題と経済・社会開発：学際的・現場重視型アプローチ

<授業の概要>

発展途上国の実態を把握し、開発の阻害要因あるいは促進要因を理解するためには、学問間の壁を乗り越えて考える柔軟な姿勢が必要であると同時に、拠って立つ基本的な考えかたの枠組みを身につけることも重要です。また、開発分野は、他の分野以上に現場の感覚を併せ持つことが求められます。そこで、本演習は、開発経済学に軸足を置きつつ、しかし研究の対象を経済面に限定せず、教育、保健・医療、ジェンダー、環境・エネルギー等の社会・環境面へも広げ、学際的に開発問題を扱っていきます。本演習は、1 年単位のゼミではなく、3 年間で下記の分野、項目を学ぶ一貫教育を目指しています。

- (1) 開発経済学：開発経済学の基礎と潮流
- (2) 格差と貧困：格差・貧困の現状・原因・削減策、経済成長・格差・貧困の関係、貧困とマイクロファイナンス
- (3) 産業開発と海外直接投資：農業開発、工業開発、経済発展と中小企業開発、貿易と海外直接投資、CSR、BOP ビジネス
- (4) 社会開発：教育開発、保健・医療開発、人口問題、女性開発（ジェンダー）
- (5) 環境と開発：環境・資源・エネルギーと開発
- (6) アジア経済発展の経験：日本の経験、アジア発展途上国の経験、アジアの開発経験とサブサハラ・アフリカ
- (7) 国際協力：ODA、国際開発機関、NGOs、民間企業の国際協力、フェアトレード

<活動内容>

2016 年度は、開発経済学 (2 冊)、社会開発、フェアトレードの分野のテキストを合計 4 冊使用して学習しました。5 月末からの 1 週間、11 月中旬の 1 週間を使い、中央大学の生協でフェアトレード・フェアを実施したり、11 月上旬の白門祭ではフェアトレードカフェを出店したりして、実践的にフェアトレードについて学習し、中央大学のキャンパスを中心に普及・啓発にも努めました。後期は、2 班に分かれて、『貧困削減のためのビジネスアプローチーマイクロファイナンス機関と企業の提携による有効性ー』と『東アジア諸国の幼児教育の実態』という 2 編の論文を執筆しました。

下記の通り、外部から専門家を招いて特別授業を実施したり、外部で開催されたセミナー、講演会、ワークショップ等に参加したりして、開発分野の最新情報を吸収し、開発分野のネットワークを形成するように努力しました。活動内容の一部については、最下段に記載した URL もご参照ください。



白門祭でカフェを出店する FLP 国際協力プログラムの学生団体 FACT（中央大学フェアトレード委員会）と林ゼミのメンバー

【特別授業、セミナー、講演会等】

下記の特別授業、セミナー、講演会等を通じて、それぞれの分野について多くを学習

1) 途上国での現地調査の実施手法について学ぶ

実施期間： 2016 年度前期毎週木曜日（合計 12 回）

実施場所： 中央大学 7 号館 7406 教室

実施内容： 途上国での現地調査の豊富な実践経験を有する専門家、社会開発国際調査研究センターの山田恭稔さんを招き、現地調査を含む開発分野の研究を行なう際、具体的に、準備をどのように行ない、現場で現地調査をどのように実施し、得られた結果をどのように論文としてまとめていったらいいのか、といったことについて学習

2) 国際開発金融機関の役割について学ぶ

実施期間： 2016 年 4 月 26 日（火）

実施場所： 中央大学 7 号館 7202 教室および 7709 教室

実施内容： 元 ADB（アジア開発銀行）の前川司さんを招き、ADB の貧困削減における役割について学習

3) 国際開発金融機関の役割について学ぶ

実施期間： 2016 年 5 月 24 日（火）

実施場所： 中央大学 7 号館 7202 教室および 7709 教室

実施内容： 元 IDB（米州開発銀行）の綿貫雅一さんを招き、途上国を巻き込んだ地域経済統合の経済開発、環境開発について学習

4) NGOs の活動について学ぶ

実施期間： 2016 年 7 月 5 日（火）

実施場所： 中央大学 7 号館 7202 教室

実施内容： LIFE（地球の友と歩む会）の米山敏裕さんを招き、NGO である LIFE のインドにおける衛生設備（トイレ）設置を中心とする保健・衛生分野の活動について学習

5) 国際機関および NGOs の活動について学ぶ

実施期間： 2016 年 11 月 18 日（金）

実施場所： 中央大学 ヒルトップ 78 内 G スクエア

実施内容： 日本ユニセフ協会の高円承子さんを招き、国際機関である UNICEF とそれを支える NGO である日本ユニセフ協会が子どもや母親の保健・健康・衛生、教育等の分野においてどのような支援活動をしているのかについて学習

6) アジアとアフリカの開発について学ぶ

実施期間： 2016 年 12 月 20 日（火）

実施場所： 中央大学 8 号館 8303 教室および 7 号館 7709 教室

実施内容： A&M コンサルタントの松本彰さんを招き、アジア途上諸国とサブサハラ・アフリカ途上諸国の開発について、進みかたやその背後にある状況について比較してもらいながら両地域の特徴について学習

7) 市民社会の国際協力推進について学ぶ

実施期間： 2016 年 12 月 26 日（月）

実施場所： ユニセフハウス会議室

実施内容： 市民社会による国際協力を推進するために、NGOs の 1 つである日本ユニセフ協会がどのような工夫や活動をしたらいいのかについて、参加型ミニワークショップに参加して議論、意見交換、学習

8) JICA のボランティア活動について学ぶ

実施期間： 2017 年 1 月 13 日（金）

実施場所： 中央大学 3 号館 3115 教室

実施内容： 青年海外協力協会の立脇慧一さんと日本スポーツ振興センター（スポーツ・フォー・トゥモロー・コンソーシアム事務局）の岸卓巨さんを招き、JICA のボランティア事業である青年海外協力隊の制度とその途上国（ケニア）における実際の活動について学習

9) 開発教育の実施方法について学ぶ

実施期間： 2017 年 1 月 22 日（日）

実施場所： JICA 地球ひろばセミナールーム 600

実施内容： JICA 主催のワークショップ、「教師海外研修報告会：発展途上国の「今」を見てきた先生たち、日本でどんな授業をしたのかな?」に参加し、途上国で JICA の国際協力プロジェクトや関連したものを視察してきた小学校、中学校、高校の教員が、日本でどのように開発教育、国際理解教育を行なっているのかについて学習

【参考 URL】

- 1) 中央大学生協で開催したフェアトレード・フェア
<http://www.chuo-u.ac.jp/aboutus/event/2016/11/49464/>
- 2) 日本ユニセフ協会を招いての講演会開催とユニセフのハンド・イン・ハンド募金の募金ボランティア実施
<http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2016/12/6722/>
- 3) ユニセフのミニワークショップ（上智大学、東京大学、明治学院大学、中央大学の4大学参加）で優勝
<http://www.unicef.or.jp/news/2017/0017.html>

F L P 演習 B

<テーマ>

発展途上国の格差・貧困問題と経済・社会開発：学際的・現場重視型アプローチ

<授業の概要>

発展途上国の実態を把握し、開発の阻害要因あるいは促進要因を理解するためには、学問間の壁を乗り越えて考える柔軟な姿勢が必要であると同時に、拠って立つ基本的な考えかたの枠組みを身につけることも重要です。また、開発分野は、他の分野以上に現場の感覚を併せ持つことが求められます。そこで、本演習は、開発経済学に軸足を置きつつ、しかし研究の対象を経済面に限定せず、教育、保健・医療、ジェンダー、環境・エネルギー等の社会・環境面へも広げ、学際的に開発問題を扱っていきます。本演習は、1年単位のゼミではなく、3年間で下記の分野、項目を学ぶ一貫教育を目指しています。

- (1) 開発経済学：開発経済学の基礎と潮流
- (2) 格差と貧困：格差・貧困の現状・原因・削減策、経済成長・格差・貧困の関係、貧困とマイクロファイナンス
- (3) 産業開発と海外直接投資：農業開発、工業開発、経済発展と中小企業開発、貿易と海外直接投資、CSR、BOP ビジネス
- (4) 社会開発：教育開発、保健・医療開発、人口問題、女性開発（ジェンダー）
- (5) 環境と開発：環境・資源・エネルギーと開発
- (6) アジア経済発展の経験：日本の経験、アジア発展途上国の経験、アジアの開発経験とサブサハラ・アフリカ
- (7) 国際協力：ODA、国際開発機関、NGOs、民間企業の国際協力、フェア・トレード

<活動内容>

2016年度は、途上国の社会開発とフィリピンにおけるミレニアム開発目標の成果（英語）に関する2冊のテキストを輪読し、知識を獲得するとともに、英語文献・資料の使用に慣れるように努めました。また、林ゼミの中心的イベントであり、ほぼすべてのプロセス・作業を学生が行なう3年次の1年間の研究プロジェクトも実施しました。前年度末の2016年2月から本格的にスタートし、研究対象国・テーマを決め、経済学部鈴木敏文奨学金に応募して資金を確保し、研究計画書を作成し、国内事前調査を行ない、訪問先のアポイントメントをとりつけ、ロジスティクスの手配をし、フィリピンでの海外現地調査（9月初旬から2週間）を実施し、最終的に、2017年3月、英語版および日本語版の本格的な研究論文を完成させました。

このプロジェクトでは、フィリピンの低所得者層の生活改善について、教育、保健・衛生、ビジネス（BOP ビジネス）の分野で研究を行ないました。外部から専門家を招いて特別授業を実施したり、外部で開催されたセミナー、講演会、ワークショップ等に参加したりして、研究に必要な知識や情報の獲得に努めました。また、現地調査実施後は、さまざまな機会を利用して研究成果を発表しました。活動内容の一部については、最下段に記載したURLもご参照ください。

【海外現地調査】

フィリピン現地調査

実施期間： 2016 年 9 月 3 日（土）～ 9 月 16 日（金）

実施場所： フィリピン（マニラおよびその周辺地域）

実施内容： フィリピンにおける、①条件付き現金給付（CCT）の教育参加に対する効果、②都市貧困層に対する保健所の役割、③BOP ビジネスの販売におけるローカル・ヒューマン・リソースの役割、について研究

成 果： 上記の教育、保健、BOP ビジネスの分野において、それぞれ条件付き現金給付（CCT）、地域保健所、ローカル・ヒューマン・リソースがフィリピンの人々の生活改善に一定の効果や役割を有していたこと、しかしそれらが効果や役割を発揮するには何らかの条件を満たす必要があること、あるいはそれらにも限界があることを確認。現地調査や英語版の論文執筆を含む本格的な研究プロジェクトを自分たちで実施したことにより、アカデミックな面（開発や国際協力の分野）でも、その他の面（社会に出て求められること、etc.）でも、多くの経験、知識、情報を獲得、蓄積。



マニラ首都圏の貧困地域、パヤタス地区でのインタビュー調査に同行してくれたフィールドワーカーたちと彼らの所属する社会福祉開発省の前で

【特別授業、セミナー、講演会等】

下記の特別授業、セミナー、講演会等を通じて、それぞれの分野について多くを学習

1) 途上国での現地調査の実施手法について学ぶ

実施期間： 2016 年度前期毎週木曜日（合計 12 回）

実施場所： 中央大学 7 号館 7406 教室

実施内容： 途上国での現地調査の豊富な実践経験を有する専門家、社会開発国際調査研究センターの山田恭稔さんを招き、現地調査を含む開発分野の研究を行なう際、具体的に、準備をどのように行ない、現場で現地調査をどのように実施し、得られた結果をどのように論文としてまとめていったらいいのか、といったことについて学習

2) 国際開発金融機関の役割について学ぶ

実施期間： 2016 年 4 月 26 日（火）

実施場所： 中央大学 7 号館 7202 教室および 7709 教室

実施内容： 元 ADB（アジア開発銀行）の前川司さんを招き、ADB の貧困削減における役割について学習

3) 国際開発金融機関の役割について学ぶ

実施期間： 2016 年 5 月 24 日（火）

実施場所： 中央大学 7 号館 7202 教室および 7709 教室

実施内容： 元 IDB（米州開発銀行）の綿貫雅一さんを招き、途上国を巻き込んだ地域経済統合の経済開発、環境開発について学習

4) NGOs の活動について学ぶ

実施期間： 2016 年 7 月 5 日（火）

実施場所： 中央大学 7 号館 7202 教室

実施内容： LIFE（地球の友と歩む会）の米山敏裕さんを招き、NGO である LIFE のインドにおける衛生設備（トイレ）設置を中心とする保健・衛生分野の活動について学習

5) グローバル化の中のローカル・コミュニティについて学ぶ

実施期間： 2016 年 10 月 8 日（土）

実施場所： 中央大学 ヒルトップ 78 内 G スクエア

実施内容： 文部科学省の Go Global Japan プログラムに採択された大学間で行なっている英語プレゼンテーションの学内大会に教育班、保健・衛生班、BOP ビジネス班の 3 班が出場し、それぞれのフィリピン現地調査の経験や結果を活用しながら、ローカル・コミュニティをグローバル社会につないでいくためのアイデアを提案。グローバル化の流れの中で、ローカル・コミュニティをどのように育成し、活用していくかについて学習

6) 国際機関および NGOs の活動について学ぶ

実施期間： 2016 年 11 月 18 日（金）

実施場所： 中央大学 ヒルトップ 78 内 G スクエア

実施内容：日本ユニセフ協会の高円承子さんを招き、国際機関である UNICEF とそれを支える NGO である日本ユニセフ協会が子どもや母親の保健・健康・衛生、教育等の分野においてどのような支援活動をしているのかについて学習

7) アジアとアフリカの開発について学ぶ

実施期間：2016 年 12 月 20 日（火）

実施場所：中央大学 8 号館 8303 教室および 7 号館 7709 教室

実施内容：A&M コンサルタントの松本彰さんを招き、アジア途上諸国とサブサハラ・アフリカ途上諸国の開発について、進みかたやその背後にある状況について比較してもらいながら両地域の特徴について学習

8) 市民社会の国際協力推進について学ぶ

実施期間：2016 年 12 月 26 日（月）

実施場所：ユニセフハウス会議室

実施内容：市民社会による国際協力を推進するために、NGOs の 1 つである日本ユニセフ協会がどのような工夫や活動をしたらいいのかについて、参加型ミニワークショップに参加して議論、意見交換、学習

9) JICA のボランティア活動について学ぶ

実施期間：2017 年 1 月 13 日（金）

実施場所：中央大学 3 号館 3115 教室

実施内容：青年海外協力協会の立脇慧一さんと日本スポーツ振興センター（スポーツ・フォー・トゥモロー・コンソーシアム事務局）の岸卓巨さんを招き、JICA のボランティア事業である青年海外協力隊の制度とその途上国（ケニア）における実際の活動について学習

10) 開発教育の実施方法について学ぶ

実施期間：2017 年 1 月 22 日（日）

実施場所：JICA 地球ひろばセミナールーム 600

実施内容：JICA 主催のワークショップ、「教師海外研修報告会：発展途上国の「今」を見てきた先生たち、日本でどんな授業をしたのかな?」に参加し、途上国で JICA の国際協力プロジェクトや関連したものを視察してきた小学校、中学校、高校の教員が、日本でどのように開発教育、国際理解教育を行なっているのかについて学習

【その他】

下記の活動等を通じて、それぞれに関連する知識や情報を獲得

1) 貧困研究のアプローチ方法についての学習

実施日：2016年7月3日（日）、10月23日（日）、11月20日（日）

実施都市：神奈川県横浜市

実施施設：関東学院大学

- 実施内容： 貧困とその削減について研究する他大学のゼミ学生にインタビューし、貧困をどのような枠組みで、どのような方法で研究したらいいのかについて学習
- 2) フィリピンの条件付き現金給付についての学習
- 実施日： 2016年7月27日（水）
- 実施都市： 千葉県柏市
- 実施施設： 東京大学
- 実施内容： 東京大学大学院新領域研究科の開発経済学の専門家（教員）に聞き取り調査を行ない、フィリピンにおける条件付き現金給付の効果を検証するための研究手法等について学習
- 3) 開発経済学の中での教育分野のあつかいかたについて学習
- 実施日： 2016年7月30日（土）
- 実施都市： 東京都港区
- 実施施設： 慶応義塾大学三田キャンパス
- 実施内容： 慶応大学経済学部の開発経済学の専門家（教員）に聞き取り調査を行ない、教育のトピックに対してどのようにアプローチし、それを論文の中でどのように反映させていくのかについて学習
- 4) フィリピンのBOPビジネスについて学習
- 実施日： 2016年8月2日（火）
- 実施都市： 東京都武蔵野市
- 実施施設： 亜細亜大学
- 実施内容： 亜細亜大学経営学部の経営学の専門家（教員）に聞き取り調査を行ない、フィリピンのBOPビジネスの実態について学習
- 5) BOPビジネスのテーマの設定方法について学習
- 実施日： 2016年8月8日（月）～8月10日（水）
- 実施都市： 北海道札幌市
- 実施施設： 北海学園大学
- 実施内容： 北海学園大学経営学部の国際系の専門家（教員）に聞き取り調査を行ない、BOPビジネスをどのような枠組みやアプローチで研究していくのかについて学習
- 6) 途上国での現地調査の実施手法について学ぶ
- 実施日： 2016年8月12日（金）
- 実施都市： 東京都渋谷区
- 実施施設： オリンピックセンター内の会議室
- 実施内容： 現地調査の実施方法（質問票の作りかた、インタビューのしかた、それらのまとめかた等）について学習
- 7) マニラの結核予防会事務所の活動とフィリピンの感染症について学ぶ
- 実施日： 2016年8月16日（火）
- 実施都市： 東京都清瀬市

実施施設：結核予防会

実施内容：結核予防会のフィリピン担当者に聞き取り調査を行ない、マニラにある同会の現地事務所の活動内容やフィリピンの感染症の状況について学習

8) マニラ貧困地域の状況について学ぶ

実施日：2016年8月20日（土）

実施都市：東京都武蔵野市

実施施設：武蔵野プレイス

実施内容：マニラのゴミ山であり、貧困地域であるパヤタス地区で貧困層への支援を行っているNGO、ソルト・パヤタスの講演会に参加した後、講演者に個別に聞き取り調査を行ない、さらに詳しいパヤタス地区の状況、特に教育環境について学習

9) UHCとPhilHealthについて学ぶ

実施日：2016年9月1日（木）

実施都市：埼玉県川越市

実施施設：アジア砒素ネットワーク

実施内容：保健・衛生分野に強いNGO、アジア砒素ネットワークの専門家に聞き取り調査を行ない、UHC（ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ）とPhilHealth（フィリピン健康保険）について学ぶ

10) フィリピン現地調査

実施日：2016年9月3日（土）～9月16日（金）

実施都市：マニラ（フィリピン）

実施施設：ADB（アジア開発銀行）、Department of Health（フィリピン保健省）、Department of Social Welfare and Development（フィリピン社会福祉・開発省）、他多数

実施内容：前述の【海外現地調査】の項目に記載した通り

11) フィリピンの社会・経済発展とADBの役割について学ぶ

実施日：2016年9月4日（日）

講演者：前川 司 氏

演題：フィリピンの発展と国際開発金融機関の役割：アジア開発銀行での経験をベースにして

実施都市：マニラ（フィリピン）

実施施設：Best Western Oxford Suites Makati Hotelの会議室

実施内容：現地調査時、元ADB（アジア開発銀行）職員の前川司さんからフィリピンの現状とADBの活動内容について講演してもらい、同国の社会・経済発展とADBの役割について学習

【参考 URL】

- 1) 日本ユニセフ協会を招いての講演会開催とユニセフのハンド・イン・ハンド募金の募金ボラン

ティア実施

<http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2016/12/6722/>

- 2) ユニセフのミニワークショップ（上智大学、東京大学、明治学院大学、中央大学の 4 大学参加）で優勝

<http://www.unicef.or.jp/news/2017/0017.html>

F L P 演習 C

<テーマ>

発展途上国の格差・貧困問題と経済・社会開発：学際的・現場重視型アプローチ

<授業の概要>

発展途上国の実態を把握し、開発の阻害要因あるいは促進要因を理解するためには、学問間の壁を乗り越えて考える柔軟な姿勢が必要であると同時に、拠って立つ基本的な考えかたの枠組みを身につけることも重要です。また、開発分野は、他の分野以上に現場の感覚を併せ持つことが求められます。そこで、本演習は、開発経済学に軸足を置きつつ、しかし研究の対象を経済面に限定せず、教育、保健・医療、ジェンダー、環境・エネルギー等の社会・環境面へも広げ、学際的に開発問題を扱っていきます。本演習は、1年単位のゼミではなく、3年間で下記の分野、項目を学ぶ一貫教育を目指しています。

- (1) 開発経済学：開発経済学の基礎と潮流
- (2) 格差と貧困：格差・貧困の現状・原因・削減策、経済成長・格差・貧困の関係、貧困とマイクロファイナンス
- (3) 産業開発と海外直接投資：農業開発、工業開発、経済発展と中小企業開発、貿易と海外直接投資、CSR、BOP ビジネス
- (4) 社会開発：教育開発、保健・医療開発、人口問題、女性開発（ジェンダー）
- (5) 環境と開発：環境・資源・エネルギーと開発
- (6) アジア経済発展の経験：日本の経験、アジア発展途上国の経験、アジアの開発経験とサブサハラ・アフリカ
- (7) 国際協力：ODA、国際開発機関、NGOs、民間企業の国際協力、フェア・トレード

<活動内容>

2016年度は、特に卒業論文の完成に向けて、研究計画書作りと幾度にもわたる論文の中間報告に時間を割きました。誰1人脱落することなく、メンバー全員が卒業（修了）論文を書きあげました。卒業論文の作成に加えて、下記のように、外部から専門家を招いて特別授業を実施したり、外部で開催されたセミナー、講演会、ワークショップ等に参加したりして、研究に必要な知識や情報の獲得に努めました。

さらに、本年度は、2016年11月、2つの高校（中央大学附属高校、中央大学杉並高校）に対して訪問授業を実施し、ゼミ学生がこれまで学んだり、経験したりした開発、国際協力関連のことをより若い世代に伝えるとともに、学生自身の知識の整理を行ない、また、開発教育についての実践的研究も実施しました。活動内容の一部については、最下段に記載したURLもご参照ください。

【訪問授業】

実施期間： 2016 年 11 月 9 日（水）、11 月 10 日（木）

実施場所： 中央大学附属高校、中央大学杉並高校

実施内容： 自分たちで行なった海外現地調査（インドネシア）の経験や結果を材料として使用しながら、途上国の基礎的な状況、貧困の特徴、貧困に陥る要因、貧困解決の方法等のテーマで高校生に対して参加型の授業を実施。授業時に高校生に対して質問票を配布し、開発教育の効果、開発教育で留意すべきこと等についての調査も実施

成 果： 高校生に対する開発・国際協力の啓発推進や情報提供、そしてゼミ学生自身の知識の整理、情報の伝えかたの学習。さらに、開発教育の効果、開発教育を実施する際に求められていること、注意すべきこと等について学習



日本ユニセフ協会の高田承子さんを招いて開催した講演会（林ゼミメンバーが企画・実施）

【特別授業、セミナー、講演会等】

下記の特別授業、セミナー、講演会等を通じて、それぞれの分野について多くを学習

1) 国際開発金融機関の役割について学ぶ

実施期間： 2016 年 4 月 26 日（火）

実施場所： 中央大学 7 号館 7202 教室および 7709 教室

実施内容： 元 ADB（アジア開発銀行）の前川司さんを招き、ADB の貧困削減における役割について学習

2) 国際開発金融機関の役割について学ぶ

実施期間： 2016 年 5 月 24 日（火）

実施場所： 中央大学 7 号館 7202 教室および 7709 教室

実施内容： 元 IDB（米州開発銀行）の綿貫雅一さんを招き、途上国を巻き込んだ地域経済統合の経済開発、環境開発について学習

3) NGOs の活動について学ぶ

実施期間： 2016 年 7 月 5 日（火）

実施場所： 中央大学 7 号館 7202 教室

実施内容： LIFE（地球の友と歩む会）の米山敏裕さんを招き、NGO である LIFE のインドにおける衛生設備（トイレ）設置を中心とする保健・衛生分野の活動について学習

4) 国際機関および NGOs の活動について学ぶ

実施期間： 2016 年 11 月 18 日（金）

実施場所： 中央大学 ヒルトップ 78 内 G スクエア

実施内容： 日本ユニセフ協会の高円承子さんを招き、国際機関である UNICEF とそれを支える NGO である日本ユニセフ協会が子どもや母親の保健・健康・衛生、教育等の分野においてどのような支援活動をしているのかについて学習

5) アジアとアフリカの開発について学ぶ

実施期間： 2016 年 12 月 20 日（火）

実施場所： 中央大学 8 号館 8303 教室および 7 号館 7709 教室

実施内容： A&M コンサルタントの松本彰さんを招き、アジア途上諸国とサブサハラ・アフリカ途上諸国の開発について、進みかたやその背後にある状況について比較してもらいながら両地域の特徴について学習

6) 市民社会の国際協力推進について学ぶ

実施期間： 2016 年 12 月 26 日（月）

実施場所： ユニセフハウス会議室

実施内容： 市民社会による国際協力を推進するために、NGOs の 1 つである日本ユニセフ協会がどのような工夫や活動をしたらいいのかについて、参加型ミニワークショップに参加して議論、意見交換、学習

7) JICA のボランティア活動について学ぶ

実施期間： 2017 年 1 月 13 日（金）

実施場所： 中央大学 3 号館 3115 教室

実施内容： 青年海外協力協会の立脇慧一さんと日本スポーツ振興センター（スポーツ・フォー・トゥモロー・コンソーシアム事務局）の岸卓巨さんを招き、JICA のボランティア事業である青年海外協力隊の制度とその途上国（ケニア）における実際の活動について学習

8) 開発教育の実施方法について学ぶ

実施期間： 2017 年 1 月 22 日（日）

実施場所： JICA 地球ひろばセミナールーム 600

実施内容： JICA 主催のワークショップ、「教師海外研修報告会：発展途上国の「今」を見てきた先生たち、日本でどんな授業をしたのかな?」に参加し、途上国で JICA の国際協力プロジェクトや関連したものを視察してきた小学校、中学校、高校の教員が、日本でどのように開発教育、国際理解教育を行なっているのかについて学習

【その他】

下記の活動等を通じて、それぞれに関連する知識や情報を獲得

1) 開発教育について学ぶ

実施日： 2016年11月9日（水）

実施都市： 東京都小金井市

実施施設： 中央大学附属高等学校

実施内容： 前述の【訪問授業】の項目に記載した通り

2) 開発教育について学ぶ

実施日： 2016年11月10日（木）

実施都市： 東京都杉並区

実施施設： 中央大学杉並高等学校

実施内容： 前述の【訪問授業】の項目に記載した通り

3) 貧困研究のアプローチ方法についての学習

実施日： 2016年11月20日（日）

実施都市： 神奈川県横浜市

実施施設： 関東学院大学

実施内容： 貧困とその削減について研究する他大学のゼミ学生にインタビューし、貧困をどのような枠組みで、どのような方法で研究したらいいのかについて学習

【参考 URL】

1) 中央大学附属高校、中央大学杉並高校で訪問授業を実施

<http://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2016/11/49846/>

2) 日本ユニセフ協会を招いての講演会開催とユニセフのハンド・イン・ハンド募金の募金ボランティア実施

<http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2016/12/6722/>

3) ユニセフのミニワークショップ（上智大学、東京大学、明治学院大学、中央大学の 4 大学参加）で優勝

<http://www.unicef.or.jp/news/2017/0017.html>

(4) 武石 智香子 (商学部・教授)

FLP 演習 A・B

<テーマ>

【演習 A】

日本文化紹介英語プレゼン…近代社会の共通性の中で

【演習 B】

“Social Sustainability, Social Entrepreneurship & Leadership”

<授業の概要>

【演習 A】

現代日本、特に若者の思考法について、それが近代の若者に共通したことなのか、日本の文化的な特徴なのかについて自分たちで考え、ボストン大学、ブランダイス大学で英語によるプレゼン、ブランダイス大学、ボストン大学、ハーバード大学の授業にそれぞれ参加してディスカッションを行った。

【演習 B】

Students made two presentations in Boston: one on sustainability presented in Brandeis University, and the other on Japanese traditional festivals presented in Boston University. The students made an appointment with a Harvard student and discussed with her the biggest social issues in Japan. The students collaborated with Brandeis students to discuss sustainability issues of their choices through Bluejeans System, which is similar to Skype, after returning to Japan.

<活動内容>

武石ゼミは、演習 A・B 合同で、春学期より社会起業家 (Social Entrepreneurship) および持続可能性 (Sustainability) について英語の文献を読み、後者をテーマとして英語のプレゼン作成を準備した。

秋学期からは、ハーバード大学の授業と連動するため、トクヴィルの *Democracy in America* を英語および日本語で読んで討論の準備をした。11 月にはボストンの 3 大学で実態調査を行った。その模様は下記の通りである。

帰国後、ブランダイス大学の学生とペアリング・プロジェクトを実施し、ペアごとに選んだ「持続可能性」に関する問題について、遠隔システムを通して討論し、ペアとしての意見をまとめた。

実態調査および帰国後のペアリング・プロジェクトの経験から学んだことについて、各自 2 本の英語レポートを書き、学年末に報告書としてまとめた。

<実態調査>

対象演習：演習A・B

実施日：2016年11月7日（月）～ 11月18日（金）

実施都市：ボストン・ニューヨーク（アメリカ）

実施施設：ハーバード大学

実施内容：下記の通り

FLP武石ゼミA・B

中央大学
CHUO UNIVERSITY
— Established 1862 —

ボストン研修

～ハーバード大学・ボストン大学・ブランダイス大学～

Yoshino Koichiro・Nishio Keika・Yabe Yoko・Hosoya Kazuki・
Koiso Naoya・Haraguchi Koichi・Edakubo Minami

FLP 武石ゼミの目的

1 社会科学の古典を読み、個々人にとっての社会問題と解決に向けた姿勢について意見を述べられるようにする。



2 異文化・異文明体験をすることによって、diversity awarenessを醸成する。

3 地球規模課題に対して、“sustainability”などのcommon groundから問題解決型の提案をする。



11月7日（月）～ 8日（火）

11月8日に行われた大統領選をトランプ、
クリントン両候補（当時）が投票した
ニューヨークで迎えた。



11月9日（水）

移動・ボストンにて集合

11月10日（木）Harvard University

Discussion

～Democracy in America～

Harvard University

11月10日
ディスカッション
テーマ「トクヴィル アメリカのデモクラシー」



11月11日（金）Brandeis University

日本語学科の学生たちとランチの後、研究集会に参加。

Brandeis University



<http://www.brandeis.edu>
<http://colleges.brandeis.edu>

11/11

昼食



研究集会



Brandeis University



<http://www.brandeis.edu>
<http://colleges.brandeis.edu>

11/11

講師	内容
Chikako Takeishi	グループアイデンティティが引き起こす問題から見るアメリカ大統領選挙
Zeying Wu	"Chinese dream"について
Liah Greenfield	トランプ現象とアメリカのアイデンティティの変化
Martin Weiss	イギリスのEU離脱とアメリカ大統領選挙を踏まえて
Chandler Rosenberger	アメリカの共和党の変化

11月12日（土）Harvard University

日本における各人にとっての「最大の問題」について、ハーバードの学生と討論。

その後、スペシャル・キャンパスツアー。

Harvard University

11月12日
学生と食事 ディスカッション
ハーバードキャンパスツアー



<http://www.harvard.edu>
<http://campus.harvard.edu>

Harvard University



<http://www.harvard.edu>
<http://campus.harvard.edu>

- 1) What is the biggest problem you know of in Japan?
- 2) Why is this a problem?
- 3) Who does the problem hurt?
- 4) How does the problem make you feel?
- 5) How do others around you feel about the problem?
- 6) Can you tell me about the time when problem became noticeable?
- 7) Can you tell me about your family and what they think of the problem?
- 8) How did your family find out about the problem?
- 9) Tell me how they responded to the issue?
- 10) What has the government done? Give me an example.

11月14日（月）Boston University

ボストン大学はインターナショナル・ウィーク。プレゼンと日米の意識比較。



Boston University



<https://bu.edu>

Day 1



ボストン大学 International Week

プレゼン風景



Boston University



<https://bu.edu>

-日米比較意識調査-(Day1)



日米比較調査の様子
(ボストン大学の生徒)



Greenfield先生

11月14日（月）Boston University

前日の意識調査比較のまとめ。プレゼンと討論。



Boston University



Boston University



自分の生きている社会にとって重要なもの

中央大学学生

- 1 調和
- 2 国際的平和
- 3 平等
- 4 個人の自由
- 5 経済力
- 6 国際社会からの尊敬

ボストン大学学生

- 1 平等
- 2 個人の自由
- 3 調和
- 4 経済力
- 5 国際的平和
- 6 国際社会からの尊敬

自分の生きている社会にとって悪影響なもの

中央大学学生

- 1 国際的戦争
- 2 国内の分裂
- 3 個人の自由がないこと
- 4 不平等
- 5 経済力が弱い
- 6 世界の中での悪い評価

ボストン大学学生

- 1 国内の分裂
- 2 個人の自由がないこと
- 3 不平等
- 4 経済力が弱い
- 5 国際的戦争
- 6 世界の中での悪い評価



Boston University



Day 2

阿波踊りの実演



両学生集合写真

11月14日（月）Brandeis University

キャンパス・ツアーの後、ランチを囲んで交流会。

日本語学科の授業に参加して、ペアリング・プロジェクトをペア毎に企画。

その後、大教室に移動してプレゼン、懇親会。

Brandeis University



11/16

校内ガイド



交流会



Brandeis University



11/16

プレゼンの様子



成 果：成果は英語論文をまとめた報告書（別紙）の通りである。

<ゲストスピーカー講演>

対象演習：演習A・B

実施日：2017年1月12日（木）

講演者：坂本 典子 氏

演 題：サステナビリティについて

実施都市：東京都八王子市

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 5601教室

実施内容：Japan for Sustainabilityの活動について講義

成 果：講義後に、学生が Sustainability Meet-up に参加し、フランスやコスタリカの
社会人と英語で話し合うなどの自主的な活動につながっている。

（５）中迫 俊逸（商学部・教授）

FLP演習B

<テーマ>

ビジネス・コミュニケーションとその関連分野の研究

<授業の概要>

本演習においては、(1) 異文化コミュニケーションの理論と実践の研究、(2) 海外研修及び(3) ビジネス英語のトレーニングを行なう。ビジネス・コミュニケーションの研究においては、受講生による個人発表をさせた。海外研修では、実際に外国に行き、日系企業や現地企業等でインタビューを行った。インタビュー項目は各種文献等を通じて作成し、インタビュー相手に事前に送付するのでかなり早い段階から準備を行った。また、研修後は報告書の作成と FLP 国際協力期末成果報告会で口頭発表を行った。ビジネス英語のトレーニングとしては、ほぼ毎回の講義で音声教材とほぼ同時に話させ、平常点をつけた。

国外実態調査のための準備に相当時間を要した。事前学習をかなり行い、各訪問先で行うインタビュー項目を事前に作成していたので、現地における学習効果はかなり高かった。その研究成果は口頭発表と研究論文で公表した。2016 年 12 月に、FLP 国際協力プログラム 2016 年度成果報告会で口頭発表をした。また、研究論文としては、2016 年度中央大学中迫ゼミ 国外実態調査報告書として公表した。学生たちがインタビューのために費やした時間、帰国後の論文作成および成果報告会での口頭発表の準備には多大な時間がかかった。学生指導と訪問先との交渉に苦労した甲斐があったと思っている。

<活動内容>

授業の概要と重ならないものは以下の通りである。

<実態調査・見学調査・講演会>

実施日：2016 年 9 月 3 日（土）～ 9 月 7 日（水）

実施都市：ドバイ（UAE）

実施施設：JETRO ドバイ事務所、JBIC ドバイ事務所、Sheikh Mohammed Centre for Cultural Understanding

実施内容：訪問先において、インタビュー調査を行った。

成果：JETRO ドバイ事務所および JBIC ドバイ事務所において事前に送付したインタビュー項目を中心に、長時間にわたる聞き取り調査を行った。Sheikh Mohammed Centre for Cultural Understanding においては、同所長による英語の講義を中心に活発な議論が行われた。その具体的な成果は FLP 国際協力プログラム 2016 年度成果報告会における口頭発表と 2016 年度中央大学中迫ゼミ 国外実態調査報告書によって公表されている。

FLP演習C

<テーマ>

ビジネス・コミュニケーションとその関連分野の研究

<授業の概要>

本演習においては、(1) 異文化コミュニケーションの理論と実践の研究、(2) 海外研修及び(3) ビジネス英語のトレーニングを行なう。ビジネス・コミュニケーションの研究においては、受講生による個人発表をさせた。海外研修では、実際に外国に行き、日系企業や現地企業等でインタビューを行った。インタビュー項目は各種文献等を通じて作成し、インタビュー相手に事前に送付するのでかなり早い段階から準備を行った。また、研修後は報告書の作成とFLP国際協力期末成果報告会で口頭発表を行った。ビジネス英語のトレーニングとしては、ほぼ毎回の講義で音声教材とほぼ同時に話させ、平常点をつけた。

国外実態調査のための準備に相当時間を要した。事前学習をかなり行い、各訪問先で行うインタビュー項目を事前に作成していたので、現地における学習効果はかなり高かった。その研究成果は口頭発表と研究論文で公表した。2016年12月に、FLP国際協力プログラム2016年度成果報告会で口頭発表をした。また、研究論文としては、2016年度中央大学中迫ゼミ国外実態調査報告書として公表した。学生たちがインタビューのために費やした時間、帰国後の論文作成および成果報告会での口頭発表の準備には多大な時間がかかった。学生指導と訪問先との交渉に苦労した甲斐があったと思っている。

<活動内容>

授業の概要と重ならないものは以下の通りである。

<実態調査・見学調査・講演会>

実施日：2016年9月3日（土）～9月7日（水）

実施都市：ドバイ（UAE）

実施施設：JETRO ドバイ事務所、JBIC ドバイ事務所、Sheikh Mohammed Centre for Cultural Understanding

実施内容：訪問先において、インタビュー調査を行った。

成果：JETRO ドバイ事務所およびJBIC ドバイ事務所において事前に送付したインタビュー項目を中心に、長時間にわたる聞き取り調査を行った。Sheikh Mohammed Centre for Cultural Understanding においては、同所長による英語の講義を中心に活発な議論が行われた。その具体的な成果はFLP国際協力プログラム2016年度成果報告会における口頭発表と2016年度中央大学中迫ゼミ国外実態調査報告書によって公表されている。

(6) 平澤 敦 (商学部・教授)

FLP 演習 A

<テーマ>

企業・産業の国際比較～グローバル思考養成のために

<授業の概要>

グループごとに研究テーマを設定し、研究に必要な基礎的知識をマスターし、基礎的知識の共有化をはかったうえで、グループ研究を進めていく。

毎回2グループが報告を行い、それに対するコメントおよびディスカッションを行う。

<活動内容>

FLP 演習 A 平澤敦ゼミは、食品産業およびショッピングモールの役割についての国際比較というテーマを選択し、2班にわかれて研究を進めた。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習A

実施日：2016年11月8日（火）～ 11月11日（金）

実施都市：香港（香港）

実施施設：JETRO

実施内容：香港における食品産業の現状と将来的展望についてのヒアリング

成 果：JETROの担当者の方による報告を1時間程度拝聴した後、ゼミ生との質疑応答を行って頂いた。

香港の経済的現況、アジアにおけるポジションについて、詳細な内容を把握することができた。

また、「食」という観点から見ると、外食依存度が高く、わが国のライフスタイルとは異なる点が多々あることが理解できた。

香港は、金融都市という側面が強いため、金融市場の動向に左右される面が強いと思われる。また観光という側面も重要な役割を担っている。わが国からも多くの人々が香港を訪れているが、ここ数年の日本食レストランの進出は注目に値する。

今回のヒアリングでは2時間にわたるヒアリングから、研究の進展に示唆に富む内容の情報を得ることができた。

FLP 演習 B

<テーマ>

企業・産業の国際比較分析～ケーススタディを中心として

<授業の概要>

グループごとに研究テーマを設定し、研究に必要な基礎的知識をマスターし、基礎的知識の共有をはかったうえで、グループ研究を進めていく。

毎回2グループが報告を行い、それに対するコメントおよびディスカッションを行う。

<活動内容>

FLP 演習 B 平澤敦ゼミは、LCC (Low Cost Carrier) の研究を行ったが、特に焦点を沖縄に定めて、LCC の乗り入れ状況や観光都市である沖縄の役割と沖縄における LCC の将来的展望について考察した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習B

実施日：2016年11月1日（火）～ 11月4日（金）

実施都市：沖縄県宜野湾市

実施施設：沖縄国際大学

実施内容：沖縄の現状とわが国における観光都市としての位置づけのヒアリング

成 果：沖縄国際大学において、本校の企業研究所との合同シンポジウムが開催されたため、本シンポジウムに参加し、まずは沖縄の最新の現況について理解することができた。研究テーマである LCC については、事前に同大学の髭白先生に質問書をお送りしていたが、その質問書に対する回答、ならびに那覇空港の現状と LCC の役割について詳細に回答して頂いた。

アジアからの観光客が増加傾向にあるという要因の1つに LCC の存在がある。特に沖縄については、LCC の存在は注目に値する。那覇空港の利用状況等についてのデータを収集して、沖縄国際大学におけるヒアリングで、研究を深化させることができた。

（7）新原 道信（文学部・教授）

FLP演習A

<テーマ>

Think planetary!!——「3.11以降」の“惑星社会の諸問題”に応答するためのコミュニティ形成とフィールドワーク

<授業の概要>

地球規模のグローバル化・ネットワーク化と同時に根本的な有限性の問題である“惑星社会の諸問題”は、「3.11以降」の日本社会の問題としても立ち現れ、この現実の構造を理解したうえでの国際協力が求められています。他方で、小さな問題の「背後に横たわる大きなプロセスや縦横のネットワークを分析」する“惑星社会のフィールドワーク”をすることで、自分の「小さな努力」が大きな社会的意義をもたらす可能性を持つ時代を生きています。“惑星社会のフィールドワーカー”として社会で活躍していく力を身につけるため、前期はグループワーク、夏休みに合宿、後期は論文執筆という一連の〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉のプロセスを体験します。まずは、実習科目の質的調査と国際フィールドワーク論を受講してもらい、“惑星社会のフィールドワーク”を行うために必要な、惑星社会論と“臨場・臨床の智”——生身の現実への理解力、フィールドへの入り方、ひととの接し方、関係のつくり方、所作、マナー、エチケットなど——を学びます。こうした「座学」に加えて、院・学部・FLP（国際協力と地域公共）の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」などで、立川や被災地、海外での活動に参加してもらい、フィールドに出て行くための準備をします。これらのトレーニングを通じて、“たったひとりで異郷／異教／異境の地に降り立ち”、その土地やひとときちゃんとしたかわりをつくっていける力を身につけます（こうして先輩たちは、世界各地に巣立っています）。

<活動内容>

「新原ゼミ」は、文学部の学部と大学院、FLP「地域・公共マネジメント」と「国際協力」という、多様なゼミの総称です。4つのゼミには、中央大学のすべての学部（法、経、商、文、総合政策、理工）から多才な学生が集まり、総勢60名以上で、社会学の理論やフィールドワークの方法を学んでいます。

フィールドワークは、文献から学ぶとともに、実際に身体をうごかし、生の声を聴くこと、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ともに考え・かく〉ことを大切にする学問です。大学の外に出て、あらゆることに耳をすまし、出来る限りそれらを記憶・記録し、その意味を考え、調べ、ふりかえます。一つ一つのことを慎重に行い、地域で暮らす人たちの想いや歴史を丁寧に理解し、信頼関係を築きあげていくことを心がけています。

新原ゼミの特徴は、一人一人が「自分で道を切り開く」こと、そういうひとたちが「ともに場を創る」ところです。年間のスケジュールから毎回のゼミ、司会進行、記録まで、誰が何をやるのか、フィールドワークの成果をどうまとめていくのか、合宿は何のために行き、何をするのか——〈教えられたり指示されたりする前にまず自分で始めてみる〉こと、〈チャレンジしたからこそ直面する「困難」や「危機」から学ぶこと〉を大切にして、毎年ゼロから、ゼミ生皆で話し合

って方針を決めてきました。

そうして、山梨県笛吹市で4ゼミ合同の夏合宿・フィールドワークを行い、夏・秋・冬の節目には、文学部・大学院・地域・国際・「立川プロジェクト」が合同で、報告会や懇親会を開催しました。普段は別々のゼミで活動する学生が、ゼミをこえた「場」をともに創ることによって、自分とは異なるものの見方や、自主的に何かを創ることの大変さ、大切さを学んだのではないかと思います。

こうした活動のなかで、国際Aゼミは、山梨県笛吹市でフィールドワークを行い、世界における日本を見つめなおしました。さらに、ゼミ生各自は、様々なかたちのフィールドワーク——一人で海外に出て行ったり、じっくりと一つの場所でボランティアをつづけたりして、来年度の台湾調査にむけての準備を整えました。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習A

実施日：2016年9月14日（水）～ 9月16日（金）

実施都市：山梨県笛吹市

実施施設：笛吹市役所、石和図書館、青少年センター、春日居郷土館・小川正子記念館、八代郷土館、八代農産物直売所、モンデ酒造、マルスワイナリー他

実施内容：4つのゼミの学生をシャッフルして班を構成し、短期集中型フィールドワークのための事前調査、フィールドワーク、事後調査を行ないました。

成果：2016年11月12日に、合宿成果合同報告会を4ゼミ合同で行い、観光開発の問題を中心とした調査の成果をとりまとめ、国際ゼミとしての知見については国際プログラムの報告会で報告しました。

FLP演習B

<テーマ>

Think planetary!!——「3.11以降」の“惑星社会の諸問題”に応答するためのコミュニティ形成とフィールドワーク

<授業の概要>

地球規模のグローバル化・ネットワーク化と同時に根本的な有限性の問題である“惑星社会の諸問題”は、「3.11以降」の日本社会の問題としても立ち現れ、この現実の構造を理解したうえでの国際協力が求められています。他方で、小さな問題の「背後に横たわる大きなプロセスや縦横のネットワークを分析」する“惑星社会のフィールドワーク”をすることで、自分の「小さな努力」が大きな社会的意義をもたらす可能性を持つ時代を生きています。“惑星社会のフィールドワーカー”として社会で活躍していく力を身につけるため、前期はグループワーク、夏休みに合宿、後期は論文執筆という一連の〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉のプロセスを体験します。まずは、実習科目の質的調査と国際フィールドワーク論を受講してもらい、“惑星社会のフィールドワーク”を行うために必要な、惑星社会論と“臨場・臨床の智”——生身の現実への理解力、フィールドへの入り方、ひととの接し方、関係のつくり方、所作、マナー、エチケットなど——を学びます。こうした「座学」に加えて、院・学部・FLP（国際協力と地域公共）の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」などで、立川や被災地、海外での活動に参加してもらい、フィールドに出て行くための準備をします。これらのトレーニングを通じて、“たったひとりで異郷／異教／異境の地に降り立ち”、その土地やひとときちゃんとしたかかわりをつくっていきける力を身につけます（こうして先輩たちは、世界各地に巣立っています）。

<活動内容>

「新原ゼミ」は、文学部の学部と大学院、FLP「地域・公共マネジメント」と「国際協力」という、多様なゼミの総称です。4つのゼミには、中央大学のすべての学部（法、経、商、文、総合政策、理工）から多才な学生が集まり、総勢60名以上で、社会学の理論やフィールドワークの方法を学んでいます。

フィールドワークは、文献から学ぶとともに、実際に身体をうごかし、生の声を聴くこと、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ともに考え・かく〉ことを大切にする学問です。大学の外に出て、あらゆることに耳をすまし、出来る限りそれらを記憶・記録し、その意味を考え、調べ、ふりかえます。一つ一つのことを慎重に行い、地域で暮らす人たちの想いや歴史を丁寧に理解し、信頼関係を築きあげていくことを心がけています。

新原ゼミの特徴は、一人一人が「自分で道を切り開く」こと、そういうひとたちが「ともに場を創る」ところです。年間のスケジュールから毎回のゼミ、司会進行、記録まで、誰が何をやるのか、フィールドワークの成果をどうまとめていくのか、合宿は何のために行き、何をやるのか——〈教えられたり指示されたりする前にまず自分で始めてみること〉、〈チャレンジしたからこそ直面する「困難」や「危機」から学ぶこと〉を大切にして、毎年ゼロから、ゼミ生皆で話し合っ方針を決めてきました。

そうして、山梨県笛吹市で4ゼミ合同の夏合宿・フィールドワークを行い、夏・秋・冬の節目には、文学部・大学院・地域・国際・「立川プロジェクト」が合同で、報告会や懇親会を開催しました。普段は別々のゼミで活動する学生が、ゼミをこえた「場」をともに創ることによって、自分とは異なるものの見方や、自主的に何かを創ることの大変さ、大切さを学んだのではないかと思います。

こうした活動のなかで、国際Bゼミは、山梨県笛吹市でフィールドワークを行い、世界における日本を見つめなおしました。さらに、ゼミ生各自は、様々なかたちのフィールドワーク——一人で海外に出て行ったり、じっくりと一つの場所でボランティアをつづけたりして、来年度の台湾調査にむけての準備を整えました。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習B・C

実施日：2016年9月5日（月）～ 9月7日（水）

実施都市：山梨県笛吹市

実施施設：笛吹市役所、石和図書館、青少年センター、春日居郷土館・小川正子記念館、八代郷土館、八代農産物直売所、モンデ酒造、マルスワイナリー他

実施内容：4つのゼミの学生をシャッフルして班を構成し、短期集中型フィールドワークのための事前調査、フィールドワーク、事後調査を行ないました。

成果：2016年11月12日に、合宿成果合同報告会を4ゼミ合同で行い、観光開発の問題を中心とした調査の成果をとりまとめ、国際ゼミとしての知見については国際プログラムの報告会で報告しました。

FLP演習C

<テーマ>

Think planetary!!——「3.11以降」の“惑星社会の諸問題”に応答するためのコミュニティ形成とフィールドワーク

<授業の概要>

地球規模のグローバル化・ネットワーク化と同時に根本的な有限性の問題である“惑星社会の諸問題”は、「3.11以降」の日本社会の問題としても立ち現れ、この現実の構造を理解したうえでの国際協力が求められています。他方で、小さな問題の「背後に横たわる大きなプロセスや縦横のネットワークを分析」する“惑星社会のフィールドワーク”をすることで、自分の「小さな努力」が大きな社会的意義をもたらす可能性を持つ時代を生きています。“惑星社会のフィールドワーカー”として社会で活躍していく力を身につけるため、前期はグループワーク、夏休みに合宿、後期は論文執筆という一連の〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉のプロセスを体験します。まずは、実習科目の質的調査と国際フィールドワーク論を受講してもらい、“惑星社会のフィールドワーク”を行うために必要な、惑星社会論と“臨場・臨床の智”——生身の現実への理解力、フィールドへの入り方、ひととの接し方、関係のつくり方、所作、マナー、エチケットなど——を学びます。こうした「座学」に加えて、院・学部・FLP（国際協力と地域公共）の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」などで、立川や被災地、海外での活動に参加してもらい、フィールドに出て行くための準備をします。これらのトレーニングを通じて、“たったひとりで異郷／異教／異境の地に降り立ち”、その土地やひとときちゃんとしたかかわりをつくっていける力を身につけます（こうして先輩たちは、世界各地に巣立っています）。

<活動内容>

「新原ゼミ」は、文学部の学部と大学院、FLP「地域・公共マネジメント」と「国際協力」という、多様なゼミの総称です。4つのゼミには、中央大学のすべての学部（法、経、商、文、総合政策、理工）から多才な学生が集まり、総勢60名以上で、社会学の理論やフィールドワークの方法を学んでいます。

フィールドワークは、文献から学ぶとともに、実際に身体をうごかし、生の声を聴くこと、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ともに考え・かく〉ことを大切にする学問です。大学の外に出て、あらゆることに耳をすまし、出来る限りそれらを記憶・記録し、その意味を考え、調べ、ふりかえます。一つ一つのことを慎重に行い、地域で暮らす人たちの想いや歴史を丁寧に理解し、信頼関係を築きあげていくことを心がけています。

新原ゼミの特徴は、一人一人が「自分で道を切り開く」こと、そういうひとたちが「ともに場を創る」ところです。年間のスケジュールから毎回のゼミ、司会進行、記録まで、誰が何をやるのか、フィールドワークの成果をどうまとめていくのか、合宿は何のために行き、何をやるのか——〈教えられたり指示されたりする前にまず自分で始めてみること〉、〈チャレンジしたからこそ直面する「困難」や「危機」から学ぶこと〉を大切にして、毎年ゼロから、ゼミ生皆で話し合っ

そうして、山梨県笛吹市で4ゼミ合同の夏合宿・フィールドワークを行い、夏・秋・冬の節目には、文学部・大学院・地域・国際・「立川プロジェクト」が合同で、報告会や懇親会を開催しました。普段は別々のゼミで活動する学生が、ゼミをこえた「場」をともに創ることによって、自分とは異なるものの見方や、自主的に何かを創ることの大変さ、大切さを学んだのではないかと思います。

こうした活動のなかで、国際Cゼミは、山梨県笛吹市でフィールドワークを行い、世界における日本を見つめなおしました。さらに、ゼミ生各自は、様々なかたちのフィールドワークを行い、出会った土地や人に想いを馳せつつ、自分の論文を書き上げました。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習B・C

実施日：2016年9月5日（月）～ 9月7日（水）

実施都市：山梨県笛吹市

実施施設：笛吹市役所、石和図書館、青少年センター、春日居郷土館・小川正子記念館、八代郷土館、八代農産物直売所、モンデ酒造、マルスワイナリー他

実施内容：4つのゼミの学生をシャッフルして班を構成し、短期集中型フィールドワークのための事前調査、フィールドワーク、事後調査を行いました。

成果：2016年11月12日に、合宿成果合同報告会を4ゼミ合同で行い、観光開発の問題を中心とした調査の成果をとりまとめ、国際ゼミとしての知見については国際プログラムの報告会で報告しました。

（８）野宮 大志郎（文学部・教授）

F L P 演習 A・B

<テーマ>

世界に働きかける：グローバルな市民社会活動の創造

<授業の概要>

社会は、その中に住む個人を強制し、ある特定の方向に仕向ける力を持つ。戦争での兵隊志願者はその最たる現れであろう。しかし、個人はその「社会の力」にだまって従うばかりではない。自分の権利や考えに基づき、時には社会の力に抗しても行動する主体さらには社会変革を担うエージェンシーとなりうる。そうしたエージェンシーとしての個人が集まることで市民社会が成立する。

本演習では、社会の構造的力から観察を始め、その力に対抗するもの、変革をめざすものとしてのエージェンシーをまず理解する。次に、市民社会概念について理解し、かつ実際にそれがどのように現れるかを学ぶ。最後に、市民社会の現代的現れであるグローバル市民社会についていくつかの事例を観察して学ぶ。

本演習の最終的な目標は、たとえ小さなことでも自ら社会に対して働きかけ、社会に資する行動や理解を創り出していく人を育てることである。

<活動内容>

今年度は、タイの子どもたちが経験する問題に焦点を当てて、研究活動を行った。具体的には、スラムに住む貧困層の子ども、先住民族の子ども、様々な理由で親と一緒に住むことが出来ない子、さらには障がいを持った子どもである。

前期は、テーマごとに各班に別れ、各班で日本の子どもたちに見られる問題の研究を行った。文献を読み、その後、子どもたちが抱える問題の背景や解決策などを深く理解するために、そうした活動に従事する NGO などの市民団体に聞き取り調査に出かけた。

後期に入ってから、タイ社会とタイの子どもが抱える問題を集中的に研究し、本格的な日タイ比較調査が可能なレベルにまで研究を進めた。

その後、タイに現地調査に行き、データを取り帰国し、子どもの問題について日タイの比較を行った。比較研究の成果は、学年末論文とプレゼンテーションを通して発表した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習A・B

実施日：2016年11月1日（火）～ 11月8日（火）

実施都市：バンコク・カンチャナブリ（タイ）

実施施設：JICAタイ事務所・アジア太平洋障がい者センター、カセサート大学、クロントイ・スラム（バンコク）、生き直しの学校（カンチャナブリ）

実施内容：まず、JICAタイ事務所で、貧困、格差、学校教育制度など、タイ社会全体の抱える問題について理解を深めた。アジア太平洋障がい者センターでは、障がいを持った

人や子どもがタイ社会で抱える問題について、現地視察とともに、理解を深めた。
JICAタイ事務所でも話題にあがったスラムに出向き、スラムで生活する人びとの現状と問題について理解を深めた。カセサート大学では、プレゼンテーションとその後の意見交換を通して、現地学生にとってタイの子どもがどのように映っているかを理解した。最後に、生き直しの学校を二日間かけて訪問し、様々な事情で親と共に生活できない子どもたちの問題について知識を獲得した。

成 果：タイ社会とタイの子どもたちが抱える問題は大きく、また多様である。今回、タイ訪問に先立ち、前期すべてと後期の一ヶ月を使ってタイが抱える問題について自分たちで情報を集め、理解を進めた。今回の訪問学習・調査では、タイ社会とタイの子どもたちが抱える問題のうち、幾つかについて学習し、調査し、理解を深めたに過ぎないが、それでも、訪問前に獲得した知識をはるかに上回る理解を得ることができた。

対象演習：演習A・B

実 施 日：2016年11月5日（土）

講 演 者：Nithipt Sinpeng

演 題：タイにおける貧困と子ども

実施都市：カンチャナブリ（タイ）

実施施設：生き直しの学校

実施内容：タイ社会が抱える子どもの問題について一般的な概説を頂いた後、子どもの障がい者、親と離れてくらす子ども、スラムに住む子どもなど、具体的・個別的な状況での子どもたちの生き方や問題、さらにはタイの市民社会がどのような活動を通してこれらの子どもを助けようとしているかについて、講演をしていただいた。

成 果：本講演を通して、タイ社会における問題について、更に深く理解を進めることが出来た。同時に、タイの市民社会が、様々な方法で、出来る範囲で、こうした子どもの問題に対して、積極的な解決を目指して活動を行っていることも理解できた。



(9) 佐々木 弘世 (全学連携教育機構・客員教授)

FLP 演習 A

<テーマ>

国際協力論入門

<授業の概要>

本演習は開発途上国の抱える諸問題（貧困、教育、保健衛生、ガバナンス、環境、紛争等）に関し、講義や関連する様々な文献・レポートの輪読等を基にその基本的な構造についての理解を深めることを目標とする。更に第二次世界大戦終結後こうした開発途上国に対し国連・国際金融機関及び日本等の先進諸国がどのような開発戦略を採用してきたのかについてその当時の国際関係（東西冷戦構造等）も十分に視野に入れながら分析し、そうした各戦略の有効性とその限界についても可能な限り取り上げその理解を深めるよう努力する。

<活動内容>

2016 年度の本ゼミでは関連の文献講読や視聴覚教材を利用したグループ・ワークやプレゼンテーションを踏まえながら全員参加によるディスカッションを主な活動とした。こうした活動により当ゼミの当初の目標である「開発とは何か?」、「開発途上国とはどのような国なのか?」、「国際協力は誰のために、何故行うのか?」といった問いにゼミ員各自が自らの考えを、自らの言葉で説明することが可能となるよう全員で学習を深めることができた。更に、開発途上国の開発問題や国際協力の現状や課題について取り上げている主要な書籍を毎月課題図書として取り上げ、ゼミ員各自が読後の感想及びゼミ全体で共有したい事項等を記載した「課題図書レポート」を作成・提出し、同レポートを基にゼミでの全体討議を適宜実施した。

上記の様な A ゼミ独自の活動に加え下記の様な、(1)外部講師を招聘しての最新の国際協力の動向等に関する講話、(2)国際協力に関連する機関等の訪問や同施設を利用した課外学習、を実施することにより国際協力に対するより総合的・包括的な理解の促進にも努めた。

講演会 (対象演習：A・B・C 合同ゼミ)

実施日：2016 年 5 月 20 日（金）

講師氏名：国際協力機構(JICA) 資金管理部 春原 絵美 氏（中央大学法学部卒業）

内 容：講師から JICA での現在の担当業務の状況やウガンダ事務所での勤務経験を踏まえた
アフリカ諸国での国際協力の現状や現場での職員の役割と使命等について包括的な
説明を受けた後、JICA 事業やアフリカにおける国際協力の課題等について自由討議を
行った。

成 果：関連の文献だけでは理解できないサブ・サハラアフリカ諸国の開発課題の本質やそう
した課題に対する日本及び国際社会による国際開発支援の今後の在り方について深く
学ぶ機会をえることができた。また、本学の卒業生である講師から将来のキャリア形
成等について有益な助言を得た。

見学調査（対象演習：A・B・C 合同ゼミ）

実施日：2016年6月4日（土）

実施場所：国際協力機構(JICA)研究所・地球ひろば（市ヶ谷）

実施内容：同施設で開催中の「開発途上国の教育問題」を視察した後、JICA が作成した開発途上国での住民参加型開発プロジェクト形成に関する教材を使用して、開発プロジェクトの計画・策定に関するグループワークを実施した。

成果：日本の ODA 等による途上国への教育支援の実際を展示資料・説明により確認し、また途上国での住民参加型プロジェクト形成手法についてグループワークを通じてその理解を深めた。

講演会（対象演習：A・B・C 合同ゼミ）

実施日：2016年7月8日（金）

講師氏名：ケンドマネジメント株式会社代表取締役 高橋 宏太郎 氏

実施内容：ODA による日本の中小企業の国際協力業務への参画促進業務を実施している開発コンサルタントの代表者から日本の中小企業の持つ高い技術力による途上国の開発課題解決への貢献に関して多数の実例を含めた包括的な説明を受けた後、自由討議を行った。

成果：開発途上国の抱える開発課題の解決には様々なアクターが必要不可欠であり、日本の中小企業の持つ技術やその経験の積極的な活用の重要性について深く学ぶことができた。

夏季合宿（対象演習：A ゼミ）

実施日：2016年8月19日（金）～ 8月20日（土）

実施都市：神奈川県横浜市

実施施設：株式会社日本ベーシック及びJICA横浜国際センター

実施内容：単純技術による携帯浄水器を使用して開発途上国の貧困地域での飲料水の確保に大きな成果を挙げている日本ベーシック社を訪問し、実際の浄水作業を体験した。JICA 横浜センターでは神奈川県・横浜市等の地方自治体との連携によるODA事業の成果及び途上国からの技術研修員の受入れについて説明を受け、併せて現場の視察を行った。

成果：日本の中小企業が持つ独自の技術が開発問題の解決に極めて有用であることを学び、併せて日本の地方自治体が有する各種の対住民行政の経験や知見が開発途上国の行政サービスの向上に有効であることを理解した。

合同合宿（対象演習：A・B・C 合同ゼミ）

実施日：2016年12月10日（土）～ 12月11日（日）

実施都市：山梨県北杜市

実施施設：清里 伊予ロッジ

実施内容：12月17日（土）に予定されているFLP成果報告会に向け、A・B・Cの各ゼミ生が報告

内容について夫々プレゼンテーションを行い、参加者全体でその内容に関する討議を行った。

成 果：成果報告会での報告内容に関し、様々な観点からのコメント・意見が出され報告内容のより一層の質的向上を図る絶好の機会となると共にA・B・Cゼミ生間の相互交流を促進する大変貴重な場となった。

F L P 演習 B

<テーマ>

国際協力論研究—国外実態調査による実証的研究—

<授業の概要>

本ゼミではこれまで日本の ODA 協力が集中的に供与され、また過去に世界銀行による「東アジアの奇跡」レポート等によりその目覚ましい経済社会発展が取り上げられた東南アジア地域での現地実態調査の効果的実施を目標に活動する。現地調査においては現地の住民が直面していた、或いは現在も直面している多くの開発課題についての構造やその複雑さを直接確認し、そうした開発課題の解消に向け先方政府や地域住民等と共に実施されてきた国際協力プロジェクトの支援現場や関連する支援諸機関(含 NGO)を訪問し国際協力により達成された具体的な成果とその限界等について分析・理解する。

<活動内容>

2016 年度の本ゼミは、前期においては、夏季休業期間を利用したインドネシア（マカッサル市及びジャカルタ市）での現地実態調査を可能な限り効果的に実施することを目標として必要な先行研究の精読等を中心に各種の準備学習・作業を行った。現地調査実施後の後期では、結果の取り纏めや必要に応じ追加調査を行い、最終報告書の作成を行った。併せて開発問題や国際協力の現状や課題に関する主要な書籍を毎月課題図書として取り上げ、ゼミ員各自が読後の感想等を記載した「課題図書レポート」を作成し、同レポートを基にゼミでの全体討議を適宜実施した。

上記の B ゼミ独自の活動に加え下記の様な、(1)外部講師を招聘しての最新の国際協力の動向等に関する講話、(2)国際協力に関連する施設等の訪問や同施設を利用しての課外学習、を実施することにより国際協力に対するより総合的・包括的な理解の促進にも努めた。

講演会（対象演習：A・B・C 合同ゼミ）

実 施 日：2016 年 5 月 20 日（金）

講師氏名：国際協力機構(JICA) 資金管理部 春原 絵美 氏（中央大学法学部卒業）

内 容：講師から JICA での現在の担当業務の状況やウガンダ事務所での勤務経験を踏まえたアフリカ諸国での国際協力の現状や現場での職員の役割と使命等について包括的な説明を受けた後、JICA 事業やアフリカにおける国際協力の課題等について自由討議を行った。

成 果：関連の文献だけでは理解できないサブ・サハラアフリカ諸国の開発課題の本質やそうした課題に対する日本及び国際社会による国際開発支援の今後の在り方について深く学ぶ機会をえることができた。また、本学の卒業生である講師から将来のキャリア形成等について有益な助言を得た。

見学調査（対象演習：A・B・C 合同ゼミ）

実施日：2016年6月4日（土）

実施場所：国際協力機構(JICA)研究所・地球ひろば（市ヶ谷）

実施内容：同施設で開催中の「開発途上国の教育問題」を視察した後、JICAが作成した開発途上国での住民参加型開発プロジェクト形成に関する教材を使用して、開発プロジェクトの計画・策定に関するグループワークを実施した。

成果：日本のODA等による途上国への教育支援の実際を展示資料・説明により確認し、また途上国での住民参加型プロジェクト形成手法の進め方についてグループワークを通じて理解した。

講演会（対象演習：A・B・C 合同ゼミ）

実施日：2016年7月8日（金）

講師氏名：ケンドマネジメント株式会社代表取締役 高橋 宏太郎 氏

実施内容：ODAによる日本の中小企業の国際協力業務への参画促進業務を実施している開発コンサルタントの代表者から日本の中小企業の持つ高い技術力による途上国の開発課題解決への貢献に関して多数の実例を含めた包括的な説明を受けた後、自由討議を行った。

成果：開発途上国の抱える開発課題の解決には様々なアクターが必要不可欠であり、日本の中小企業の持つ技術や経験の積極的な活用的重要性について深く学ぶことができた。

現地実態調査（対象演習：演習B）

実施日：2016年8月11日（木）～ 8月16日（火）

実施都市：インドネシア共和国マカッサル市及びジャカルタ市

実施施設：南スラウェシ州政府、ハサヌディン大学、インドネシア大学、JICAインドネシア等

実施内容：インドネシア政府による地域格差是正策の拠点であるマカッサル市を訪問し、南スラウェシ州政府、ハサヌディン大学等を訪問し、住民参加を中心とする地域開発の現状及びその課題についてヒアリング調査を実施し併せて日本のODA支援により実施されている関連プロジェクトの現場を視察した。更に同市周辺に派遣されている青年海外協力隊員との面談調査を実施した。ジャカルタ市においては国立インドネシア大学経済学部Tegu教授及び同学部の学生との意見交換会に参加した。

成果：上記の関連機関・プロジェクトサイトの訪問及び関係者との面談を通じてインドネシアが現在直面している地域格差の現状及びそうした格差の是正に向けての各種の政策及び事業の効果とその限界等について詳細に調査することができた。またインドネシア大学学生との交流を通じて先方学生の高い英語能力と国際情勢等に関する幅広い知見等に触れ大いに触発された。

合同合宿（対象演習：A・B・C 合同ゼミ）

実 施 日：2016年12月10日（土）～ 12月11日（日）

実施都市：山梨県北杜市

実施施設：清里 伊予ロッジ

実施内容：12月17日（土）に予定されているFLP成果報告会に向け、A・B・Cの各ゼミ生が取り纏めた報告内容について夫々プレゼンテーションを行い、参加者全員でその内容に対する討議を行った。

成 果：成果報告会での報告予定内容に関し様々な観点からのコメント・意見が出され報告内容の精査及びより一層の質的向上を図る絶好の機会となると共にA・B・Cゼミ生間の相互の交流を深める大変貴重な場となった。

FLP 演習 C

<テーマ>

国際協力論（上級）

<授業の概要>

これまで履修してきた「演習 A」及び「演習 B」での研究及び調査を十分に踏まえながら、各人が開発途上国の開発問題や国際協力の在り方等に関する個別のテーマを設定し論文の形で取り纏めることを目指す。

<活動内容>

2016 年度のゼミでは、前期においては各ゼミ生が FLP でのこれまでの学習を通じて深めた国際協力における関心領域やそこでの問題意識について取り纏め、その結果について発表・討論を行いながら夫々の最終的な論文のテーマ設定の準備作業を行った。併せて国際協力の現状を取り上げた文献の輪読や国際開発支援に関する主要なテーマ等について討論を行った。後期では激動の国際情勢や新たな援助潮流等について取り纏められた文献の輪読や各自の論文作成の進捗に応じ中間発表と全体討議を行いながらゼミ員各自が各々の最終論文を完成させた。

上記の C ゼミ独自の学習に加え、(1)外部講師を招聘しての最新の国際協力の動向等に関する講話、(2)国際協力に関連する機関等の訪問や同施設を利用したの課外学習、を実施することにより国際協力に対するより総合的・包括的な理解にも努めた。

講演会（対象演習：A・B・C 合同ゼミ）

実施日：2016 年 5 月 20 日（金）

講師氏名：国際協力機構(JICA) 資金管理部 春原 絵美 氏（中央大学法学部卒業）

内 容：講師から JICA での現在の担当業務の状況やウガンダ事務所での勤務経験を踏まえた
アフリカ諸国での国際協力の現状や現場での職員の役割と使命等について包括的な説明
を受けた後、JICA 事業やアフリカにおける国際協力の課題等について自由討議を行っ
た。

成 果：関連の文献だけでは理解できないサブ・サハラアフリカ諸国の開発課題の本質やそう
した課題に対する日本及び国際社会による国際開発支援の今後の在り方について深く
学ぶ機会をえることができた。また、本学の卒業生である講師から将来のキャリア
形成等について有益な助言を得た。

見学調査（対象演習：A・B・C 合同ゼミ）

実施日：2016 年 6 月 4 日（土）

実施場所：国際協力機構(JICA) 研究所・地球ひろば（市ヶ谷）

実施内容：同施設で開催中の「開発途上国の教育問題」を視察した後、JICA が作成した開発途
上国での住民参加型開発プロジェクト形成に関する教材を使用して、開発プロジェク
トの計画・策定に関するグループワークを実施した。

成 果：日本の ODA 等による途上国への教育支援の実際を展示資料・説明により確認した。
また途上国での住民参加型プロジェクト形成手法の進め方についてグループワークを通じてその理解を深めた。

講演会（対象演習：A・B・C 合同ゼミ）

実 施 日：2016 年 7 月 8 日（金）

講師氏名：ケンドマネジメント株式会社代表取締役 高橋 宏太郎 氏

実施内容：ODA による日本の中小企業の国際協力業務への参画促進業務を実施している開発コンサルタントの代表者から日本の中小企業の持つ高い技術力による途上国の開発課題解決への貢献に関して多数の実例を含めた包括的な説明を受けた後、自由討議を行った。

成 果：開発途上国の抱える開発課題の解決には様々なアクターが必要不可欠であり、日本の中小企業の持つ技術や経験の積極的な活用の重要性について深く学ぶことができた。

見学調査（対象演習：演習 C）

実 施 日：2016 年 10 月 20 日（木）

実施都市：東京都府中市

実施施設：国連アジア極東犯罪防止研修所

実施内容：アジア極東地域での犯罪防止を目的とする国連機関である同研修所を訪問し国連が実施する国際協力の一環として実施されている当該分野での各種の研究・研修や教材等の作成についてその現状と課題について説明を受け併せて施設の視察を行った。

成 果：近年多くの開発途上国において大きな問題となっている青少年犯や宗教に絡んだテロ行為の脅威に関して理解し、こうした問題への国際社会の協調した対応の重要性について改めて理解を深めた。

合同合宿（対象演習：演習 A・B・C）

実 施 日：2016 年 12 月 10 日（土）～ 12 月 11 日（日）

実施都市：山梨県北杜市

実施施設：清里 伊予ロッジ

実施内容：12 月 17 日の FLP 成果報告会に向け、A・B・C の各ゼミ生が取り纏めた報告内容について各々プレゼンテーションを行い、参加全員でその内容に対する討議を行った。

成 果：成果報告会での報告内容に関し様々な観点からのコメント・意見が出され報告内容の精査及び一層の質的な向上を図る絶好の機会となると共に A・B・C ゼミ生の相互の交流を深める大変貴重な場となった。

(10) 三次 啓都 (全学連携教育機構・客員教授)

FLP 演習 A

<テーマ>

開発途上国における農村社会の持続的開発

<授業の概要>

開発途上国が抱える課題は多岐に渡ります。日本をはじめとする先進国や国際機関は、長年開発援助を通じて様々な課題の解決に当たってきました。本演習では途上国の開発課題と援助の潮流について概観しつつ、貧困層が相対的に多く居住する農村に着目します。農村は単に貧困層が多い場所ではなく、自然環境を維持し、食糧生産を支える重要なポテンシャルを有している場所です。農村の社会構造や経済の特徴を理解しながら、農村に暮らす人々が自然と調和して生計を向上していくために必要な方策を、地域資源の観点から論じていきます。日本においても地域創生と称して地方農村部に対する政策的な議論が活発となっています。日本の農村部についても学びつつ、途上国と同じようなアプローチが可能なのか、共有できる課題があるのかどうかについても触れていきたいと考えています。

演習では文献調査（英文含む）や事例分析を行います。これらはグループディスカッションや参加型アプローチを交えながら進めることで、コミュニケーションスキルの体得も目指します。

<活動内容>

三次ゼミでは、日本の農村の現状と課題、また開発途上国の農村開発の事例を学びながら、農村を活性化するにはどうしたらよいのか？という問題意識を探究してきました。

関連文献やインターネットといった二次資料を調べる過程で、農産物の付加価値を高めるための、フードバリューチェーンという取り組みに着目し、更にこの具体的な事例として“農産物認証”を取り上げました。

農産物認証は、生産から流通までの過程で一定の基準を満たすことで与えられるものですが、その基準は、環境への配慮や労働環境など多岐に渡ります。フェアトレード商品もその一つと考えればよいかもしれませんが、このような農産物認証は海外で広く普及していますが、日本ではまだ本格化していません。それは何故なのか？

ゼミ生は、国際的な認証の代表例である、Rain Forest Alliance の認証取得をした静岡の銘葉緑茶協会とユニリーバ・ジャパン、また Rain Forest Alliance の日本代表、それぞれにインタビューを行い、認証取得の理由と課題について議論を進め、その結果を取りまとめました。国際展開を目指す日本の緑茶生産組合から構成される協会の戦略、社会貢献・企業のミッションとして環境配慮を目指す多国籍企業、認証取得にはそれぞれ異なる背景があることが分かりました。

農産物認証の取得が日本の農村の活性化の一助になるのかどうか、今後、継続して調べていく予定です。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習A・B・C

実施日：2016年5月24日（火）

講演者：石川 幸子 氏

演 題：人間の安全保障と農村開発

実施都市：東京都八王子市

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 11210教室

実施内容：ボスニア・ヘルツェゴビナを題材に、紛争後の和解プロセスにおいて、農村開発が果たす役割と重要性について講義。

成 果：農村開発が持つ役割を多角的に見る視点を養った。また、“人間の安全保障”という概念の基礎を学んだ。

対象演習：演習A・B・C

実施日：2017年1月10日（火）

実施都市：神奈川県横浜市

実施施設：独立行政法人国際協力機構JICA横浜

実施内容：演習B・Cの国外現地実態調査（ネパール）協力団体のラブグリーン・ジャパンに対するゼミ生の報告会

成 果：演習B・Cで行う国外実態調査の概要を理解した。

F L P 演習 B・C

<テーマ>

開発途上国における農村社会の持続的開発

<授業の概要>

多くの開発途上国において、農村部には多数の人口が分布し、経済の基幹である第一次産業を支えています。しかし、農村部における人々の生活水準は一般的に低く、住民の生計の多くは農林水産業、すなわち森・水・土地といった自然環境に依存していると言っても過言ではありません。また、経済・社会開発の二極化が途上国で進むなか、後発の途上国においては農村の貧困問題が、発展の進む新興国では、都市と地方の国内格差が開き、農村の社会開発が大きな課題となっています。

近年の経済のグローバル化は、市場を通じて途上国の第一次産業にも大きな影響を与え、同じく地球規模の気候変動は、自然環境に依存する生計に影響を及ぼしています。これは必ずしも開発途上国に限定されているわけではなく、日本を含む先進国においても同様に当てはまりますが、開発途上国においては不十分なセーフティーネットや社会インフラの整備の点から、影響がより深刻となっている状況です。

開発途上国が抱える課題は様々ですが、本演習では農村に焦点を当て、農村社会の構造や概念及び地域住民を取り巻く環境を把握しながら課題の発見と解決のための視点を習得します。そのうえで、農村社会の持続的開発について、地球環境問題やガバナンスと関連付けながら、地域資源の利用と住民参加に着目して学んでいきます。更に日本と開発途上国の事例分析を通じて双方の特徴や共通項を見出し、国内・海外の双方で取りうるべきアプローチについて議論します。折しも、日本でも地域創生が重要な政策課題となり、地域社会に対する政策的な議論と取り組みが始まっています。地域社会開発にむけた最近の動きについても触れつつ、既に先行している途上国の農村社会開発の実践から、参考にすべき知見について考えていきます。

なお、演習では、文献調査(英文含む)、プレゼンテーションの実践、農村調査の基礎的アプローチについても学びます。

<活動内容>

三次ゼミでは、日本の農村部の地域振興事例についての学びからスタートし、その各事例を深めていく中で、開発途上国の農村地域振興として着目すべき課題について学習を進めてきました。特に地域にある資源（森林、水、土地、文化、景観）に着目し、地域資源を利用した農村活性について議論を進め、国外実態調査の調査テーマとして設定しました。

国外実態調査の調査先については、地域資源を活用した農村開発の取り組みが一定程度進んでいる場所を念頭に、ラブグリーン・ジャパン／ラブグリーン・ネパールの両者が震災復興と農村開発を支援しているバジャラバラヒ村とし、現地事情、活動内容を調べた結果、最終的に次の課題について調査を行いました。なお、これらの調査は、村でホームステイをしながら、ラブグリーン・ジャパン／ラブグリーン・ネパールの支援を受けて実施したものです。

(1) バジャラバラヒ村の景観保全

この村は古いネワール様式の建築物が残り、周囲の里山や畑に囲まれた独特の景観を残しています。しかし周辺の村は近代化の波を受け、伝統様式を損なうような建築、色彩が増えてきている状況です。この景観を活かし、村を活性化する構想がラブグリーン・ネパールと村の人から出ているのですが、そもそもこの景観をどう評価するのか？今回、ゼミ生はこの問いに応えるべく、村人と共にワークショップ及びトランセクト・ウォークを実施し景観評価と景観マッピングを行いました。

(2) キウイ生産の背景調査

生計の中心である農業で利益をあげるために、市場単価の高いキウイが村に導入されています。しかし、キウイ生産が広く村の農家に普及されている状況ではありません。ネパールではまだ歴史の浅いキウイですが、キウイ生産を行う農家と生産していない農家の違いは何か？ 経営規模が類似している 25 世帯（キウイ生産農家、非生産農家含む）を対象に戸別インタビュー調査を実施し、その背景を探りました。

帰国後、一連の調査の成果として、バジャラバラヒ村の景観保全マップ及びキウイ生産農家のリスク分析を取りまとめ、ラブグリーン・ジャパン／ラブグリーン・ネパールに渡され、現地での支援活動に活用されています。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習A・B・C

実施日：2016年5月24日（火）

講演者：石川 幸子 氏

演 題：人間の安全保障と農村開発

実施都市：東京都八王子市

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 11210教室

実施内容：ボスニア・ヘルツェゴビナを題材に、紛争後の和解プロセスにおいて、農村開発が果たす役割と重要性について講義。

成 果：農村開発が持つ役割を多角的に見る視点を養った。また、“人間の安全保障”という概念の基礎を学んだ。

対象演習：演習B・C

実施日：2016年10月31日（月）～ 11月7日（月）

実施都市：カトマンズ・バジャラバラヒ（ネパール）

実施施設：ラブグリーン・ネパール

実施内容：国外実態調査

成 果：バジャラバラヒ村の景観保全及びキウイ生産の背景調査

対象演習：演習B・C

実施日：2016年11月3日（木）

講演者：相川 政夫 氏

演 題：ネパールの農業と景観保護について

実施都市：バジャラバラヒ（ネパール）

実施施設：ラブグリーン・ネパール

実施内容：バジャラバラヒ村の文化背景・社会経済状況及び震災後の支援活動概要の説明

成 果：現地調査に当たり心得ておくべきことをゼミ生が理解した。

対象演習：演習A・B・C

実施日：2017年1月10日（火）

実施都市：神奈川県横浜市

実施施設：独立行政法人国際協力機構JICA横浜

実施内容：演習B・Cの国外現地実態調査（ネパール）協力団体のラブグリーン・ジャパンに対するゼミ生の報告会

成 果：国外実態調査から帰国後取りまとめた成果を報告し、現地で支援してくれたラブグリーン・ジャパンから有益なコメント、フィードバックを得た。

IV. スポーツ・健康科学プログラム

1. 設置の趣旨と教育の目的

少子高齢化社会の到来のみならず、高度テクノロジー化と IT 化に伴い、心身の健康の維持増進がこれまで以上に重要になっています。そして、スポーツ・健康科学の発展と普及は、21 世紀の日本社会にとって不可欠なものとなっています。今日我が国の健康問題の多くは、運動不足や情報横溢と密接にかかわるライフスタイルの変化や生活文化に起因しています。そのような中で、特にスポーツや運動活動に求められる期待値は大きく、それらを取り入れた日常生活の質的向上の取り組みが随所で見られるようになっていきます。近年、地域コミュニティにおけるスポーツ基盤の整備や生涯スポーツの機会の提供が進んでいます。他方、地球規模でのスポーツの発展には、目を見張るものがあります。ボーダーレス化や商業化が急速に進み、レジャー・イベント・プロスポーツ・メディア等のスポーツ関連領域は巨大な市場を形成しています。このことは同時に、スポーツを媒介とした国際交流や国際貢献の可能性がさらに大きくなっていることを意味します。

このような状況を背景に、「スポーツ・健康科学プログラム」は学際的な性格を持つスポーツ科学と健康科学を基盤とし、スポーツや健康に纏わる問題を健康・医療・文化・ビジネス・サービス・行政等との関連の中で多面的かつ総合的に考察し、この分野に寄与できる人材の育成を目的としています。

本プログラムでは、従来の体育ないしはスポーツ講義・実技という枠組みではない多様なアプローチが可能になり、総合的かつ体系的な能力が養成されます。つまり、各学部におけるそれぞれの専門科目を履修しながら、当プログラムのスポーツ・健康科学の領域の中で各人が興味をもつ分野を深めていくことができます。そこでは、本プログラム独自に開講する演習科目を通じて専門的な研究を行います。

スポーツや健康に関わる社会的ニーズの増大と多様化によって、それに対応できる資質を備えた人材が今後さらに求められます。これまで学校教師の養成を主眼としてきたいわゆる教育・体育系学部とは異なり、本プログラムが社会の幅広い領域にマルチスペシャリストを送り出すことの意義は大きいのです。

2. 2016 年度演習科目担当者および履修者

氏名	所属学部	FLP演習A(2年次)	FLP演習B(3年次)	FLP演習C(4年次)	実施形態
宮崎 伸一	法学部	1	2	－	単独 (A・B)
村井 剛	法学部	16	6	5	単独 (A・B・C)
市場 俊之	商学部	6	2	4	合併 (A・B・C)
小峯 力	理工学部	12	7	6	単独 (A・B・C)
加納 樹里	文学部	8	4	4	単独 (A) / 合併 (B・C)
布目 靖則	文学部	－	2	－	単独 (B)
森 正明	文学部	1	2	－	単独 (A・B)
小林 勉	総合政策学部	5	4	6	単独 (A・B・C)
合計		49	29	25	

3. プログラムスケジュール

4 月 履修ガイダンス

第一回部門授業担当者委員会

5 月 学外活動（オリエンテーション）

6 月 2017 年度募集に伴う総合ガイダンス

7 月 第二回部門授業担当者委員会

9 月 第三回部門授業担当者委員会（持ち回り開催）

10 月 2017 年度募集に伴うプログラム別ガイダンス

11 月 2017 年度募集に伴う選考試験

12 月 第四回部門授業担当者委員会
学内活動（期末成果報告会）

3 月 FLP 修了発表
FLP 修了証書授与

4. プログラムの活動

①オリエンテーション

実施日： 2016年5月21日（土）～5月22日（日）

実施場所： 中央大学 後楽園キャンパス（1日目）

多摩キャンパス（2日目）

実施内容： （1日目）後楽園キャンパスの授業内容、諸施設の紹介と見学
特別講演会（下記に記載）

（2日目）陸上競技場にて、スポーツ交流会

講演者： 大橋 靖雄（理工学部）

演題： 健康情報は信じられるか

②期末成果報告会

実施日： 2016年12月17日（土） 12:40～

実施場所： 中央大学 多摩キャンパス 6204 教室

実施内容： 各ゼミによる年度活動報告
中大杯企画参加者による成果報告
特別講演会（下記に記載）

講演者： 和田 尚之 氏（東京八王子トレインズ）

森川 麻美 氏（東京八王子トレインズ）

実施施設： 中央大学 多摩キャンパス 6204 教室

演題： 地域に根付くプロスポーツチーム運営

5. 2016年度までのスポーツ・健康科学プログラム修了生の主な就職・進学先

電通、TBS テレビ、Jリーグフォト、日刊スポーツ新聞西日本、ゴールドウィン、ランナーズ、琉球スポーツキングダム、川崎フロンターレ、楽天野球団、山形新聞社、三菱東京UFJ銀行、みずほフィナンシャルグループ、三井住友銀行、静岡銀行、山梨中央銀行、足利銀行、川崎信用金庫、大和証券、住友生命、三井住友海上火災保険、損害保険ジャパン、丸紅、日立製作所、富士重工、小松製作所、神戸製鋼所、大林組、麒麟ビール、サッポロビール、ロッテ、富士通、富士ゼロックス、ヤマト運輸、佐川急便、東日本旅客鉄道、近畿日本ツーリスト、JTB コーポレートセールス、星野リゾート、東京テアトル、KDDI、NTT コミュニケーションズ、リクルートコミュニケーションズ、コクヨ、テルモ、セブン-イレブン・ジャパン、日本公文教育研究会、休暇村協会、中央大学、地方公務員（東京都庁など）、東京学芸大学大学院、順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科、首都大学東京大学院人文科学研究科社会行動学専攻など

6. 演習教育活動

(1) 宮崎 伸一 (法学部・教授)

F L P 演習 A

<テーマ>

障がい者スポーツ

<授業の概要>

- ①文献調査により、身体障がい、知的障がい、精神障がいを生物学的に理解し、障がい者の日常生活能力、社会生活能力を調査するための方法を構想する。
- ②各障がい者のスポーツ活動の実際を、大学周辺の学校、地域を訪問して調査する。

<活動内容>

- ①座学により障がい者の定義、処遇の歴史、特性に関して理解をし、障がい者スポーツを考える上での基礎学力を修得させた。
- ②本学周辺のいくつかの障がい者施設に関してインターネットにより情報を収集し、次年度の活動のための資料とした。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習 A・B

実施日：2016 年 10 月 18 日（火）

講演者名：齋藤 利之 氏

実施都市：東京都八王子市

実施施設：中央大学多摩キャンパス

実施内容：日本障がい者スポーツ支援センター職員による、障がい者スポーツ支援の実際

成 果：現行の世界各国の支援の実際、および 2020 年東京パラリンピックに向けた日本の支援について知る機会を得た。

F L P 演習 B

<テーマ>

障がい者スポーツ

<授業の概要>

各障がい者のスポーツ活動の実際を、日本国内に目を向けて、調査する。

<活動内容>

本学周辺のいくつかの障がい者施設に関してインターネットにより情報を収集し、次年度の活動のための資料とした。

世界各国（ヨーロッパ各国、米国、豪州）の障がい者スポーツ支援に関してインターネットにより情報を収集した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習A・B

実 施 日：2016年10月18日（火）

講演者名：齋藤 利之 氏

実施都市：東京都八王子市

実施施設：中央大学多摩キャンパス

実施内容：日本障がい者スポーツ支援センター職員による、障がい者スポーツ支援の実際

成 果：現行の世界各国の支援の実際、および2020年東京パラリンピックに向けた日本の支援について知る機会を得た。

（２）村井 剛（法学部・准教授）

F L P 演習 A

<テーマ>

スポーツ心理（認知・行動）部分を知る

<授業の概要>

スポーツの技能と学習、心理的効果、心理的適応、動機づけ（モチベーション）、競技心理について、文献や実態を確認しながら理解を進めた。

<活動内容>

体育連盟ソフトテニス部、陸上競技部、バレーボール部へのモチベーションビデオ作成・提供
Bリーグ観戦者調査

野球部の心理的競技能力調査

中央大学中長期事業計画におけるスポーツに関連するアンケート調査

国立スポーツ科学センター見学

スノースポーツ時の恐怖感や滑走時の唾液アミラーゼ活性に関する調査

各調査に関する詳細報告は、別途作成しているゼミの活動報告書にて述べている。

<実態調査・見学調査・講演会>

実 施 日：2016年10月9日（日）

実施都市：神奈川県平塚市

実施施設：東海大学湘南校舎

実施内容：Bリーグアンケート調査

成 果：観戦者の実態について把握することができた。

実 施 日：2016年11月25日（金）

実施都市：東京都世田谷区

実施施設：世田谷区立総合運動場体育館

実施内容：Bリーグアンケート調査

成 果：観戦者の実態について把握することができた。

実 施 日：2016年12月10日（土）

実施都市：東京都大田区

実施施設：大田区総合体育館

実施内容：Bリーグアンケート調査

成 果：観戦者の実態について把握することができた。

実 施 日：2017年2月27日（月）～ 3月1日（水）

実施都市：長野県飯山市

実施施設：斑尾高原スキー場

実施内容：スノースポーツ活動時の唾液アミラーゼ活性に関する調査

成 果：滑走前の緊張状態を反映する結果が得られた。

実 施 日：2017 年 3 月 17 日（金）

実施都市：東京都北区

実施施設：国立スポーツ科学センター

実施内容：国立スポーツ科学センター見学調査

成 果：国内最高峰のトレーニングと科学的サポートの実態を学ぶことができた。ハイパフォーマンスジムは特にトレーニング時の即時情報フィードバックの観点から非常に参考になる視点が得られた。

F L P 演習 B

<テーマ>

スポーツ心理（認知・行動）部分を知る

<授業の概要>

スポーツの技能と学習、心理的効果、心理的適応、動機づけ（モチベーション）、競技心理について、文献や実態を確認しながら理解を進めた。

<活動内容>

体育連盟ソフトテニス部、陸上競技部、バレーボール部へのモチベーションビデオ作成・提供
Bリーグ観戦者調査
野球部の心理的競技能力調査
中央大学中長期事業計画におけるスポーツに関連するアンケート調査
国立スポーツ科学センター見学
スノースポーツ時の恐怖感や滑走時の唾液アミラーゼ活性に関する調査
各調査に関する詳細報告は、別途作成しているゼミの活動報告書にて述べている。

<実態調査・見学調査・講演会>

実 施 日：2016年5月7日（土）

実施都市：千葉県白子町

実施施設：白子町テニスコート

実施内容：モチベーションビデオ作成の資料収集

成 果：ビデオの素材収集ができた。

実 施 日：2016年12月11日（日）

実施都市：東京都渋谷区

実施施設：国立代々木第二体育館

実施内容：Bリーグアンケート調査

成 果：観戦者の実態について把握することができた。

実 施 日：2017年2月27日（月）～ 3月1日（水）

実施都市：長野県飯山市

実施施設：斑尾高原スキー場

実施内容：スノースポーツ活動時の唾液アミラーゼ活性に関する調査

成 果：滑走前の緊張状態を反映する結果が得られた。

実 施 日：2017年3月17日（金）

実施都市：東京都北区

実施施設：国立スポーツ科学センター

実施内容：国立スポーツ科学センター見学調査

成 果：国内最高峰のトレーニングと科学的サポートの実態を学ぶことができた。ハイパフォーマンスジムは特にトレーニング時の即時情報フィードバックの観点から非常に参考になる視点が得られた。

F L P 演習 C

<テーマ>

スポーツ心理（認知・行動）部分を知る

<授業の概要>

スポーツの技能と学習、心理的効果、心理的適応、動機づけ（モチベーション）、競技心理について、文献や実態を確認しながら理解を進めた。

<活動内容>

体育連盟ソフトテニス部、陸上競技部、バレーボール部へのモチベーションビデオ作成・提供
Bリーグ観戦者調査
野球部の心理的競技能力調査
中央大学中長期事業計画におけるスポーツに関連するアンケート調査
国立スポーツ科学センター見学
スノースポーツ時の恐怖感や滑走時の唾液アミラーゼ活性に関する調査
各調査に関する詳細報告は、別途作成しているゼミの活動報告書にて述べている。

<実態調査・見学調査・講演会>

実施日：2016年5月7日（土）～5月8日（日）、7月10日（日）～7月12日（火）

実施都市：千葉県白子町

実施施設：白子町テニスコート

実施内容：モチベーションビデオ作成用の素材映像収集

成果：ビデオの素材収集ができた。

実施日：2016年10月9日（日）

実施都市：神奈川県平塚市

実施施設：東海大学湘南校舎

実施内容：Bリーグ観戦調査

成果：観戦者の実態について把握することができた。

実施日：2016年11月19日（土）

実施都市：群馬県高崎市

実施施設：浜川運動公園浜川体育館

実施内容：Bリーグ観戦調査

成果：観戦者の実態について把握することができた。

実施日：2017年2月27日（月）～ 3月1日（水）

実施都市：長野県飯山市

実施施設：斑尾高原スキー場

実施内容：スノースポーツ活動時の唾液アミラーゼ活性に関する調査

成 果：滑走前の緊張状態を反映する結果が得られた。

実 施 日：2017 年 3 月 17 日（金）

実施都市：東京都北区

実施施設：国立スポーツ科学センター

実施内容：国立スポーツ科学センター見学調査

成 果：国内最高峰のトレーニングと科学的サポートの実態を学ぶことができた。ハイパフォーマンスジムは特にトレーニング時の即時情報フィードバックの観点から非常に参考になる視点が得られた。

(3) 市場 俊之 (商学部・教授)

FLP 演習 A・B・C

<テーマ>

オリンピックとスポーツ運動の機能

<授業の概要>

「人間と運動」、「スポーツの歴史」、「オリンピックとパラリンピック」、「スポーツ運動の成り立ち」などを全体テーマとする。それらを分担調査し、その内容を報告・討議する。(＊テーマは変更されることがある。) さらに、それぞれの興味関心を優先させた個別テーマを調査し口頭による報告をする。その後に報告書を作成する。

<活動内容>

前期: ドイツ・ミュンスター大学クリューガー教授 (Michael Krüger) の講演原稿 “Olympic Games, Olympism and Olympic Education” を講読し、オリンピックについて考察した。

後期: ドイツ・チュービンゲン大学ゲーナー元教授 (Ulrich Göhner) の「スポーツ運動学入門 (Einführung in die Bewegungslehre des Sports)」を基にスポーツ運動の機能について考察した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習: 演習B

実施日: 2016年11月2日 (水) ～ 11月4日 (金)

実施都市: 新潟県新潟市

実施施設: デンカビッグスワンスタジアム・アルビレージ・JAPANサッカーカレッジ

実施内容: サッカーJ1アルビレックス新潟を訪問した。ホームのビッグスワンスタジアムのバックヤードツアー、チームのホームであるアルビレージ、そしてアルビレックス新潟の(運営) 基盤かつ背景となるJAPANサッカーカレッジを実態調査した。

成果: ひとつのチームを訪問し「内での事情」を垣間見ることで、メディアに露出されている事柄を多面的に捉え直す契機となった。

(4) 小峯 力 (理工学部・教授)

F L P 演習 A

<テーマ>

- 1) 大学スポーツ振興 (Sport for All)
- 2) スポーツと生命教育 (Lifesaving)

<授業の概要>

東京オリンピック・パラリンピックに向け、大学スポーツ振興 (戦略) について、その可能性を学際的に希求していく。また、救急救命の視点から傷害や事故を分析し、その救急対応と危機管理の在り方を検討し、スポーツに於ける安全 (リスクマネジメント) を研究する。

<活動内容>

小峯ゼミは、ヒューマン・ウェルネスを骨子とした実践を展開した。例えば「めでるくんプロジェクト」(以下、めでプロとする) に於いては、小中学生とその保護者を対象とした救急蘇生 (AED 含む) 講習会を実施した。その実践を通じて自他の生命を意識し、身近なひとを救い守る (守れる) 意識を深め、しかしその技術を活かすことがない予防の観点こそ重要であることを伝える。一方、スポーツ振興では、「中央大学体育連盟部会・集中応援プログラム (Chuo Sports Club Support Program ; CSCS プログラム)」及び「Chuo Sports Fun Club (CSF)」を設立・展開した。CSCS プログラムとは、小峯ゼミが体育連盟部会と共同で試合の集客に協力することで、部員に対するアンケート調査とその分析を行い、選手やチーム全体の課題解決策を提供する等の企画でもある。今年度は、スケート部アイスホッケー部門 (以下、アイスホッケー部とする) と CSCS プログラムを実施した。具体的には、アイスホッケー部の存在と試合を告知するためのビラをゼミで作成、配布した。また試合観戦を充実させるため、ルールシートと選手のプロフィールブック作成を実施した。一方、CSF とは体育連盟の試合時に観戦をよびかけ、集ったメンバーで観戦、体連生も踏まえた交流を行う等の観戦コミュニティを形成する企画である。今年度は興味のある者による SNS の LINE グループを作成し、観戦を 5 回実施した。上記双方の実践は、体育連盟に於ける部内の手の届かない部分へのアプローチを可能として、一般学生と部員をつなぐ提供となったと考えられる。また、一般学生に於いては、中央大学体育会を応援するきっかけの創出となり、「スポーツ観戦コミュニティ」という新たな繋がりを構築することに成功したといえる。今後は、よりコンスタントに活動を継続できるような組織作りを行うことや、体育会常任委員や学生部等、外部連携した取り組みを実施したいと考えている。さらに、中央大学駅伝部の協力依頼の下、乳酸測定を実施した。中大駅伝部は、歴代名門チームとして知られているが、近年は下位に低迷するなど成績不振が叫ばれている。そこで再び優勝争いをするため、血中乳酸濃度を測定し、濃度の上昇割合から適切な設定タイムを割り出し、今後の有効なトレーニングメニュー、及びタイムの向上に貢献していくこととした。測定当日は、藤原監督の下、選手の真剣な走りが展開された。ゼミ生は多くの OBOG の期待を背負う選手をサポートする重要性を現場に立って知る機会となった。2016 年度の予選会突破は果たされなかったが、再復活に向けた展開は既に始まり、継続的支援をしていく所存にある。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習A・B・C

実施日：2016年9月19日（月）～ 9月20日（火）

実施都市：千葉県富浦町

実施施設：中央大学 富浦臨海寮

実施内容：講義、ライフセービングの実践を通して、人命救助の実際、及び仲間との救助・救援構築をもって防災力を高め、合宿生活による「仲間意識」を深めることにある。

成果：ライフセービングの実践を通して、救助の際の細かい声かけや助け方、レスキューボードの使い方など、実際の救急救命の現場に求められる高度な技術や高い身体能力、救助の難しさを認識した。更に事故が起きてから救助するのではなく、事故を未然に防ぐ予防こそが重要で、それを可能にする救急システムこそがライフセービングの本質であることを学んだ。講義やグループワーク、それにレクリエーションを通して、共感力の重要性を理解するとともに、お互いが共感し合うことで一体感が高まり、それぞれの個性がさらに磨かれることを学んだ。

F L P 演習 B

<テーマ>

- 1) 大学スポーツ振興 (Sport for All)
- 2) スポーツと生命教育 (Lifesaving)

<授業の概要>

東京オリンピック・パラリンピックに向け、大学スポーツ振興（戦略）について、その可能性を学際的に希求していく。また、救急救命の視点から傷害や事故を分析し、その救急対応と危機管理の在り方を検討し、スポーツに於ける安全（リスクマネジメント）を研究する。

<活動内容>

小峯ゼミは、ヒューマン・ウェルネスを骨子とした実践を展開した。例えば「めでるくんプロジェクト」（以下、めでプロとする）に於いては、小中学生とその保護者を対象とした救急蘇生（AED 含む）講習会を実施した。その実践を通じて自他の生命を意識し、身近なひとを救い守る（守れる）意識を深め、しかしその技術を活かすことがない予防の観点こそ重要であることを伝える。一方、スポーツ振興では、「中央大学体育連盟部会・集中応援プログラム (Chuo Sports Club Support Program ; CSCS プログラム)」及び「Chuo Sports Fun Club (CSF)」を設立・展開した。CSCS プログラムとは、小峯ゼミが体育連盟部会と共同で試合の集客に協力することで、部員に対するアンケート調査とその分析を行い、選手やチーム全体の課題解決策を提供する等の企画でもある。今年度は、スケート部アイスホッケー部門（以下、アイスホッケー部とする）と CSCS プログラムを実施した。具体的には、アイスホッケー部の存在と試合を告知するためのビラをゼミで作成、配布した。また試合観戦を充実させるため、ルールシートと選手のプロフィールブック作成を実施した。一方、CSF とは体育連盟の試合時に観戦をよびかけ、集ったメンバーで観戦、体連生も踏まえた交流を行う等の観戦コミュニティを形成する企画である。今年度は興味のある者による SNS の LINE グループを作成し、観戦を 5 回実施した。上記双方の実践は、体育連盟に於ける部内の手の届かない部分へのアプローチを可能として、一般学生と部員をつなぐ提供となったと考えられる。また、一般学生に於いては、中央大学体育会を応援するきっかけの創出となり、「スポーツ観戦コミュニティ」という新たな繋がりを構築することに成功したといえる。今後は、よりコンスタントに活動を継続できるような組織作りを行うことや、体育会常任委員や学生部等、外部連携した取り組みを実施したいと考えている。さらに、中央大学駅伝部の協力依頼の下、乳酸測定を実施した。中大駅伝部は、歴代名門チームとして知られているが、近年は下位に低迷するなど成績不振が叫ばれている。そこで再び優勝争いをするため、血中乳酸濃度を測定し、濃度の上昇割合から適切な設定タイムを割り出し、今後の有効なトレーニングメニュー、及びタイムの向上に貢献していくこととした。測定当日は、藤原監督の下、選手の真剣な走りが展開された。ゼミ生は多くの OBOG の期待を背負う選手をサポートする重要性を現場に立って知る機会となった。2016 年度の子選会突破は果たされなかったが、再復活に向けた展開は既に始まり、継続的支援をしていく所存にある。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習A・B・C

実施日：2016年9月19日（月）～ 9月20日（火）

実施都市：千葉県富浦町

実施施設：中央大学 富浦臨海寮

実施内容：講義、ライフセービングの実践を通して、人命救助の実際、及び仲間との救助・救援構築をもって防災力を高め、合宿生活による「仲間意識」を深めることにある。

成果：ライフセービングの実践を通して、救助の際の細かい声かけや助け方、レスキューボードの使い方など、実際の救急救命の現場に求められる高度な技術や高い身体能力、救助の難しさを認識した。更に事故が起きてから救助するのではなく、事故を未然に防ぐ予防こそが重要で、それを可能にする救急システムこそがライフセービングの本質であることを学んだ。講義やグループワーク、それにレクリエーションを通して、共感力の重要性を理解するとともに、お互いが共感し合うことで一体感が高まり、それぞれの個性がさらに磨かれることを学んだ。

F L P 演習 C

<テーマ>

- 1) 大学スポーツ振興 (Sport for All)
- 2) スポーツと生命教育 (Lifesaving)

<授業の概要>

東京オリンピック・パラリンピックに向け、大学スポーツ振興（戦略）について、その可能性を学際的に希求していく。また、救急救命の視点から傷害や事故を分析し、その救急対応と危機管理の在り方を検討し、スポーツに於ける安全（リスクマネジメント）を研究する。

<活動内容>

小峯ゼミは、ヒューマン・ウェルネスを骨子とした実践を展開した。例えば「めでるくんプロジェクト」（以下、めでプロとする）に於いては、小中学生とその保護者を対象とした救急蘇生（AED 含む）講習会を実施した。その実践を通じて自他の生命を意識し、身近なひとを救い守る（守れる）意識を深め、しかしその技術を活かすことがない予防の観点こそ重要であることを伝える。一方、スポーツ振興では、「中央大学体育連盟部会・集中応援プログラム (Chuo Sports Club Support Program ; CSCS プログラム)」及び「Chuo Sports Fun Club (CSF)」を設立・展開した。CSCS プログラムとは、小峯ゼミが体育連盟部会と共同で試合の集客に協力することで、部員に対するアンケート調査とその分析を行い、選手やチーム全体の課題解決策を提供する等の企画でもある。今年度は、スケート部アイスホッケー部門（以下、アイスホッケー部とする）と CSCS プログラムを実施した。具体的には、アイスホッケー部の存在と試合を告知するためのビラをゼミで作成、配布した。また試合観戦を充実させるため、ルールシートと選手のプロフィールブック作成を実施した。一方、CSF とは体育連盟の試合時に観戦をよびかけ、集ったメンバーで観戦、体連生も踏まえた交流を行う等の観戦コミュニティを形成する企画である。今年度は興味のある者による SNS の LINE グループを作成し、観戦を 5 回実施した。上記双方の実践は、体育連盟に於ける部内の手の届かない部分へのアプローチを可能として、一般学生と部員をつなぐ提供となったと考えられる。また、一般学生に於いては、中央大学体育会を応援するきっかけの創出となり、「スポーツ観戦コミュニティ」という新たな繋がりを構築することに成功したといえる。今後は、よりコンスタントに活動を継続できるような組織作りを行うことや、体育会常任委員や学生部等、外部連携した取り組みを実施したいと考えている。さらに、中央大学駅伝部の協力依頼の下、乳酸測定を実施した。中大駅伝部は、歴代名門チームとして知られているが、近年は下位に低迷するなど成績不振が叫ばれている。そこで再び優勝争いをするため、血中乳酸濃度を測定し、濃度の上昇割合から適切な設定タイムを割り出し、今後の有効なトレーニングメニュー、及びタイムの向上に貢献していくこととした。測定当日は、藤原監督の下、選手の真剣な走りが展開された。ゼミ生は多くの OBOG の期待を背負う選手をサポートする重要性を現場に立って知る機会となった。2016 年度の子選会突破は果たされなかったが、再復活に向けた展開は既に始まり、継続的支援をしていく所存にある。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習A・B・C

実施日：2016年9月19日（月）～ 9月20日（火）

実施都市：千葉県富浦町

実施施設：中央大学 富浦臨海寮

実施内容：講義、ライフセービングの実践を通して、人命救助の実際、及び仲間との救助・救援構築をもって防災力を高め、合宿生活による「仲間意識」を深めることにある。

成果：ライフセービングの実践を通して、救助の際の細かい声かけや助け方、レスキューボードの使い方など、実際の救急救命の現場に求められる高度な技術や高い身体能力、救助の難しさを認識した。更に事故が起きてから救助するのではなく、事故を未然に防ぐ予防こそが重要で、それを可能にする救急システムこそがライフセービングの本質であることを学んだ。講義やグループワーク、それにレクリエーションを通して、共感力の重要性を理解するとともに、お互いが共感し合うことで一体感が高まり、それぞれの個性がさらに磨かれることを学んだ。

（５）加納 樹里（文学部・教授）

FLP演習A

<テーマ>

運動の基本的生理を理解し、健康やスポーツ活動に役立てる

<授業の概要>

教室授業は、年度始めは基礎的な課題を教員が指示し、履修生が文献をまとめ、発表・討論を行う形で実施した。アスリートに限らず、広く「コンディショニング」に役立つ理論の基礎を学習した。

<活動内容>

本年度は、以下の２つの参考書を中心に、教室での授業を実施した（内容の詳細は、ゼミ論集を参照）。

- ・ 放送大学院教材 「スポーツ・健康医科学」 河合祥雄他著
- ・ 「こころとからだを知る心拍数」 山地啓司著 杏林書院

なお、上記と平行して、前期文学部開設科目でゼミ生の履修を原則「必須」としている「トレーニングの科学」の授業進行にあわせて、身体と運動に関する基礎的な運動生理の内容の補充学習も行った。

一部のゼミ生は、秋期、南大沢で開催された「ベアフット協会」の展示、実演にも協力した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習A・B・C

実施日：2016年7月2日（土）（他、1月13日にも会食しながらMTG）

講演者：石原 智美 氏

演 題：栄養調査の理論と実際

実施都市：東京都八王子市

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 文学部体育共同研究室

実施内容：始めにメール便にて栄養調査の方法についての説明を受け、その後ゼミ生の有志が実際に提出した調査票をもとに、個別のアドバイスを事前送付してもらった。さらに課題として「体重別競技スポーツ種目での減量」に取り組むゼミ生の事例を取り上げながら、実際のエネルギー所要量の計算等をご指導頂いた。

成 果：「体重別スポーツ種目での減量」については、石原さんのアドバイスがなければゼミ論が仕上がらなかったといえる程、具体的かつ的確なアドバイスを頂いた。また、自分自身の日常を振り返りながら、理論的裏付けを得られたので、文字通り「現場に役立つノウハウ」を得ることができた。

対象演習：演習A・B・C

実施日：2016年7月22日（金）

講演者：山田 みき 氏

演題：運動処方に基づく運動指導の実践と問題点

実施都市：東京都文京区

実施施設：順天堂大学医学部附属病院健康スポーツ室

実施内容：教室授業では、概念だけを学習している運動処方の現場を見学させてもらいながら、スポーツ室の運営方法や課題についても説明をしてもらった。

成果：学内ではなかなか接触することがない高齢者や病気のリスクを抱える人たちへの運動にどのように向き合えばよいのか？という点で「百聞は一見にしかず」という効果があったと確信している。学生が社会にでてから要求されるのは、必ずしも健康で若い（自分たちと均質的な人たち）ではないということを、身をもって体感できたと思う。

対象演習：演習A・B・C

実施日：2016年8月29日（月）～ 8月31日（水）

実施都市：宮城県仙台市

実施施設：ベガルタ仙台並びに岩松旅館

実施内容：仙台市内のベガルタ仙台事務局を訪問し、担当者からクラブの取り組みについての説明をうけた。その後宿泊先に移動して、ゼミ活動とスポーツ交流（荒天のため屋内のみ）を実施。最終日解散前には、全員でバーベキューを実施した。

成果：ベガルタ仙台訪問は、ゼミ生に仙台ユース出身者がいた上、仙台での就職も決まっていたので、非常に好意的な雰囲気の中で実施することができた。仙台に限らず、地域振興とスポーツについて、色々な視点で考えるきっかけが得られた。今後、このような活動に携わりたいという希望を表明する学生もいた。合宿は台風の影響で屋外の活動はすべて中止となってしまったが、その分ゼミ生同士、特に学年の異なるゼミ生間の交流をはかることができた。また、栄養調査の結果について時間をかけて議論し、4年生の最後のまとめについて他のゼミ生も交えて検討する時間がとれた。唯一予定通りに実施できた屋外バーベキューでは、かつての被災地の海岸にて、復興の話を聞きながら交流を深めることができた。

F L P 演習 B・C

<テーマ>

スポーツのコンディショニングについて理論学習→実践（実測）→結果の報告（ゼミ論）をゼミのノルマとした。

<授業の概要>

各自のテーマについて文献を検索し、抄読、発表の形式で教室授業を行った。各々の課題探求の中で、測定等が必要なものについては、ゼミ時に相談しながら協力しあって進めた。

<活動内容>

本年度はB/C生が以下のようなテーマについて関連文献を収集、教室授業にて紹介し、各自が興味あるデータの収集を行った。

またゼミ生の一人は、日本トレーニング指導者協会の奨学生に応募採用され、夏期休暇中の集中受講によりトレーニング指導者（JATI: Accredited Training Instructor）の基礎資格を取得した。さらに、2名のゼミ生がマラソン完走をめざして理論学習と実践を行い、3月の大会での完走とタイム更新（昨年実績者）をめざしている。

~~~~~

扱った主なテーマは下記の通り（詳細はゼミ論参照）

「スポーツ選手の減量問題」「柔道における減量の実際」

「加齢による筋萎縮と運動、栄養の役割」「サプリメントと栄養エルゴジェニック」

「パルテ会練習見学とアンケート調査（ボート競技）」「ローイングと高齢者」

「日本におけるアマチュアリズム」「プロ選手のセカンドキャリア問題」、

「歩行とランニングのバイオメカニクス」「マラソントレーニングの計画」

「マラソン完走への課題」、「睡眠と身体活動」「こどもの生活習慣の現状」

「自転車エルゴメータによるバレーボール選手のトレーニング」「女性とスポーツ」

### <実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習A・B・C

実施日：2016年7月2日（土）（他、1月13日にも会食しながらMTG）

講演者：石原 智美 氏

演 題：栄養調査の理論と実際

実施都市：東京都八王子市

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 文学部共同研究室

実施内容：始めにメール便にて栄養調査の方法についての説明を受け、その後ゼミ生の有志が実際に提出した調査票をもとに、個別のアドバイスを事前送付してもらった。さらに課題として「体重別競技スポーツ種目での減量」に取り組むゼミ生の事例を取り上げながら、実際のエネルギー所要量の計算等をご指導頂いた。

成 果：「体重別スポーツ種目での減量」については、石原さんのアドバイスがなければゼミ

論が仕上がらなかったといえる程、具体的かつ的確なアドバイスを頂いた。また、自分自身の日常を振り返りながら、理論的裏付けを得られたので、文字通り「現場に役立つノウハウ」を得ることができた。

対象演習：演習A・B・C

実施日：2016年7月22日（金）

講演者：山田 みき 氏

演 題：運動処方に基づく運動指導の実践と問題点

実施都市：東京都文京区

実施施設：順天堂大学医学部附属病院健康スポーツ室

実施内容：教室授業では、概念だけを学習している運動処方の現場を見学させてもらいながら、スポーツ室の運営方法や課題についても説明をしてもらった。

成 果：学内ではなかなか接触することがない高齢者や病気のリスクを抱える人たちへの運動にどのように向き合えばよいのか？という点で「百聞は一見にしかず」という効果があったと確信している。学生が社会にでてから要求されるのは、必ずしも健康で若い（自分たちと均質的な人たち）ではないということを、身をもって体感できたと思う。

対象演習：演習A・B・C

実施日：2016年8月29日（月）～ 8月31日（水）

実施都市：宮城県仙台市

実施施設：ベガルタ仙台並びに岩松旅館

実施内容：仙台市内のベガルタ仙台事務局を訪問し、担当者からクラブの取り組みについての説明をうけた。その後宿泊先に移動して、ゼミ活動とスポーツ交流（荒天のため屋内のみ）を実施。最終日解散前には、全員でバーベキューを実施した。

成 果：ベガルタ仙台訪問は、ゼミ生に仙台ユース出身者がいた上、仙台での就職も決まっていたので、非常に好意的な雰囲気の中で実施することができた。仙台に限らず、地域振興とスポーツについて、色々な視点で考えるきっかけが得られた。合宿は台風の影響で屋外の活動はすべて中止となってしまったが、その分ゼミ生同士、特に学年の異なるゼミ生間の交流をはかることができた。また、栄養調査の結果について時間をかけて議論し、4年生の最後のまとめについて他のゼミ生も交えて検討する時間がとれた。唯一予定通りに実施できた屋外バーベキューでは、かつての被災地の海岸にて、復興の話を聞きながら交流を深めることができた。

## (6) 布目 靖則 (文学部・教授)

### FLP演習B

#### <テーマ>

野外教育および自然体験学習の理論と実践について学習する。また、野外活動の安全管理、野外活動を通じた安全教育の可能性について探る。関連領域の資格取得に挑戦する。

#### <授業の概要>

自然レクリエーションの中から「登山（無雪期）」や「スキー」を取り上げ、その運動特性や心理的効果、プログラム展開の手法、安全管理、国内外の動向等について学習する。

また、野外における活動主体の立場から環境問題に関する理解も深める。

#### <活動内容>

布目ゼミでは、主として前期；「富士登山」、後期；「スキーの安全管理」について学習した（詳細は次の通り）。

|      |                               |
|------|-------------------------------|
| 第1回  | 前期の活動計画について                   |
| 第2回  | 富士登山（情報収集）                    |
| 第3回  | 富士登山（計画立案）                    |
| 第4回  | 富士登山（歴史、世界遺産登録、環境問題）          |
| 第5回  | 発表（プレゼンテーション）に向けて             |
| 第6回  | 発表（プレゼンテーション）の方法              |
| 第7回  | 登山の安全管理学 事故分析（テキスト講読）         |
| 第8回  | 登山の安全管理学 法的責任（テキスト講読）         |
| 第9回  | 発表；「富士登山の歴史」                  |
| 第10回 | 発表；「富士の世界文化遺産登録」              |
| 第11回 | 冒険教育の歴史 0.B.S.を中心として（テキスト講読）  |
| 第12回 | 講演会                           |
| 第13回 | 登山の安全管理学 判例分析（テキスト講読）         |
| 第14回 | 富士登山の準備                       |
| 第15回 | 前期のまとめ                        |
| 第16回 | 後期の活動計画について                   |
| 第17回 | スキーの安全管理学 判例分析（テキスト講読）        |
| 第18回 | スキーの安全管理学 スキーヤーの責務（ゼミ見学会を兼ねる） |
| 第19回 | スキーの安全管理学 安全教育の在り方（ゼミ見学会を兼ねる） |
| 第20回 | 実態調査の計画①                      |
| 第21回 | 発表（プレゼンテーション）の分担、実態調査の計画②     |
| 第22回 | 発表（プレゼンテーション）の概略決定            |
| 第23回 | 新ゼミ生面接                        |

|        |                       |
|--------|-----------------------|
| 第 24 回 | 発表；「バックカントリー・スキーの諸問題」 |
| 第 25 回 | 発表；「スキー場におけるスキーヤーの責務」 |
| 第 26 回 | 実態調査の計画③              |
| 第 27 回 | 期末交流会（成果報告会）に向けて      |
| 第 28 回 | 実態調査の最終準備             |
| 第 29 回 | チューンアップ実習             |
| 第 30 回 | 後期のまとめ                |

また、12 月下旬に群馬県・丸沼スキー場周辺において 2 泊 3 日の日程で実態調査を実施した（詳細は次項の通り）。

#### <実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習B

実 施 日：2016年12月22日（木）～ 12月24日（土）

実施都市：群馬県片品村

実施施設：丸沼高原スキー場・他

実施内容：丸沼高原スキー場において「スノースポーツ安全基準」がどのように利用者に周知されているかについて、スキー場管理者から聞き取り調査を行った。また、スキーの安全教育について、実践を通して学習した。

成 果：関東エリアでいち早く開業する「丸沼高原スキー場」は、毎年シーズンはじめにかなりの混雑がみられる。事故の未然防止に向けたスキー事業者の取り組み（具体的には「スノースポーツ安全基準」の周知とその他の安全啓発活動）について実態を知ることができた。また、スクール等において安全教育がどの程度徹底されているかについて情報を得ることができた。



(7) 森 正明 (文学部・教授)

**FLP演習A**

＜テーマ＞

大学スポーツ、中大スポーツ振興

＜授業の概要＞

大学運動部やスポーツ同好会の組織、大学スポーツのマネジメント（競技力向上や地域スポーツクラブ育成のための事例-早稲田方式、立命館方式、関大方式等）、大学スポーツ応援文化の醸成とクラブ文化の醸成など。

＜活動内容＞

森ゼミは、A 生 1 名という構成であったので「モノレールクラシコ」という本学硬式野球部と明星大学硬式野球部の練習試合を企画し 7 月最終週の「オープンキャンパス日」に実現し、両校関係者、オープンキャンパス参加者など盛況であった。当日試合をした選手たちは文学部棟に移動して、懇親会を行い今後も定期的な試合を計画していくことを確認して終了した（この企画の全容は『HAKUMON Chuo』2016 秋号に特集された）。

後期には、現代社会とスポーツの授業時に「モノレールクラシコ事例」を報告し学生調査を実施した。

## F L P 演習 B

### <テーマ>

大学スポーツ、中大スポーツ振興

### <授業の概要>

大学運動部やスポーツ同好会の組織、大学スポーツのマネジメント（競技力向上や地域スポーツクラブ育成のための事例-早稲田方式、立命館方式、関大方式等）、大学スポーツ応援文化の醸成とクラブ文化の醸成など。

### <活動内容>

森ゼミは、B 生 2 名ともに「スポーツ振興に向けた学生動員」をテーマに取り組み A 生企画「モノレールクラシコ」スタッフとして前期の準備段階から当日を含め活動した。後期は、「中央大学とスポーツ」の授業時に「白門レガッタ」企画に対する学生調査を実施した。本年度のまとめとしての取り組みは、2016 年パラリンピックボート競技コーチ、大戸氏を招いて講演会を実施した。

### <実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習B

実施日：2016年12月19日（月）

講演者：大戸 淳之介 氏

演 題：五輪でのボランティア活動とボート競技について—2020東京オリパラを考えよう—

実施都市：東京都八王子市

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 3554教室

実施内容：リオパラリンピックのボート競技実態と今後のボランティア活動について

成 果：リオパラリンピックの体験をされた本学OBの実態を把握できて、今後の多様な専門との関連を考える良い機会となった。

## （８）小林 勉（総合政策学部・教授）

### F L P 演習 A

#### <テーマ>

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

#### <授業の概要>

J リーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなってきています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中でなされてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。それと同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えようとする際の様々な課題についても検証します。

地域で展開されるスポーツの実情を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的な観点から検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

#### <活動内容>

小林勉ゼミは、地域・公共マネジメントプログラムとスポーツ健康科学プログラムの双方に属したゼミナールである。今年度は地域・公共マネジメントプログラムの群馬県沼田市へのサマースクールに並行して、CCRC という我が国で現在取り組まれつつある高齢者に重点を置いた社会政策に検討を行った。文献調査による先行研究だけでなく、実際に千葉県、山梨県、福岡県の CCRC へ訪れ、その実態や今後の展望などについて現地調査を展開した。地域・公共マネジメントプログラムとしては沼田市に「スポーツで挑む地域活性化」という政策提言を行い、各活動報告会及び報告書作成においては、それに加え「新日本版 CCRC の検証」というテーマのもと、CCRC への調査結果を報告した。

#### <実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習A

実施日：2016年8月16日（火）

実施都市：千葉県千葉市

実施施設：スマートコミュニティ稲毛

実施内容：日本版CCRCに先駆的に取り組まれているスマートコミュニティ稲毛へ訪れ、その実態や今後の展望などについて現地調査を行った。

成果：政府に注目され始めているCCRCを行っている施設を見学し、職員の方に話をヒアリングすることで、運営状況や施設の雰囲気、マネジメント上の工夫など様々な点について、現場感覚で感じることができた。

対象演習：演習A

実施日：2016年8月18日（木）

実施都市：山梨県都留市

実施施設：企画課 つる創生推進室

実施内容：行政が先導し日本版CCRCに先駆的に取り組み始めた山梨県都留市へのヒアリング調査を行った。

成果：これまで日本ではあまり馴染みのない取り組みであることから、住民への認知、共同事業者の獲得が難しく、また行政が取り組む前例として国内にほとんど存在しなかったため、多くの点で困難を強いられる状態が多いといった課題点を明らかにすることができた。

対象演習：演習A

実施日：2016年9月1日（木）～ 9月2日（金）

実施都市：福岡県朝倉市

実施施設：美奈宜の杜

実施内容：福岡県朝倉市に位置する“美奈宜の杜”へ行き、現地の現状へ設立経緯などについてのヒアリング活動を実施した。とりわけ、高齢者だけでなく若年層向けの企画も始め、多世代コミュニティがいかに形成されつつあるのかについての聞き取りを行った。

成果：HPなどのインターネット上の情報だけでは知り得ない、“美奈宜の杜”の実情及び課題、住民の日頃の生活など、今後のCCRCの形を構想していくには欠かせない重要な論点について浮き彫りにすることができた。

対象演習：演習A

実施日：2016年9月7日（水）～ 9月11日（日）

実施都市：秋田県秋田市

実施施設：秋田市八橋運動公園

実施内容：J3チームのブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトに参加し、その運営補助を行うなかで、来年の自分たちのプロジェクトへ向けて、現地スタッフの方々から運営上の留意点等について現場指導を受けた。

成果：その運営概要や、秋田という場所でプロジェクトを行う意義等を、現地スタッフや地域の人々とのやり取りの中で肌身でも感じ、来年の自分たちのプロジェクトへの取りかかりとして、貴重な経験を積むことができた。

対象演習：演習A

実施日：2016年9月9日（金）

講演者：今村 貴幸 氏（常葉大学講師）

演題：運動による脳活



実施都市：秋田県秋田市

実施施設：ブラウブリッツ秋田クラブ事務所ほか

実施内容：秋田市東部市民サービスセンター、南部市民サービスセンター、西部市民サービスセンター、中央市民サービスセンター 秋田市4カ所のコミュニティーセンターにて、市内の中高年層を対象に、スポーツ健康医学専門の今村貴幸氏による「運動による脳の活性化」というテーマで講演会を開催した。

成 果：秋田市内4カ所の市民サービスセンターで実施することで、より多くの高齢者の方が足を運べるような機会作りを展開した。運動することやスポーツ観戦による脳への効果に関する講話から、講演内容に沿う形で体操教室、試合観戦への参加を促したことで9月10日のプロジェクト実施日にも多くの参加者を誘引することができた。

対象演習：演習A

実 施 日：2016年11月18日（金）～ 11月21日（月）

実施都市：秋田県秋田市

実施施設：ブラウブリッツ秋田

実施内容：2016年9月に行った「まめの木プロジェクト」の活動最終報告を、プロジェクト・パートナーである（株）ブラウブリッツ秋田に対し実施した。また、市役所や市民会館などのプロジェクトに支援を受けた関係機関等にも報告書を配布し、プロジェクト成果についてフィードバックを行った。

成 果：プロジェクトの構想段階から実施段階に至るまで、長期間に渡りコラボレーションした（株）ブラウブリッツ秋田にプロジェクトの成果と感謝の意を伝えるとともに、来年度以降の連携のあり方について協議を行った。

対象演習：演習A

実 施 日：2016年12月21日（水）

講 演 者：岩瀬 浩介 氏（ブラウブリッツ秋田社長）

演 題：Jリーグクラブによる地域貢献活動の成果報告

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 11440教室

実施内容：本ゼミのプロジェクト・パートナーである（株）ブラウブリッツ秋田の代表取締役社長・岩瀬浩介氏を招聘し、本年度のプロジェクトの評価と、来年度のプロジェクトの目標共有を目的とした講演会を開催した。

成 果：過去3年に渡って続いているプロジェクトに対し、本ゼミが担う役割の部分のプロジェクト評価を行っていただき、同社の目指す目標をプロジェクトの接点について再確認することで、また、来年度のプロジェクトに向けて十全なる準備を行った。

## F L P 演習 B

### <テーマ>

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

### <授業の概要>

J リーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなってきています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中でなされてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。それと同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えようとする際の様々な課題についても検証します。

地域で展開されるスポーツの実情を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的な観点から検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

### <活動内容>

スポーツによる地域活性化が日本各地で目指される中、本年度の研究対象地となった秋田県秋田市もその例外ではない。そのような地域の中で、実際のスポーツ振興はいかに実施されているのか。市民や市役所の担当者にヒアリング調査を行い、様々な視点からスポーツによる地域活性化の有り様について検討を行った。また8月から9月にかけて行ったJリーグクラブ・ブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトにおいては、現地のNPOや行政機関と協力し、秋田市の高齢者のコミュニティ形成を促進するプロジェクトを実施した。

### <実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習B・C

実施日：2016年4月15日（金）

講演者：今村 貴幸 氏（常葉大学講師）

演 題：高齢者を対象としたイベントに関するプロジェクトマネジメントについて

実施都市：東京都八王子市

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 11430教室

実施内容：プロジェクトマネジメントの手法に関して学んだ。

成 果：昨年度本ゼミで行ったプロジェクトマネジメントに関してのフィードバックと本年度プロジェクトに向けて、高齢者を対象とした運動プログラムの留意点について意見交換を行った。

対象演習：演習B・C

実施日：2016年4月15日（金）

講演者：外山 新平 氏（株式会社ブラウブリッツ秋田常務）

演 題：Jリーグクラブの地域貢献活動について

実施都市：東京都八王子市

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 11430教室

実施内容：Jリーグクラブの展開する地域貢献活動に関して、その実態と課題について概説していただき、本年度のプロジェクト準備を行った。

成 果：Jリーグクラブの地域貢献活動を念頭に、当該プロジェクトとの接点を浮き彫りにすることができた。

対象演習：演習B

実 施 日：2016年5月20日（金）～ 5月23日（月）

実施都市：秋田県秋田市

実施施設：秋田市八橋運動公園

実施内容：ホームゲーム観戦者へのアンケート調査

成 果：サッカー観戦者の実態について年齢層や観戦頻度などを調査し、スタジアムを通じた高齢者コミュニティの創出に関する基礎的データの収集を行った。

対象演習：演習B

実 施 日：2016年6月6日（月）～ 6月8日（水）

実施都市：秋田県秋田市

実施施設：ブラウブリッツ秋田

実施内容：秋田市グラウンドゴルフ協会会長と秋田市8人制バレーボール連盟理事と意見交換を行い、プロジェクトを運営する上での協力関係を構築した。

成 果：地元根づくスポーツネットワークとの接点を構築することで、余所者では感受し得ないローカル・アクターからのアドバイスのもと、現地の住民に受容されやすいイベントのあり方について意見交換を行った。

対象演習：演習B

実 施 日：2016年7月13日（水）～ 7月15日（金）

実施都市：秋田県秋田市

実施施設：ブラウブリッツ秋田クラブ事務所

実施内容：8月から9月にかけて実施するプロジェクトに関する意見交換会をクラブ担当者らと行った。

成 果：小林ゼミが本年度行うプロジェクトに関する概要説明を行い、それに対する意見交換を行った。プロの興行試合を実際に運営するクラブ経営側の視点からプロジェクトに対する貴重な意見を提示してもらったことで、プロジェクト準備を多角的に検討することができた。

実 施 日：2016年7月20日（水）～ 7月21日（木）

実施都市：秋田県秋田市

実施施設：秋田市立体育館

実施内容：8人制バレーボール大会の見学とヒアリング調査

成 果：実際に開催されている8人制バレーボール大会を視察し、その大会マネジメント方法やそこに根づくローカルルールなどについて学んだ。ヒアリング調査の中では8人制バレーボールプレーヤーの方々の地元への思いなども垣間見え、現地固有のインスティチュショナル・メモリーについて明らかにすることができた。

対象演習：演習B

実 施 日：2016年7月26日（火）～ 7月28日（木）

実施都市：秋田県秋田市

実施施設：秋田市大平山リゾート公園

実施内容：グラウンドゴルフ大会の見学とヒアリング調査

成 果：グラウンドゴルフ大会の月例大会を視察し、大規模となる大会のマネジメント方法を学んだ。ヒアリング調査の中では、秋田市内でのグラウンドゴルフの人気を再確認し、地域活性化の一因になるのではないかと仮説を打ち立てることができた。

対象演習：演習B

実 施 日：2016年7月31日（日）～ 8月3日（水）

実施都市：秋田県秋田市

実施施設：ブラウブリッツ秋田

実施内容：プロジェクト準備ために、使用する各施設の施設確認を行った。

成 果：今後使用する施設の視察を行い、施設運営者に対してプロジェクトへの協力要請とヒアリング調査を行った。施設利用頻度などから秋田市民のスポーツ施設利用率は明らかにすることができた。

対象演習：演習B

実 施 日：2016年8月9日（火）～ 8月12日（金）

実施都市：秋田県秋田市

実施施設：ブラウブリッツ秋田

実施内容：ブラウブリッツ秋田職員へのヒアリング調査及びローカル・アクターとの意見交換会

成 果：職員たちへのヒアリング調査から、Jリーグクラブの地域貢献の実態を浮き彫りにした。また、プロジェクトに協力するローカル・アクターの郷土料理サークル「銀あんの会」会長と意見交換会を行い、郷土料理づくりを通じて多世代交流を図るイベントの運営イメージを両者で共有することで、マネジメントの詳細を詰めることができた。

対象演習：演習B

実 施 日：2016年8月17日（水）～ 8月20日（土）

実施都市：秋田県秋田市

実施施設：秋田市中心サービスセンター

実施内容：1週間後に主催する講演会活動の事前準備を行った。

成 果：1週間後に控える今村貴幸氏を招いた講演会に向けて現地に於て最終調整を行った。  
また、秋田市の通信制高校と意見交換会を開き、秋田市に住む若者の考え方や、彼らの将来構想についてヒアリング調査を行い、高齢化が進む秋田県における若年層世代の特徴を明らかにすることができた。

対象演習：演習B

実 施 日：2016年8月22日（月）～ 8月27日（土）

実施都市：秋田県秋田市

実施施設：秋田市中心サービスセンター

実施内容：秋田市内4か所のサービスセンターで講演会活動を行い、市民の健康への意識付けを行うとともに、高齢者世代のコミュニティづくりへ向けたインセンティブ形成を図った。

対象演習：演習B

実 施 日：2016年9月2日（金）～ 9月12日（月）

実施都市：秋田県秋田市

実施施設：秋田市八橋運動公園

実施内容：7つのイベントを運営し、秋田市内における健康増進、またはコミュニティの活性化を図った。

成 果：7つのイベントを主催し、小学生から高齢者世代まで幅広い世代を含め、延べ343名の市民を参加させることに成功した。

対象演習：演習B

実 施 日：2016年11月17日（木）～ 11月21日（月）

実施都市：秋田県秋田市

実施施設：秋田市八橋運動公園

実施内容：8月と9月に行ったプロジェクトのフォローアップ調査を行った。

成 果：秋田県庁や秋田市役所、秋田市八橋運動公園に赴きヒアリング調査を行った。プロジェクトが及ぼした効果や今後の課題についてローカル・アクターらと意見交換を行い、来年度に向けた課題を浮き彫りにすることができた。

## FLP演習C

### <テーマ>

「スポーツによる地域活性化の可能性」に関する研究

### <授業の概要>

Jリーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなってきています。こうした捉え方はいつ頃から、どのような経緯の中でなされてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯についての理解を深めながら、「スポーツによる地域活性化の可能性」について検討していきます。それと同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えようとする際の様々な課題についても検証します。

地域で展開されるスポーツの実情を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的な観点から検討できるようになることが本授業の大きな目標です。

### <活動内容>

今年度は、以下3点の活動を展開した。

1. 「中大杯・めでるくんスポーツフェスタ」におけるイベント企画・大会運営のサポート  
…7月第1・第2日曜日に、FLPスポーツ・健康科学プログラムに所属するゼミ生合同で開催した「中大杯・めでるくんスポーツフェスタ」において、大会でのイベント企画・当日の大会運営サポートおよび過去2年間の同大会での活動経験を生かした助言を行った。
2. 「ブラウブリッツ秋田まめの木プロジェクト」での事業推進・研究のサポート  
…演習Bの行った「ブラウブリッツ秋田まめの木プロジェクト」において、プロジェクト推進及び研究のサポートを行った。2015年度と同プロジェクトでの活動経験を活かし、本プロジェクトの事業・調査研究に関する運営補助および助言を行った。
3. 「群馬県沼田市における地域活性化へのスポーツツーリズムの活用可能性」の検討と同市への政策提言  
…演習Aの学生と共に、群馬県沼田市を対象にして、「近年地域活性化の文脈においてその有用性が唱えられているスポーツツーリズムは、沼田市の観光面での地域活性化に寄与しているのか」について、現地でのフィールドワークと関係各所へのヒアリング調査・研究に関するサポートおよび助言。なお、調査結果については、同市へ政策提言として提出した。

### <実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習B・C

実施日：2016年4月15日（金）

講演者：今村 貴幸 氏（常葉大学講師）

演題：高齢者を対象としたイベントに関するプロジェクトマネジメントについて

実施都市：東京都八王子市

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 11430教室

実施内容：プロジェクトマネジメントの手法に関して学んだ。

成 果：昨年度本ゼミで行ったプロジェクトマネジメントに関してのフィードバックと本年度プロジェクトに向けて、高齢者を対象とした運動プログラムの留意点（想定し得るトラブルの回避法と発生時における対処法）について意見交換を行った。

対象演習：演習B・C

実 施 日：2016年4月15日（金）

講 演 者：外山 新平 氏（株式会社ブラウブリッツ秋田常務）

演 題：Jリーグクラブの地域貢献活動について

実施都市：東京都八王子市

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 11430教室

実施内容：Jリーグクラブの展開する地域貢献活動に関して、その実態と課題について概説していただき、本年度のプロジェクト準備を行った。

成 果：Jリーグクラブの地域貢献活動を念頭に、当該プロジェクトとの接点を浮き彫りにすることができた。

対象演習：演習C

実 施 日：2016年9月6日（火）～ 9月12日（月）

実施都市：秋田県秋田市

実施施設：秋田市八橋運動公園

実施内容：「まめの木プロジェクト」でのイベント実施における事前準備・当日マネジメント及び事後処理のサポート。

成 果：昨年度の経験を活かし、プロジェクトが計画通りに推進していくようにサポートしたことにより、イベントと調査研究を円滑に展開することができた。





## V. 地域・公共マネジメントプログラム

### 1. 設置の趣旨と教育の目的

2000 年 4 月に地方分権一括法が施行され、地方自治体は国から権限を委譲されるとともに自己管理・自己責任のもとに政策の立案・運営を求められることになりました。

また、東日本大震災や福島原発事故など複合的な災害や熊本大地震などの大災害に見舞われ、被災地を中心として多くの地域の人々の生活が脅かされている現状があります。

このような状況の中で、それぞれの地域は、非常に複雑かつ多様化した様々な問題を抱えています。少子高齢化の進行と福祉、地場産業や商店街の衰退、地域の環境、治安、教育に関する問題、市町村合併や財政赤字の拡大、そして安全・安心な生活の場の喪失など公共的な重要課題が山積し、住民の不安・不満が高まっています。このような状況に対処するには、行政だけでなく、地域の人々も、「新しい公共」という考え方で、独自に創造的な戦略をもって取り組む素地ができつつあります。様々な複合する課題を抱えた地域を目の当たりにして、市民による健全なまちづくり・コミュニティづくりへの参画がますます高まっているのです。

このような状況のなか、地域社会において学際的かつ総合的な取り組みにより、多様な社会的課題の解決策を策定するなど、公共マネジメントの政策形成を担える有能な人材の養成が強く求められています。

これらの社会的要請を鑑み、それぞれの地域における諸問題に対して、学際的総合的にアプローチを進め、これを解決する高度な専門的解決能力を有する人材の養成を目的とした教育演習活動を本プログラムでは展開しております。2016 年度は、プログラム全体イベントとして、群馬県沼田市をケーススタディとし当地にてフィールドワークを実施の上、沼田市長をはじめ、市の関係者との間で実地見聞と調査を元に中間報告を行い、多摩校舎に群馬県沼田市関係者をお招きして最終報告発表を行いました。

本プログラムでは、公務員志望の学生だけでなく、政界や NPO での活動を通じて地域の社会問題に積極的に関与し、問題解決に取り組んでいきたいという志の高い学生、商店街や都市の建設・インフラ整備など民間企業においても都市計画・都市運営に積極的に関与したいなど地域問題に対して高い学習意識を持っている学生のニーズにも積極的に応えていきます。

## 2. 2016 年度演習科目担当者および履修者数

| 氏名     | 所属学部   | FLP演習A(2年次) | FLP演習B(3年次) | FLP演習C(4年次) | 実施形態                   |
|--------|--------|-------------|-------------|-------------|------------------------|
| 牛嶋 仁   | 法学部    | －           | 4           | 2           | 合併（環境C、国際協力C、地域・公共B・C） |
| 工藤 裕子  | 法学部    | 6           | －           | －           | 単独（A）                  |
| 山崎 朗   | 経済学部   | 5           | －           | 5           | 単独（A・C）                |
| 斯波 照雄  | 商学部    | 10          | 7           | 8           | 単独（A） / 合併（B・C）        |
| 根本 忠宣  | 商学部    | 8           | 9           | 6           | 単独（C） / 合併（A・B）        |
| 御船 洋   | 商学部    | 16          | 13          | 8           | 単独（A・B・C）              |
| 植野 妙実子 | 理工学部   | 5           | －           | －           | 単独（A）                  |
| 新原 道信  | 文学部    | 3           | 6           | 8           | 単独（A・B・C）              |
| 黒田 絵美子 | 総合政策学部 | 6           | 16          | 6           | 単独（A・B・C）              |
| 小林 勉   | 総合政策学部 | 4           | 3           | 2           | 単独（A・B・C）              |
| 堤 和通   | 総合政策学部 | 3           | 2           | 2           | 合併（A・B・C）              |
| 細野 助博  | 総合政策学部 | 11          | 11          | 8           | 合併（A・B・C）              |
| 合計     |        | 77          | 71          | 55          |                        |

## 3. プログラムスケジュール

- 4 月 履修ガイダンス  
第一回部門授業担当者委員会
- 6 月 2017 年度募集に伴う総合ガイダンス
- 7 月 第二回部門授業担当者委員会
- 8 月 学外活動（サマースクール・沼田市）
- 10 月 2017 年度募集に伴うプログラム別ガイダンス  
学内活動（サマースクール成果報告会）
- 11 月 2017 年度募集に伴う選考試験
- 12 月 第三回部門授業担当者委員会  
学内活動（期末成果報告会）
- 3 月 FLP 修了発表  
FLP 修了証書授与

## 4. プログラムの活動

### ①サマースクール

実施日： 2016年8月23日（火）～8月25日（木）  
実施都市： 群馬県沼田市  
実施場所： 沼田市役所・他  
実施内容： 沼田市の現地調査と政策提言（沼田市役所及び他企業へのヒアリング）

### ②サマースクール成果報告会

実施日： 2016年10月22日（土）13:00～  
実施施設： 中央大学 多摩キャンパス 5203 教室  
実施内容： サマースクール参加ゼミによる成果報告

### ③期末成果報告会

実施日： 2016年12月17日（土）13:00～  
実施場所： 中央大学 多摩キャンパス 8103 教室  
実施内容： 各ゼミによる年度活動報告

## 5. 2016年度までの地域・公共マネジメントプログラム修了生の主な就職・進学先

法務省、総務省、厚生労働省、特許庁、参議院事務局、東京国税局、裁判所事務官、東京都庁、京都府庁、千葉県庁、神奈川県庁、岐阜県庁、長野県庁、新潟県庁、山梨県庁、岩手県庁、板橋区役所、江東区役所、江戸川区役所、大田区役所、北区役所、渋谷区役所、千代田区役所、練馬区役所、港区役所、多摩市役所、昭島市役所、羽村市役所、町田市役所、三鷹市役所、武蔵野市役所、渋谷市役所、蕨市役所、川崎市役所、小田原市役所、相模原市役所、横浜市役所、宇都宮市役所、松本市役所、名古屋市役所、鈴鹿市役所、堺市役所、福島県警察本部、都市再生機構、四国電力、日本銀行、ゆうちょ銀行、みずほフィナンシャルグループ、岩手銀行、北越銀行、山梨中央銀行、横浜信用金庫、明治安田生命、あいおいニッセイ同和損害保険、三井物産、ベネッセコーポレーション、マイナビ、明治乳業、鈴与、日立パワーソリューションズ、伊藤忠丸紅鉄鋼、本田技研工業、ヤンマー、NEC ソリューションイノベータ、インテリジェンス、東急コミュニティー、京成電鉄、西日本鉄道、舞浜リゾートライン、イトーヨーカ堂、セブン-イレブン・ジャパン、東京大学大学院法学政治学研究科、早稲田大学大学院法務研究科、中央大学大学院（法学研究科、文学研究科、公共政策研究科）など

## 6. 演習教育活動

### (1) 牛嶋 仁 (法学部・教授)

#### FLP 演習 B・C

##### <テーマ>

環境法政策と地域・国際協力の諸問題

##### <授業の概要>

社会における法の機能や公共政策の形成・実施等を事例により主体的に学んだ。

##### <活動内容>

対象テーマは、担当教員と相談した上で、受講者が決定し、「保育所待機児童問題」とした。

春学期は、小テーマに分類した後、文献調査と報告を繰り返し、秋学期は、上記テーマを小テーマに分類した上で、小テーマごとの報告・修正を繰り返し、合同のゼミ論文にまとめた。ゼミ論文は、2016 年度 FLP 牛嶋ゼミ・ゼミ論文集にまとめている。

## （２）工藤 裕子（法学部・教授）

### F L P 演習 A

#### <テーマ>

地域資源を活かした地域経営を考える：そのための地域資源の再発見・再評価、マネジメント

#### <授業の概要>

少子高齢化や地方分権化の中でさまざまな問題に直面している地域経営について、その地域に特有の資源（人材、財源、歴史文化、政治、地勢など）をいかに再発見し、再評価するか、さらにそれらをいかにマネジメントするか、を世界、特に大陸ヨーロッパ諸国の事例および日本の事例を通じて検討、考察する。地域経営の問題点について、文献およびフィールド調査で整理、理解したうえ、主に関係者へのヒアリングを通して日本のベストプラクティスを分析し、また海外事例の収集、調査を行う。過疎地域の再生事例として、中部イタリアの中山間都市にてワークショップ、研修を行うことを演習の一環とする他、日本の地方自治体でのフィールド調査も実施する。事例として扱うのは主に、諸資源が限定されている中小都市であり、大都市あるいは大都市圏における戦略等は対象としない。

#### <活動内容>

演習 A は、社会科学の調査方法、プレゼンテーションの仕方、レポートの書き方等を学んだ後、2016 年度は B 生および C 生がいないという変則的な年度であったため、従来とは若干異なるスケジュールを組み、夏休みに海外での実態調査を実施した。このため春学期中は、実態調査のための事前学習、調査テーマの決定、訪問先の選定、主要質問事項の確定などを行い、夏休み中の調査時にはヒアリング・インタビューを実施し、秋学期に入ってから調査後の追加質問などを実施したうえ、報告書の作成を中心に進めた。調査先へのフィードバックも重視し、政策提言等については調査先と連絡を取ってきた。

春学期の後半はまた、国外実態調査の準備と並行してサマースクールの準備をも実施した。秋学期は、国外実態調査に関する作業を進めつつ、サマースクールの中間報告、最終報告、報告書作成などの日程に合わせ、サマースクールのまとめの作業も進めた。サマースクールについては、国外実態調査の経験を活かし、観光政策に関する政策提言を行ったうえ、報告書を作成した。

#### <実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習 A

実施日：2016年8月4日（木）～ 8月15日（月）

実施都市：カスティリオーネ・イン・テヴェリーナ、チヴィテッラ・ディ・ロマーニャ他

実施施設：ファッジオーリ農場他

実施内容：EUのプロジェクト等でもよく知られるアグリツーリズム農場であるファッジオーリ農場を拠点とし、小規模自治体および私企業、大学、組合等の活動が活発なエミリア＝ロマーニャ地域の地域振興政策について、地方自治体、地域振興に関係する組合や公社、および企業家へのヒアリングおよび体験学習を通じて、調査した。

成 果：海外においてもヒアリング、インタビューを行い、本格的な調査が実施できた。特に、日本では限界集落と呼ばれるような地域においても、地産地消、観光、アグリツーリズム、スローフードなどによって活性化することが可能であることを知ることができた。地域振興政策に関連し、イタリアの都市部および地方における商業活動について、県庁および市役所に対してヒアリングを行ったほか、文化政策を含む諸政策による地域振興およびコミュニティの活性化について、複数の市役所等に対してヒアリングを行った。



対象演習：演習 A

実 施 日：2016 年 8 月 23 日（火）～ 8 月 25 日（木）

実施場所：沼田市

実施内容：沼田市訪問、ヒアリング

成 果：サマースクールは、当ゼミとしては二回目の社会調査であったため、ヒアリングの手法がかなり身に付き、そのため、事後のフォローアップについても相当部分、自主的に実施し、政策提言のために必要な事項および資料を追加調査することができた。国外実態調査の成果も踏まえ、「沼田市の観光需要の創出～ブランド力の向上と冬季の観光促進のための提言～」というテーマで調査、政策提言を行った。

### (3) 山崎 朗 (経済学部・教授)

#### FLP演習A

##### <テーマ>

インバウンド、地域資源による地域創生

##### <授業の概要>

インバウンドおよび地域資源による地域創生

##### <活動内容>

###### 1、はじめに

山崎ゼミは一年間を通して山崎先生が掲げる「急増しているインバウンドを地方分散させる方策や、地域資源を活用した地域創生策について調査・研究し、合わせて沼田市の調査と政策提言を行う」という目標を達成しようとゼミ生5名で活動してきた。まず、夏に開かれる沼田市へのサマースクールに向けて事前調査をし、各々調査結果をゼミ内で発表した。事前調査を踏まえサマースクールに臨み、政策提言した。中間報告、期末報告を経てサマースクールを終え、残りの授業で反省・振り返りを行った。下記では授業内容とサマースクールの詳細を述べる。

###### 2、授業

私たち山崎ゼミは、4月からの授業で『地域創生のデザイン』（中央経済社、山崎朗編著）を教科書とし、多様な地域戦略への理解を深めてきた。関連する文献や新聞記事なども用い、その最新の動向についても知識を深めた。第1章では人口減少によって地域創生の必要性が出てきたこと、そのひとつの手段である逆六次産業化や産業クラスターについて学んだ。第2章では官民一体となって図書館や教育を変革し、市民価値の向上を目指す佐賀県の武雄市について学んだ。第3章ではグローバル創業都市の実現によって地域創生に挑む福岡の取り組みについて学んだ。第7章では環境モデル都市・飯田における自治体とNP0と市民が連携した新たなエネルギーの自立戦略について学んだ。第8章では本社機能の一部移転やバックオフィスの設置、高品質農産品の生産などによって地域創生を図る北海道の取り組みについて学んだ。第9章では体験農園、農業SNS、農業版ビジネススクールなどの新しい農業ビジネスについて学んだ。第10章では東京に集中しすぎている本社機能の地方移転についての動きとその経済的合理性について学んだ。また同時にサマースクールの舞台となる群馬県沼田市や周辺地域の産業構造・交通・地理・人口等のデータを調査した。

長期休暇時には『新・観光立国論』（東洋経済新報社、デービット・アトキンソン著）や『東京飛ばしの地方創生』（時事通信社、山崎朗 久保隆行共著）など地域創生に関する本を読み知識を深めた。今後も『地域創生のデザイン』（中央経済社、山崎朗編著）を教科書とし、地域創生の取り組みについて理解を深めていく予定である。

###### 3、サマースクール in 沼田市での政策提言

昨年の夏には、プログラム全体で開催されるサマースクールに参加した。事前調査では開催地である群馬県沼田市の人口や産業について調べ、どのような政策提言をすべきかゼミ内で話し合った。そして、私たちは北関東で盛んな酒造りと、近年話題になっているふるさと納税に着目し、

「沼田市の地場産業における『新しい顧客の創造』というテーマで政策提言をすることにした。

現地では、沼田市役所、市内の酒造メーカーである株式会社永井本家、そして、隣村の川場村町役場を訪れ、ヒアリング調査を実施した。川場村を調査の対象にしたのは、日本酒の海外進出で話題になった永井酒造株式会社の所在地であり、また、他地域に先駆けて新事業に取り組む自治体で、今後私たちの研究にも役立つと考えたためである。各ヒアリング先では、産業や地形、ふるさと納税などについてお話を伺い、周辺のフィールドワークも行なった。それらを踏まえて、ふるさと納税による地場産業の活性化について、具体的な政策案を検討した。

そして、サマースクール最終日には、沼田市長をはじめ、市役所職員の方々の前で政策提言をした。沼田市は利根沼田地域の商業やサービスの中核都市という特徴がある。しかし、人口減少や、少子高齢化の問題が進む現状では、地域内の顧客層を対象とした事業では衰退していく可能性が高い。そこで、私たちは地域からより広い規模での「新しい顧客の創造」をねらい、その手段の一つとしてふるさと納税を選んだ。ふるさと納税とは、住民税（一部所得税）を活用した都道府県、市町村への寄付で、自己負担金額 2,000 円を除いた全額が控除の対象となり、寄付をすれば返礼品として地域の特産品や旅館の宿泊券などが貰える。これを上手く利用すれば沼田市の地域発展につながると考えた。そして、納税額をより多く集める方法として、返礼品として扱う地場産品を増やし、商品のブランド化による付加価値の創造などを提案した。また、より具体的なふるさと納税の使い道として、水源の保全やバスの整備など、地域に根ざした政策を提案した。

政策提言において、不慣れなことが多かったが、先生方やゼミの先輩方のおかげでなんとか政策をかたちにすることができた。また、ヒアリング調査やフィールドワークを通じて、現場での情報収集という重要性を知ると共に、その地域に適した政策を提案するという難しさを実感した。実際に自治体に政策提言をするというのは、とても貴重な経験であり、地域創生についてより深い興味と関心を得ることができた。今回のサマースクールを通して培うことができた知識や能力を、今後の研究に活かしていきたい。

#### 4、終わりに

一年間を通して山崎先生をはじめ先輩方の力をお借りし、なんとか活動し終えられた。来年度はサマースクールのような全体活動がないため、山崎ゼミ独自の活動になるため各ゼミ生の自主性が求められるだろう。来年度は今年度の経験を活かしよりよい活動をゼミ生全員の力を合わせて頑張りたい。



## FLP 演習 C

### <テーマ>

地域創生のデザイン

### <授業の概要>

地域創生についての研究と卒業論文の作成

### <活動内容>

山崎ゼミ C 生は、前期は就職活動および公務員試験対策のため、なかなか全員が揃ったゼミを開催できなかった。就職希望先は、山崎ゼミでのテーマと関連のある業界や役所（建設、エネルギー、不動産、倉庫、東京都庁）であったため、前期は各自業界の研究を行い、意見交換を行った。

就職活動および公務員試験が終了した後期においては、これまでの調査および学習をもとにした、個人研究と卒業論文の作成作業を開始した。まず、各自演習と関連する興味のあるテーマを設定し、そのテーマに関する文献および統計の収集と解析を行い、その後、論文のタイトル、章立てを構想し、各自何度か論文の構想を発表し、内容のブラッシュアップを行った。論文は、字数で最低 16,000 字である。

卒業論文のテーマは、小林さんが「コンバージョンと都市再生」、坂田さんが「奨学金制度と現状」、重綱さんが「団地リノベーションと地域創生」、重里さんが「公民連携と PPP・PFI」、田中君が「再生可能エネルギーと木材活用」となった。各自就職先や関心の強いテーマを選んだこともあり、積極的に関連文献の読解と論文執筆に取り組むことができた。

1 月の演習では、東京大学の鎌倉先生をお呼びして、卒業論文の内容についてのコメントをいただいた。

また、A 生へのアドバイス、及び交流も行った。とくに、卒業論文の報告会では、A 生も参加し、A 生の卒業論文作成に向けての意識を高めるいい機会となった。3 年間の FLP ゼミ活動の総まとめとしての 1 年となった。

#### (4) 斯波 照雄 (商学部・教授)

##### FLP 演習 A

###### <テーマ>

比較都市史研究

###### <演習のスケジュール>

まず4月よりE.H. カー『歴史とは何か』岩波新書、を輪読し、夏休みの沼田市におけるサマースクールに向けて、テーマを「観光戦略」と設定し、資料を集め、議論し、8月23日～25日には沼田市での現地調査、ヒアリングを行った。続いて9月より『比較都市史の旅』から、西洋の都市を選び、その都市について他の参考文献を参照して、その特徴、日本の都市との相違点について比較検討し、発表し、議論した。また、FLPゼミ3、4年生から助言、協力、指導を受けて沼田市の農業と連携した観光戦略について提言をまとめた。その内容は『FLP地域公共マネジメントプログラム「Summer School in 沼田市」『報告書』に掲載された。併せて、研究対象とする日本の都市について和歌山市を選び、資料収集を行い、2月15日～17日に現地和歌山市において調査合宿を行った。

###### <活動内容 (学内・学外・講演会等) >

FLP 演習 A ゼミでは、文献講読を通じて、歴史的な見方について学んだ上で西洋の個別都市の特徴ならびに日本の都市との相違点について比較検討を行った。それは同時に、文献を正確に読み、その内容を報告するプレゼンの力の向上を目指すものであった。さらに、沼田市におけるサマースクールに向けて資料を集め、内容について議論し、調査結果についてパワーポイントを利用して口頭発表し、文章にして提言をまとめるという実践的な学習につながった。また、和歌山市を調査都市に定め、中心市街地活性化をテーマに設定し、事前に各自の視点から資料を集め、データを分析した後、和歌山市で合宿を行い、商工会議所、市役所地域経済課、観光・国際交流課、県庁におけるヒアリングのほか、市内の中心商店街であるぶらくり丁を実際に見学し、市立図書館、県立図書館にて資料を収集した。次年度 FLP 演習 B において報告書がまとめられる予定である。

###### ・国内実態調査 A 演習

実施日： 2017年2月15日(水)～2月17日(金)

実施場所： 和歌山商工会議所、和歌山市役所、和歌山県庁

実施内容： 和歌山市の中心市街地活性化に関する実態調査

成果： 次年度演習 B において報告書を作成



和歌山県庁前

## FLP演習B・C

### <テーマ>

比較都市史研究

### <演習のスケジュール>

2016年度前期には、3年生(FLP演習B)は2年次春休みの松山市合宿において行った市役所、商工会議所等でのヒアリング内容、収集したデータ、資料の整理を行い、それらを分析して、松山市の農業、工業、商業、雇用、観光についての各レポートをまとめた。レポートを仕上げていく過程では、各自のまとめている内容についての口頭発表を行い、各自修正を繰り返しながら、12月に全体報告書を作成し、2月には松山市についての冊子『共同研究報告書』を完成させた。

4年生(FLP演習C)は、前期には3年生が春休みに調査合宿を行った松山市に関するテーマ別レポート作成に助言し、協力するとともに、各ゼミ生はそれぞれが研究対象とする都市ならびにテーマを決定した。各自が設定したテーマに基づいて、資料収集、データを分析し、口頭発表を行い、2月にFLPゼミの卒業論文集を完成させた。また、4年生は、和歌山市における実態調査に向けての準備過程から助言、協力し、2月の現地調査合宿にも参加して、2年生(FLP演習A)のヒアリングや資料調査等に協力した。

### <活動内容（学内・学外・講演会等）>

演習B、Cともに個人指導を基本として、作成過程において随時口頭発表を行いながら文章にまとめ、添削、修正を繰り返しながらそれぞれレポート、論文をまとめた。

2016年度FLP演習Bゼミ生は、沼田市で行われたサマースクールにおいて演習Aゼミ生を助言、協力、指導するとともに、国内実態調査を行った松山市についての報告書冊子『中央大学FLPス波ゼミ共同研究報告書—松山市について—』を作成した。

2016年度FLP演習Cゼミ生は、和歌山市における中心市街地活性化に関する実態調査に向けての準備過程、調査合宿に際し、2年生(FLP演習A)ゼミ生に助言、協力し、実際に合宿にも参加した。それとともにゼミ生それぞれが研究対象に決定した都市、武蔵野市、福島市、松本市、小諸市、昭島市、ならびに横浜市の中区についてテーマを設定して各自卒論を完成させ、『2016年度FLPス波ゼミ卒業論文集』を作成した。

### ・国内実態調査 C演習

実施日： 2017年2月15日（水）～2月17日（金）

実施場所： 和歌山商工会議所、和歌山市役所、和歌山県庁

実施内容： 和歌山市の中心市街地活性化に関する実態調査

成果： 次年度演習Bにおいて報告書を作成

(5) 根本 忠宣 (商学部・教授)

FLP演習A・B

<テーマ>

地域における雇用創出について考える

<授業の概要>

【共通】

地域における雇用の場に着目して、地域発展を支えるための雇用創出の可能性について徹底的に考える。具体的には、以下の点に着目して学習を深めていく。

- 自己雇用の場としての商店
- 地域経済における中小企業の役割
- 創業の場としての地域
- 地域経済発展におけるイノベーションの役割
- 地域コミュニティとソーシャルビジネス
- 地域経済の発展を支えるインフラとしての金融、行政

【A生】

サマースクールへの参加と報告書の作成

【B生】

- ・伊東市活性化プロジェクトへの参加と提案企画書の作成
- ・ゼミ交流会への参加と報告書の作成

<活動内容>

【A生】

- ・文献輪読
- ・サマースクールへの参加（群馬県沼田市）と報告書の作成
- ・橋本商店街プロジェクトへの参加（B・C生と合同）

【B生】

- ・文献輪読（A生と合同）
- ・伊東市活性化プロジェクト（伊東 湯のまちバル）実行委員会への参加、学生企画（クイズラリー）の考案・実施・運営、報告書の作成
- ・ゼミ交流会への参加
- ・橋本商店街プロジェクトへの参加（A・C生と合同）

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習B

実施日：2016年6月24日（金）

実施都市：静岡県伊東市

実施施設：和家

実施内容：「第6回 伊東湯のまちバル」開催に際する打ち合わせ

成 果：バルの運営・予算等についての打ち合わせを行った。その中でも「学生企画の方向性についての議論をメインに話し合った。学生企画に際する議論を直接行ったことで、実行委員会のメンバーから数多くの意見を頂戴することができた為、学生企画の方向性やバルに対する今後の意識のあり方を改めて見直すことができた。

対象演習：演習A

実 施 日：2016年8月3日（水）～8月4日（木）

実施都市：岐阜県岐阜市

実施施設：全国農業協同組合連合会 岐阜県本部

実施内容：沼田市で農業塾を開くという政策提言の詳細を詰める為、岐阜県トマト農業塾を開講した経緯・内容・成果・課題をヒアリングした。

成 果：岐阜県トマト農業塾は確かに成功をおさめていたが、その背景には良好な立地条件、開講主体の密な協力関係等、良好な環境があると判明した。また、農業塾開講主体も受講主体も共に莫大な資金力を要するということが分かり、沼田市で農業塾を開くという企画の実現可能性に揺らぎが生じた。その結果、農業塾以外の政策提言の可能性について検討する必要があることに気付くことができた。

対象演習：演習B

実 施 日：2016年8月3日（水）

実施都市：静岡県伊東市

実施施設：和家

実施内容：「第6回 伊東湯のまちバル」打ち合わせ

成 果：予算・広報活動・学生企画をメインテーマとして打ち合わせを行った。学生企画についての大筋が確定した為、今後のゼミナール活動で行うべき方向性を定めることが出来た。

対象演習：演習A・C

実 施 日：2016年8月6日（土）

実施都市：神奈川県相模原市

実施施設：橋本商店街

実施内容：橋本七夕まつりの受付及び運営補助・ヒアリング調査

成 果：実際にまつり運営に準備段階から関わることによって、文献を読むことだけでは学べない現場のリアルを知ることができた。例えば、ボランティア学生の人数が足りず装飾の準備が終わらなかったことや、役員同士の意思疎通が取れていないといった課題に気付き、それを改善するためのプロセスなどを考案できるようになった。

対象演習：演習B・C

実施日：2016年10月14日（金）

実施都市：東京都府中市

実施施設：東京自治会館

実施内容：「〈多摩地域行政連携事業〉政策スクール」への参加

成果：行政・民間企業・学生というバックグラウンドを異にする方々とワークショップ形式で意見を交換することで、実務的な知識や新たな視点に気付くことができた。ワークショップのテーマは「多摩の魅力を引き出すファシリティ・マネジメントとは？」であったが、特に市役所の方々の意見が各市によって異なっており、興味深いと感じた。

対象演習：演習B

実施日：2016年10月17日（月）

実施都市：静岡県伊東市

実施施設：伊東商工会議所

実施内容：「第6回 伊東湯のまちバル」配布資料仕分け・参加店舗への資料配達

成果：実行委員会のメンバーの方々と共に配布資料仕分け作業を行い、バル参加店舗に配布に行ったため、「共同作業を行っている」という連帯感が生まれ、より深いコミュニケーションを取ることが出来た。実際にバル参加店舗に赴くことで、参加する店舗の雰囲気を一部ながら知ることができた為、バル実行委員会メンバーとしての意識が高まった。

対象演習：演習A・B・C

実施日：2016年10月29日（土）

実施都市：神奈川県相模原市

実施施設：橋本商店街

実施内容：橋本商店街子どもハロウィンフェスティバル&ハロウィンナイトの事前準備・ヒアリング調査

成果：商店街組合事務局の職員から直接、まちおこし行事を実施するにあたっての困難ややりがい、成果などを伺うことができた。人間関係の構築や維持が大切だということを知り、ABC生共に視野を広く持つことができるようになったと考えている。事前準備に関しては装飾作りなどを行ったが、やはり手間や時間が掛かることを実感した。

対象演習：演習A・B・C

実施日：2016年11月1日（火）

実施都市：神奈川県相模原市

実施施設：橋本商店街事務局

実施内容：商店街事務局職員に対するヒアリング調査及び意見交換会

成果：A生全員を連れてじっくりとヒアリング調査を行ったことで、商店街経営やまちおこ

しに対する共通の認識を持つことができた。実際に商店街で行われている取り組みやその実施にまつわる苦悩を職員から直接聞き、その後のゼミ活動などでは地域活性化の具体的なイメージをしやすくなった。

対象演習：演習B・C

実施日：2016年11月3日（木）～11月4日（金）

実施都市：静岡県伊東市

実施施設：和家

実施内容：「第6回 伊東 湯のまちバル」運営参加・学生企画実施

成果：実際にバルの運営に参加し、チケット販売やアンケート調査、学生企画（クイズラリー）を行った。実際に街おこしイベントに当事者として関わったことで、参加者という立場では気付くことが出来なかったポイントや課題を知ることが出来た。クイズラリーは湯のまちバルでは初の試みであったが、景品が完売になったり、アンケート調査での満足度も高かったことから、イベント実施に対する参加者のニーズの高さを知ることが出来た。

対象演習：演習B

実施日：2016年11月9日（水）～11月12日（土）

実施都市：熊本県宇城市

実施施設：小川町風の館塩屋

実施内容：町民から多くの古本を寄贈して頂き、住民がいなくなってしまった古民家に頂いた古本を並べ、古本屋をオープンさせた。

成果：オープン後には熊本市内からの観光ツアーの一部に組み込んで頂いたり、地元の方々に利用して頂いた。住民がいなくなった古民家を活用できただけでなく、地域の方々の憩いの場・話し合いの場として利用して頂くことに成功した。

対象演習：演習A・C

実施日：2016年11月23日（水）

実施都市：神奈川県相模原市

実施施設：橋本商店街組合事務局

実施内容：橋本商店街西の市の受付及び運営補助・ヒアリング調査

成果：地域の高齢者が代々運営を担当している行事に携わったことによって、地域文化の高齢化による影響を身をもって知ることができた。伝統的な地域行事であってもその担い手がいなくなってしまうと継承されない。運営の方々がどのような想いで酉の市を実施しているのかを知り、地域行事の継承には何が必要なのか、ゼミ生同士で考える良いきっかけとなった。



対象演習：演習B

実施日：2016年11月25日（金）

実施都市：静岡県伊東市

実施施設：伊東商工会議所

実施内容：「第6回 伊東湯のまちバル」反省会

成果：バル直後に反省会を行うことで、記憶が新しい内に様々な反省点を洗い出すことが出来た。また、反省点が見えたことから、来年度の開催に向けた姿勢を定めることが出来た。

対象演習：演習A・B・C

実施日：2016年12月4日（日）

実施都市：静岡県伊東市

実施施設：山茶花

実施内容：「第6回 伊東湯のまちバル」参加店舗・実行委員会合同打ち上げ

成果：参加店舗並びに実行委員会の方々と労をねぎらい、コミュニケーションを取ることができた為、次回以降のバル参加に向けて良好な関係が構築できた。また、反省点等も共有することができた為、我々が実行委員会に参加する姿勢を見つめなおすことが出来た。

対象演習：演習A・B・C

実施日：2016年12月6日（火）

実施都市：神奈川県相模原市

実施施設：橋本商店街

実施内容：橋本商店街西の市反省会・ヒアリング調査

成果：橋本商店街で行われた西の市の反省会に参加したことで、実施した行事の反省を次に活かすプロセスを知ることができた。「これはこういうものだから仕方がない」という思考ではなく、常に改善を繰り返して毎年少しでも良い行事を実施していくことが大切である。当日はただ反省会を行うだけではなく、橋本商店街の歴史やまちづくりに対する見解を老舗店舗のオーナーから伺うことができた。新しい取り組みを始める前に過去の失敗を見直すことで、緻密な計画を立てることが可能だと知り、今後のゼミ活動にもプラスになると考えた。

対象演習：演習B・C

実施日：2016年12月11日（日）

実施都市：東京都立川市

実施施設：たましんR I S U R Uホール

実施内容：「立川市 市長と語ろう！ 大学生世代ミーティング」への参加

成果：立川市長と実際に対談し、立川市のみならず行政全般に関する質問を行った。実際に

行政のトップの立場の方と対談させて頂いたことで、市政に対する知見や地域創生に関する観点が広がった。

## FLP演習C

### <テーマ>

地域に関する研究論文の作成

### <授業の概要>

卒業論文の作成

### <活動内容>

- ・卒業論文の中間・最終報告（対A・B生）
- ・橋本商店街プロジェクトへの参加（A・B生と合同）

### <実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習A・C

実施日：2016年8月6日（土）

実施都市：神奈川県相模原市

実施施設：橋本商店街

実施内容：橋本七夕まつりの受付及び運営補助・ヒアリング調査

成果：実際にまつり運営に準備段階から関わることによって、文献を読むことだけでは学ぶことのできない現場のリアルを知ることができた。例えば、ボランティア学生の人数が足りず装飾の準備が終わらなかったことや、役員同士の意思疎通が取れていないといった課題に気付き、それを改善するためのプロセスなどを考案できるようになった。

対象演習：演習C

実施日：2016年10月16日（日）

実施都市：神奈川県相模原市

実施施設：橋本商店街

実施内容：橋本商店街子どもハロウィンフェスティバルの事前受付及び運営補助・ヒアリング調査

成果：商店街行事の準備に携わることによって、まちおこしに必要な地域の人々の頑張りを知ることができた。また、当日は運営の不手際や予想外の事態が起き、客としてやってきた人々にお叱りやクレームをいただく場面が多々あった。普段のゼミ活動では経験し得ないこのようなことは、今後私たち学生がまちおこしに関する政策提言などをする時に大いに参考になると思う。そして、常にリスクを考えその打開策を事前に用意しておくことが必要だと知った。

対象演習：演習A・B・C

実施日：2016年10月29日（土）

実施都市：神奈川県相模原市

実施施設：橋本商店街

実施内容：橋本商店街子どもハロウィンフェスティバル&ハロウィンナイトの事前準備・ヒアリング調査

成 果：商店街組合事務局の職員から直接、まちおこし行事を実施するにあたっての困難ややりがい、成果などを伺うことができた。人間関係の構築や維持が大切だということを知り、ABC生共に視野を広く持つことができるようになったと考えている。事前準備に関しては装飾作りなどを行ったが、やはり手間や時間が掛かることを実感した。

対象演習：演習A・B・C

実施日：2016年11月1日（火）

実施都市：神奈川県相模原市

実施施設：橋本商店街事務局

実施内容：商店街事務局職員に対するヒアリング調査及び意見交換会

成 果：A生全員を連れてじっくりとヒアリング調査を行ったことで、商店街経営やまちおこしに対する共通の認識を持つことができた。実際に商店街で行われている取り組みやその実施にまつわる苦悩を職員から直接聞き、その後のゼミ活動などでは地域活性化の具体的なイメージをしやすくなった。

対象演習：演習A・C

実施日：2016年11月23日（水）

実施都市：神奈川県相模原市

実施施設：橋本商店街組合事務局

実施内容：橋本商店街西の市の受付及び運営補助・ヒアリング調査

成 果：地域の高齢者が代々運営を担当している行事に携わったことによって、地域文化の高齢化による影響を身をもって知ることができた。伝統的な地域行事であってもその担い手がいなくなってしまうと継承されない。運営の方々がどのような想いで西の市を実施しているのかを知り、地域行事の継承には何が必要なのか、ゼミ生同士で考える良いきっかけとなった。

対象演習：演習A・B・C

実施日：2016年12月6日（火）

実施都市：神奈川県相模原市

実施施設：橋本商店街

実施内容：橋本商店街西の市反省会・ヒアリング調査

成 果：橋本商店街で行われた西の市の反省会に参加したことで、実施した行事の反省を次に活かすプロセスを知ることができた。「これはこういうものだから仕方がない」という思考ではなく、常に改善を繰り返して毎年少しでも良い行事を実施していくことが大切である。当日はただ反省会を行うだけではなく、橋本商店街の歴史やまちづくりに

対する見解を老舗店舗のオーナーから伺うことができた。新しい取り組みを始める前に過去の失敗を見直すことで、緻密な計画を立てることが可能だと知り、今後のゼミ活動にもプラスになると考えた。

## （６）御船 洋（商学部・教授）

### FLP演習A

#### <テーマ>

地域経営と地方財政

#### <授業の概要>

地方財政や地方分権の意義を理解するには理論と制度の両方を学ぶ必要がある。現代の地方財政論は応用経済学（公共経済学）としての性格が強まっており、したがって地方財政論の分析ツールは経済学（とくにミクロ経済学）である。経済学には、事実や論理的帰結を追究する実証的（事実発見的）経済学と、価値判断を導入して経済現象や政策・制度を評価する規範的経済学があるが、地方財政理論においても、この両者のアプローチが用いられる。とくに地方財政の評価をする際の基準として重要なのが「効率性」と「公平性」である。地方財政における「効率性」基準とは、ある事業を実施する際の「便益」と「費用」を比較し、「純便益」（＝便益－費用）がプラスにならないものはどんなに事業内容が素晴らしいものであっても採用せず、「純便益」の大きい方から実施するべしと判断する基準である。また、地方財政における「公平性」基準とは、事業コストの負担をできるだけ公平に求めるべきだとする基準である。

本演習では、地方財政の理論や制度を学んだ後に、具体的な地方自治体の財政運営の評価を行うことを研究の中心に据えるが、その際、上記２つの基準に基づく考え方が徹底的に身に着くような学習方法を取る。

#### <活動内容>

事実上の活動開始時期は（前年度末の）2016年3月であった。新A生（1年生）はFLP御船ゼミの春合宿（2016年3月22日～3月24日）に参加し、新潟県湯沢町役場におけるヒアリングに同席した。

演習Aでは、年間を通じて地方財政論の基礎を学ぶという方針の下、基本テキストの輪読を行った。テキスト輪読の際は、履修者が全員初学者であることを考慮して、基本的な概念、用語、理論等については、教員ができる限り丁寧に解説をし、全員がきちんと理解したうえで次に進むという方針を貫いた。テキストは、兼村高文・星野泉著『自治体財政がよくわかる本』（イマジン出版、2014年刊）を使用した。

前期途中からはサマースクールの準備に取り掛かり、B生の指導を仰ぎながら、沼田市の財政に関する調査研究を行い、事前質問表を作成した。

後期には、はじめに、サマースクールの成果報告会に向けて、ヒアリング内容のまとめ、報告用原稿の準備、パワーポイント用スライドの作成、プレゼンテーションの練習等を行った。成果報告会終了後は、最終報告書のための原稿作成、相互チェック等を行い、さらには、期末報告会に向けた準備を行った。

演習Aでは、地方財政や地方分権、さらには安倍政権による「地方創生」の実際の動きを常にフォローし、現在どういう問題が起きているかということをゼミ生全員で共有するために、毎月1回、担当者を決めて「ニュース報告」を行ってもらい、ホットな話題について全員で議論する

機会を設けた。

#### <実態調査>

対象演習：演習 A・B・C

実施日：2016年8月23日（火）～8月25日（木）（サマースクール）

実施都市：群馬県沼田市

実施施設：沼田市役所

実施内容：「沼田市の財政分析」というテーマの下、市役所所管課のヒアリングおよび市内の視察を行った。

成果：当ゼミには、事前に沼田市役所から「沼田市の財政分析」を行ってほしいとの要請があったので、「決算カード」等を利用して、沼田市の財政運営の問題点をあらかじめ把握し、それをゼミ生同士で共有したうえでヒアリングに臨んだ。沼田市の場合、類似団体と比較しても県内の他の自治体と比較しても経常収支比率が高い点が課題であったが、ヒアリングの結果、その対策として2か所ある清掃工場のうち、1か所に統合する方が、コスト面と環境面の改善の両方にメリットがあることがわかり、具体的なシミュレーション結果を付して沼田市に提言した。

#### <実態調査>

対象演習：演習 A・B・C

実施日：2017年3月15日（水）～3月17日（金）

実施都市：福島県いわき市

実施施設：いわき市役所

実施内容：「いわき市の財政分析」というテーマの下、市役所所管課のヒアリングおよび市内の視察を行った。

成果：いわき市財政課を訪れ、ヒアリングを行った。「財政」「観光」「福祉」「その他公営事業等」の4分野に関する25項目の質問事項を事前に送り、当日のヒアリングは、それへの回答および補足説明という形で進められた。とくに東日本大震災の復興事業の現状について詳しく聞くことができたので、大変勉強になった。

#### <講演会>

対象演習：演習 A・B・C

実施日：2016年6月21日（火）5時限目（16：40～18：10）

講演者：河村 のり子 氏（厚生労働省派遣・有期労働対策部民間人材サービス推進室長）

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 5号館 5403 教室

演題：日本社会が抱える「働き方」の問題

成果：人口減少・少子高齢化の進行と日本人の働き方の関係、労働力人口の将来予測等、マクロ的な全体像が示された後、今後の課題として、①女性の活躍、②長時間労働、③非正規労働について、データに基づき詳細な説明があった。そして、日本的雇用慣行の

改良こそが少子化対策になるとともに、労働力人口減少下の経済成長を進めるための  
キーポイントとなることが主張された。女性官僚としての経験談を随所に織り込んで  
話をしてくださったので大変興味深く聞くことができた。

<講演会>

対象演習：演習 A・B・C

実 施 日：2016 年 11 月 22 日（火）5 時限目（16：40～18：10）

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 5 号館 5409 教室

演 題：八王子市における行財政改革

講 演 者：田倉 洋一 氏（八王子市行財政改革部行政管理課長）

高嶋 秀樹 氏（同 課長補佐）

小林 健次 氏（同 主査）

成 果：八王子市は 2015 年 4 月に中核市に移行したが、移行前と後とで、市の行財政運営は  
どのように変化したか、といった点を中心に、市がこれまでに推進してきた行財政改革  
の内容、現在進行中の第 8 次行財政改革（2014～2018 年度）のねらいやポイントに  
ついて説明があった。さらに、事務事業評価や新地方公会計、公共施設マネジメントの  
現状と今後の展望等についても、興味深い話を聞きくことができた。



## F L P 演習 B

### <テーマ>

地域経営と地方財政

### <授業の概要>

地方財政や地方分権の現状はどうなっているのか、現段階における課題は何か、課題解決に向けた方策にはどのようなものが考えられるか、といった点を問題意識として共有し、地方財政や地方分権の今後のあり方について検討した。また、地方財政の再建や地方分権の一層の推進は、地域経済の活性化と不可分の関係にあるので、地域の経済発展を促すにはどのような方法があるかについても分析視野に入れて議論した。

加えて、昨今の少子高齢化、グローバル化、地域間格差、貧困、雇用の悪化、都心部の衰退、山間部の限界集落の増大等々の変化は、地方財政運営の根底を揺るがす重要な要因になっている。この授業では、このような問題をひとつひとつ取り上げながら、地方財政のあり方、国と地方の役割分担、公と民の役割分担等について考察した。

### <活動内容>

演習 B では、演習 A で学んだ地方財政に関する基本的な概念、用語、理論を実際の分析に生かすべく、地方自治体の行財政運営に関する実態調査を踏まえた財政分析を積極的に行った。

前期の前半には、2015 年度末（2016 年 3 月 22 日～3 月 24 日）に新潟県湯沢町役場で実施したヒアリング調査をもとに、報告書の作成を行い、湯沢町に送付した。前期の後半には、夏休み期間中（9 月 12 日～9 月 14 日）に行う徳島県上勝町役場のヒアリング調査に関する事前調査および質問表の作成を行った。併せて、サマースクール（群馬県沼田市、8 月 23 日～8 月 25 日）に向けて A 生に対する助言や指導を行った。

後期の前半には、上記上勝町で行ったヒアリング調査をもとに、報告書を作成し、上勝町に送付した。加えて、後期の後半の 11 月 22 日に、八王子市行政管理課の方を講師に招いて講演会を行ったが、それに向けて八王子市財政に関する事前調査と質問表の作成を行うとともに、講演会終了後には、講演会を振り返り、意見や感想を文書にまとめ、講演者に送付した。さらに、12 月 20 日には、立川市役所においてヒアリング調査を行ったが、これについても、事前調査、質問表の作成・送付を行い、ヒアリング調査後には政策提言を含む調査報告書を作成し、立川市に送付した。

以上の活動に加え、演習 B では、地方財政や地方分権の実際の動きを常にフォローし、現在どういう問題が起きているかということをゼミ生全員で共有するために、毎月 1 回、担当者を決めて「ニュース報告」を行ってもらい、それについて全員で議論する機会を設けた。

### <実態調査>

対象演習：演習 A・B・C

実施日：2016年8月23日（火）～ 8月25日（木）（サマースクール）

実施都市：群馬県沼田市

実施施設：沼田市役所

実施内容：「沼田市の財政分析」というテーマの下、市役所所管課のヒアリングおよび市内の視察を行った。

成 果：当ゼミには、事前に沼田市役所から「沼田市の財政分析」を行ってほしいとの要請があったので、「決算カード」等を利用して、沼田市の財政運営の問題点をあらかじめ把握し、それをゼミ生同士で共有したうえでヒアリングに臨んだ。沼田市の場合、類似団体と比較しても県内の他の自治体と比較しても経常収支比率が高い点が課題であったが、ヒアリングの結果、その対策として2か所ある清掃工場のうち、1か所に統合する方が、コスト面と環境面の改善の両方にメリットがあることがわかり、具体的なシミュレーション結果を付して沼田市に提言した。

#### <実態調査>

対象演習：演習A・B・C

実 施 日：2017年3月15日（水）～ 3月17日（金）

実施都市：福島県いわき市

実施施設：いわき市役所

実施内容：「いわき市の財政分析」というテーマの下、市役所所管課のヒアリングおよび市内の視察を行った。

成 果：いわき市財政課を訪れ、ヒアリングを行った。「財政」「観光」「福祉」「その他公営事業等」の4分野に関する25項目の質問事項を事前に送り、当日のヒアリングは、それへの回答および補足説明という形で進められた。とくに東日本大震災の復興事業の現状について詳しく聞くことができたので、大変勉強になった。

#### <実態調査>

対象演習：演習B

実 施 日：2016年9月12日（月）～ 9月14日（水）

実施都市：徳島県上勝町

実施施設：徳島県上勝町役場

実施内容：いわゆる「葉っぱビジネス」と「ゼロ・ウェイスト」政策で全国的に注目されている徳島県上勝町を訪問し、町の現状と課題についてヒアリング調査を行った。

成 果：人口減少、高齢化、過疎という状況下にあって、上勝町は町の再生にどのように取り組んできたのかについて、「葉っぱビジネス」「ゼロ・ウェイスト」政策を中心にヒアリングと視察を行った。その結果、「葉っぱビジネス」は高齢者の経済的支援や生きがいにも多大な効果をもたらす新しいビジネスモデルであること、物の無駄遣いをせずにリサイクル・リユースを徹底的に進める「ゼロ・ウェイスト」政策は、究極のエコ対策として画期的な施策であることがわかった。その一方で、「葉っぱビジネス」を運営する第三セクターが赤字経営や後継者不足に悩んでいること、高齢社会におけ

る「ゼロ・ウェイスト」政策の徹底は容易ではないこと等が明らかとなった。

#### <実態調査>

対象演習：演習 B

実施日：2016 年 12 月 20 日（火）9：00 ～ 11：00

実施都市：東京都立川市

実施施設：立川市役所

実施内容：「立川市の財政分析」というテーマの下、市役所行政経営課と財政課のヒアリングおよび市内の視察を行った。

成果：事前に「財政（行政経営）」「コミュニティ」「子ども・学び・文化」「環境・安全」「都市基盤・産業」「福祉・保険」の 6 分野に関する合計 50 項目以上の質問を提出し、当日のヒアリングでは、質問に対する回答及び補足説明を受け、意見交換を行った。それを踏まえて作成した報告書では、立川市の再開発事業とフィルムコミッション事業をうまく組み合わせること、自治会の再活性化に向けて行政が積極的に活動することを提言したほか、災害発生時の広報、消費者トラブルへの対応、下水設備の改修等についても改善策を提示した。

#### <講演会>

対象演習：演習 A・B・C

実施日：2016 年 6 月 21 日（火）5 時限目（16：40～18：10）

講演者：河村 のり子 氏（厚生労働省派遣・有期労働対策部民間人材サービス推進室長）

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 5 号館 5403 教室

演題：日本社会が抱える「働き方」の問題

成果：人口減少・少子高齢化の進行と日本人の働き方の関係、労働力人口の将来予測等、マクロ的な全体像が示された後、今後の課題として、①女性の活躍、②長時間労働、③非正規労働について、データに基づき詳細な説明があった。そして、日本的雇用慣行の改良こそが少子化対策になるとともに、労働力人口減少下の経済成長を進めるためのキーポイントとなることが主張された。女性官僚としての経験談を随所に織り込んで話をしてくださったので大変興味深く聞くことができた。

#### <講演会>

対象演習：演習 A・B・C

実施日：2016 年 11 月 22 日（火）5 時限目（16：40～18：10）

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 5 号館 5409 教室

演題：八王子市における行財政改革

講演者：田倉 洋一 氏（八王子市行財政改革部行政管理課長）

高嶋 秀樹 氏（同 課長補佐）

小林 健次 氏（同 主査）

成 果：八王子市は2015年4月に中核市に移行したが、移行前と後とで、市の行財政運営はどのように変化したか、といった点を中心に、市がこれまでに推進してきた行財政改革の内容、現在進行中の第8次行財政改革（2014～2018年度）のねらいやポイントについて説明があった。さらに、事務事業評価や新地方公会計、公共施設マネジメントの現状と今後の展望等についても、興味深い話を聞くことができた。

## F L P 演習 C

### <テーマ>

地域経営と地方財政

### <授業の概要>

各自、研究テーマを決め、研究内容および論文構成を検討し明確化したうえで、計画に沿って資料収集や分析等の準備を進めていき、4年修了時の卒業論文の完成を目指した。

### <活動内容>

演習 C では、毎回、ゼミ生が卒業論文の中間報告を行い、その報告をめぐってゼミ生全員で議論し、質疑応答や意見交換を行うことを通じて、論文内容の改善や修正に役立てた。そして期末に卒業論文を完成させ、それらを編集して論文集を作成した。

### <実態調査>

対象演習：演習 A・B・C

実施日：2016年8月23日（火）～8月25日（木）（サマースクール）

実施都市：群馬県沼田市

実施施設：沼田市役所

実施内容：「沼田市の財政分析」というテーマの下、市役所所管課のヒアリングおよび市内の視察を行った。

成果：当ゼミには、事前に沼田市役所から「沼田市の財政分析」を行ってほしいとの要請があったので、「決算カード」等を利用して、沼田市の財政運営の問題点をあらかじめ把握し、それをゼミ生同士で共有したうえでヒアリングに臨んだ。沼田市の場合、類似団体と比較しても県内の他の自治体と比較しても経常収支比率が高い点が課題であったが、ヒアリングの結果、その対策として2か所ある清掃工場のうち、1か所に統合する方が、コスト面と環境面の改善の両方にメリットがあることがわかり、具体的なシミュレーション結果を付して沼田市に提言した。

### <実態調査>

対象演習：演習 A・B・C

実施日：2017年3月15日（水）～3月17日（金）

実施都市：福島県いわき市

実施施設：いわき市役所

実施内容：「いわき市の財政分析」というテーマの下、市役所所管課のヒアリングおよび市内の視察を行った。

成果：いわき市財政課を訪れ、ヒアリングを行った。「財政」「観光」「福祉」「その他公営事業等」の4分野に関する25項目の質問事項を事前に送り、当日のヒアリングは、それへの回答および補足説明という形で進められた。とくに東日本大震災の復興事業の現

状について詳しく聞くことができたので、大変勉強になった。

<講演会>

対象演習：演習 A・B・C

実施日：2016 年 6 月 21 日（火）5 時限目（16：40～18：10）

講演者：河村 のり子 氏（厚生労働省派遣・有期労働対策部民間人材サービス推進室長）

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 5 号館 5403 教室

演 題：日本社会が抱える「働き方」の問題

成 果：人口減少・少子高齢化の進行と日本人の働き方の関係、労働力人口の将来予測等、マクロ的な全体像が示された後、今後の課題として、①女性の活躍、②長時間労働、③非正規労働について、データに基づき詳細な説明があった。そして、日本的雇用慣行の改良こそが少子化対策になるとともに、労働力人口減少下の経済成長を進めるためのキーポイントとなることが主張された。女性官僚としての経験談を随所に織り込んで話をしてくださったので大変興味深く聞くことができた。

<講演会>

対象演習：演習 A・B・C

実施日：2016 年 11 月 22 日（火）5 時限目（16：40～18：10）

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 5 号館 5409 教室

演 題：八王子市における行財政改革

講演者：田倉 洋一 氏（八王子市行財政改革部行政管理課長）

高嶋 秀樹 氏（同 課長補佐）

小林 健次 氏（同 主査）

成 果：八王子市は 2015 年 4 月に中核市に移行したが、移行前と後とで、市の行財政運営はどのように変化したか、といった点を中心に、市がこれまでに推進してきた行財政改革の内容、現在進行中の第 8 次行財政改革（2014～2018 年度）のねらいやポイントについて説明があった。さらに、事務事業評価や新地方公会計、公共施設マネジメントの現状と今後の展望等についても、興味深い話を聞きくことができた。

## （７）植野 妙実子（理工学部・教授）

### FLP演習A

#### <テーマ>

男女共同参画社会の推進-少子化克服とともに考える

#### <授業の概要>

2014年の出生率は1.42となり前年より降下した。生まれる子どもの数も1973年に209万人、現在は100万人以下となっている。日本の人口は2008年の1億2808万人をピークに減少となっている。2060年の人口は8000万人になると推計されている。少子化は先進国に共通の問題とされているが、フランスのように克服した国もある。しかもフランスやヨーロッパではジェンダー・メイン・ストリームという考え方をとりながら少子化を克服している。日本の場合は、結婚、出産に対する価値観の変化や養育コストの増大などが少子化の原因とされている。

他方でいまだに男女の役割分担意識が強く、子育ては女性の仕事という考えも根強い。子どもの数や子育て世代の人口が減るとそれに伴って社会構造も変化する。小児科医のなり手が少なくなる、学校の統廃合が進むなど、子どもを育てることの難しい環境がますます進む。子どもを産み育てようという意欲自体もうすらぐ。少子高齢社会の最大の問題点は、労働力が少なくなる一方で、高齢者が増え、様々な対策（年金や医療費など）が必要になる事である。少子化の問題は、女性が働き続けて晩婚化が進むことが原因といわれることがある。

しかし、女性も男性と同様にもっている能力を生かして社会で活躍するのは当然である。フランスでは女性の社会進出を支える政策を次々と生み出しながら、同時に少子化も克服した。そうした例に学びながら、少子化を克服しつつ真の男女平等社会をどのように確立したらよいかを考える。

なお、演習の柱は、基本事項に関する講義、受講生の実態調査の準備と実行、調査報告書の作成、プレゼンテーションである。

#### <活動内容>

2016年度、植野ゼミは、基本事項を文献で読んで確認する、沼田市におけるサマースクールでの調査研究の準備、その実行、沼田市の調査研究結果の分析、調査研究結果をまとめることに力を注いだ。

まず、文献としては、『論争 日本のワーク・ライフ・バランス』日本経済出版社 2008年などを読んで、ワーク・ライフ・バランスがどのような認識をもって進められてきたかを確認した。その上で、沼田市の調査研究の際にどこに重点を置いて調査研究するのか考え、質問表の作成などを行った。ワーク・ライフ・バランスとは「国民一人ひとりがやりがいや充実感を感じながら働き、仕事上の責任を果たすとともに、家庭や地域生活などにおいても、子育て期、中高年期といった人生の各段階に応じて多様な生き方が選択・実現できる社会」と内閣府は定義する。しかし、これは単に仕事と生活を同じ程度に重視するとか、バランスをとるとかということではなく、多様な働き方が選択できることであり、仕事と生活の調和を図って充実した人生を男女がともに過ごせることが目的である。とりわけ日本では、「男は仕事、女は家庭」と

いう役割分担が強く根付いていて、男性も女性もともに社会的責任、家庭的責任をはたして、活躍する、ということが根付いていない。しかし、実際は今日では女性の社会進出等も多く見られ、勤労者世帯の過半数が共働きとなっている。そのため男性も積極的に育児へ参加し、仕事と子育てを両立させることが重要となっている。しかし働き方や子育て支援などの社会的基盤は従来のままであり、職場や家庭、地域といったところに男女の固定的な役割分担意識が残ってしまっている。その結果、結婚や子育てに関する人々の希望を実現しにくいものとなり少子化の一因に、また働き方の選択肢が限定されてしまい女性や高齢者等の多様な人材を活かされにくくなっている。ほかにも、企業間競争の激化等により正社員以外の労働者の大幅な増加、正社員の長時間労働という現象も見られる。経済的に自立できない、家族の団らんをもてない層も増えている。日本の現状を打開するためにもワーク・ライフ・バランスは注目されている。他方で、欧米諸国ではワーク・ライフ・バランスの取り組みが進んでいるが、特徴的なのは、ジェンダー・メイン・ストリームという考え方である。すなわち、男女平等を中心に据えて取り組んでいる。これに対し、日本は経済的発展に役に立つという観点から進められている。フランスと比較してみると、年平均労働時間は日本より短く、時間外労働（1 週 40 時間以上）者の構成割合も低い。さらには週 48 時間以上働いている労働者の割合は日本の約半分である。女性の労働力率をみても日本は出産時に離職傾向が強いため M 字型曲線となっているが、欧米諸国では既に見られない。また欧米諸国では管理職に占める女性の割合はフランス 39.4%、イギリス 34.7%であるのに対し日本は 11.3%である。これらのことから日本はワーク・ライフ・バランスの取り組み、女性の社会進出が遅れていることを確認した。

沼田市の人口は平成 23 年には 52,907 人であったが、平成 27 年には 50,679 人と年々減少している。人口の割合に関しても、年少人口割合(15 歳以上)及び生産年齢人口割合(15 歳以上 65 歳未満)が減少しているのに対して高齢者人口割合(65 歳以上)が年々増加している。このことから沼田市は少子高齢化の傾向があるとわかる。出生率に関しては平成 26 年には 1.67 と全国、県平均を大いに上回ってはいるが、出生数は平成 22 年から 26 年に渡っては横ばいとなっている。沼田市では全体的に人口が減少していく中、男女とも十年後には若年層の減少が著しく、特に出生数の減少により、若年層の比率がさらに下がることが想定され、大幅な人口減が危惧されている。沼田市は全国、県平均に比べ女性の労働力率が高い。25～29 歳と 45～49 歳の 2 つを頂点とし、30～34 歳を谷とする「M 字型曲線」を示しており、25 歳前後で結婚や出産のため離職する様子が表れているものの、平成 22 年ではその落ち込み方が浅くなっており、継続して就労している割合が高いことを表している。女性の参画状況においては、沼田市の地方自治法（第 202 条の 3）に基づく審議会等の女性の登用状況をみると、平成 27 年には審議会等における登用では 20 の審議会のうち 14 の審議会に女性が登用されており、女性の委員数は総数 338 人のうち 48 人、女性比率は 14.2%となっている。しかし女性の参画状況比較では、国・県、県内平均を大きく下回ってしまっている。また、市議会議員に占める女性議員割合と自治会長（区長）の女性比率をみると、現在 0%となっている。これらのことから沼田市は女性の労働力率が高いが、女性の、その他の面での参画の割合が低いことが問題である。

このような沼田市の現状から、ワーク・ライフ・バランスがまだ十分に浸透していないことを問題にし、さらに浸透させるためにはどうしたら良いか、また女性の社会的進出を推進する



ためにはどうしたら良いか、考えた。その結果、女性活躍のための模擬議会を設けるなどの提案をした。次年度は、今年度の成果をふまえ、ワーク・ライフ・バランスを進めている団体等にインタビューする予定である。

## (8) 新原 道信 (文学部・教授)

### FLP 演習 A

#### <テーマ>

Think planetary!!——「3.11 以降」の“惑星社会の諸問題”に応答するためのコミュニティ形成とフィールドワーク

#### <授業の概要>

地球規模のグローバル化・ネットワーク化と同時に根本的な有限性の問題である“惑星社会の諸問題”は、「3.11 以降」の日本社会の問題としても立ち現れています。地域社会の潜在力をすくい取り、問題解決の道筋を探索する“社会のオペレーター”が求められています。“社会のオペレーター”とは、個々の住民生活にとってホームドクターのようなひと、地域生活者の渾然一体とした要求の真意をつかみ、他の「専門家」にもわかる言葉に「翻訳」して、「専門的な対処」へとつなげるひと、様々な「専門領域」をつなぐひと(オペレーター)です。“社会のオペレーター”として社会で活躍していく力を身につけるため、2年次には、前期から夏休みの合宿にかけてフィールドワークの「技法・作法と倫理」「理論と方法」——生身の現実への理解力、フィールドへの入り方、ひととの接し方、関係のつくり方、所作、マナー、エチケットなど——を学び、サマースクールに参加、低関与型フィールドワークを体験します。後期以降は、サマースクールの成果をとりまとめ、3年次からは、他の新原ゼミ(院・学部・FLP 国際協力)の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」を中心に、関与型フィールドワーク(参与観察)を実践し、4年次には個人のプロジェクトを立ち上げ実践することをめざします。ゼミ生有志の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」は、院・学部・FLP(国際協力と地域公共)ゼミ有志で立川や砂川地区、被災地での活動に参加させていただいています。関与型フィールドワーク(参与観察)は、質的調査による事例研究、あるいはマルチメソッドによるフィールドワークによって調査研究の成果をもたらすための必須のメソドロジーです。これらのトレーニングを通じて、“たったひとりで異郷／異教／異境の地に降り立ち”、その土地やひとときちゃんとしたかかわりをつくっていきける力を身につけます(こうして先輩たちは、地域社会に巣立っています)。

#### <活動内容>

「新原ゼミ」は、文学部の学部と大学院、FLP「地域・公共マネジメント」と「国際協力」という、多様なゼミの総称です。4つのゼミには、中央大学のすべての学部(法、経、商、文、総合政策、理工)から多才な学生が集まり、総勢 60 名以上で、社会学の理論やフィールドワークの方法を学んでいます。

フィールドワークは、文献から学ぶとともに、実際に身体をうごかし、生の声を聴くこと、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ともに考え・かく〉ことを大切にする学問です。大学の外に出て、あらゆることに耳をすまし、出来る限りそれらを記憶・記録し、その意味を考え、調べ、ふりかえります。一つ一つのことを慎重に行い、地域で暮らす人たちの想いや歴史を丁寧に理解し、信頼関係を築きあげていくことを心がけています。

新原ゼミの特徴は、一人一人が「自分で道を切り開く」こと、そういうひとたちが「ともに場

を創る」ところです。年間のスケジュールから毎回のゼミ、司会進行、記録まで、誰が何をやるのか、フィールドワークの成果をどうまとめていくのか、合宿は何のために行き、何をするのか——〈教えられたり指示されたりする前にまず自分で始めてみる〉、〈チャレンジしたからこそ直面する「困難」や「危機」から学ぶこと〉を大切にして、毎年ゼロから、ゼミ生皆で話し合っ  
て方針を決めてきました。

そうして、山梨県笛吹市で4ゼミ合同の夏合宿・フィールドワークを行い、夏・秋・冬の節目には、文学部・大学院・地域・国際・「立川プロジェクト」が合同で、報告会や懇親会を開催しました。普段は別々のゼミで活動する学生が、ゼミをこえた「場」をともに創ることによって、自分とは異なるものの見方や、自主的に何かを創ることの大変さ、大切さを学んだのではないかと思います。

こうした活動のなかで、地域Aゼミは、群馬県沼田市でのサマースクール、山梨県笛吹市でフィールドワークを行い、地域開発の問題とコミュニティ形成の条件についての考察を深めました。さらに、ゼミ生各自は、様々なかたちのフィールドワーク——一人で海外に出て行ったり、じっくりと一つの場所でボランティアをつづけたりして、来年度以降のフィールドワークにむけての準備を整えました。

#### <実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習A・B・C

実施日：2016年9月5日（月）～ 9月7日（水）

実施都市：山梨県笛吹市

実施施設：笛吹市役所、石和図書館、青少年センター、春日居郷土館・小川正子記念館、八代郷土館、八代農産物直売所、モンデ酒造、マルスワイナリー他

実施内容：4つのゼミの学生をシャッフルして班を構成し、短期集中型フィールドワークのための事前調査、フィールドワーク、事後調査を行いました。

成果：2016年11月12日に、合宿成果合同報告会を4ゼミ合同で行い、地域開発の問題とコミュニティ形成の条件についての調査の成果をとりまとめ報告しました。

対象演習：演習A・B・C

実施日：2016年9月14日（水）～ 9月16日（金）

実施都市：山梨県笛吹市

実施施設：笛吹市役所、石和図書館、青少年センター、春日居郷土館・小川正子記念館、八代郷土館、八代農産物直売所、モンデ酒造、マルスワイナリー他

実施内容：4つのゼミの学生をシャッフルして班を構成し、短期集中型フィールドワークのための事前調査、フィールドワーク、事後調査を行いました。

成果：2016年11月12日に、合宿成果合同報告会を4ゼミ合同で行い、地域開発の問題とコミュニティ形成の条件についての調査の成果をとりまとめ報告しました。

## FLP演習B

### <テーマ>

Think planetary!!——「3.11以降」の“惑星社会の諸問題”に応答するためのコミュニティ形成とフィールドワーク

### <授業の概要>

地球規模のグローバル化・ネットワーク化と同時に根本的な有限性の問題である“惑星社会の諸問題”は、「3.11以降」の日本社会の問題としても立ち現れています。地域社会の潜在力をすくい取り、問題解決の道筋を探索する“社会のオペレーター”が求められています。“社会のオペレーター”とは、個々の住民生活にとってホームドクターのようなひと、地域生活者の渾然一体とした要求の真意をつかみ、他の「専門家」にもわかる言葉に「翻訳」して、「専門的な対処」へとつなげるひと、様々な「専門領域」をつなぐひと(オペレーター)です。“社会のオペレーター”として社会で活躍していく力を身につけるため、2年次には、前期から夏休みの合宿にかけてフィールドワークの「技法・作法と倫理」「理論と方法」——生身の現実への理解力、フィールドへの入り方、ひととの接し方、関係のつくり方、所作、マナー、エチケットなど——を学び、サマースクールに参加、低関与型フィールドワークを体験します。後期以降は、サマースクールの成果をとりまとめ、3年次からは、他の新原ゼミ(院・学部・FLP国際協力)の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」を中心に、関与型フィールドワーク(参与観察)を実践し、4年次には個人のプロジェクトを立ち上げ実践することをめざします。ゼミ生有志の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」は、院・学部・FLP(国際協力と地域公共)ゼミ有志で立川や砂川地区、被災地での活動に参加させていただいています。関与型フィールドワーク(参与観察)は、質的調査による事例研究、あるいはマルチメソッドによるフィールドワークによって調査研究の成果をもたらすための必須のメソドロジーです。これらのトレーニングを通じて、“たったひとりで異郷／異教／異境の地に降り立ち”、その土地やひとときちんとしたかかわりをつくっていきける力を身につけます(こうして先輩たちは、地域社会に巣立っています)。

### <活動内容>

「新原ゼミ」は、文学部の学部と大学院、FLP「地域・公共マネジメント」と「国際協力」という、多様なゼミの総称です。4つのゼミには、中央大学のすべての学部(法、経、商、文、総合政策、理工)から多才な学生が集まり、総勢60名以上で、社会学の理論やフィールドワークの方法を学んでいます。

フィールドワークは、文献から学ぶとともに、実際に身体をうごかし、生の声を聴くこと、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ともに考え・かく〉ことを大切にする学問です。大学の外に出て、あらゆることに耳をすまし、出来る限りそれらを記憶・記録し、その意味を考え、調べ、ふりかえます。一つ一つのことを慎重に行い、地域で暮らす人たちの想いや歴史を丁寧に理解し、信頼関係を築きあげていくことを心がけています。

新原ゼミの特徴は、一人一人が「自分で道を切り開く」こと、そういうひとたちが「ともに場を創る」ところです。年間のスケジュールから毎回のゼミ、司会進行、記録まで、誰が何をやる

のか、フィールドワークの成果をどうまとめていくのか、合宿は何のために行き、何をするのか——〈教えられたり指示されたりする前にまず自分で始めてみる〉こと、〈チャレンジしたからこそ直面する「困難」や「危機」から学ぶこと〉を大切にして、毎年ゼロから、ゼミ生皆で話し合っ  
て方針を決めてきました。

そうして、山梨県笛吹市で4ゼミ合同の夏合宿・フィールドワークを行い、夏・秋・冬の節目には、文学部・大学院・地域・国際・「立川プロジェクト」が合同で、報告会や懇親会を開催しました。普段は別々のゼミで活動する学生が、ゼミをこえた「場」をともに創ることによって、自分とは異なるものの見方や、自主的に何かを創ることの大変さ、大切さを学んだのではないかと思います。

こうした活動のなかで、地域Bゼミは、群馬県沼田市でのサマースクール、山梨県笛吹市でフィールドワークを行い、地域開発の問題とコミュニティ形成の条件についての考察を深めました。さらに、ゼミ生各自は、様々なかたちのフィールドワーク——一人で海外に出て行ったり、じっくりと一つの場所でボランティアをつづけたりして、来年度以降のフィールドワークにむけての準備を整え、論文を執筆しました。

#### ＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：演習A・B・C

実施日：2016年9月5日（月）～ 9月7日（水）

実施都市：山梨県笛吹市

実施施設：笛吹市役所、石和図書館、青少年センター、春日居郷土館・小川正子記念館、八代郷土館、八代農産物直売所、モンデ酒造、マルスワイナリー他

実施内容：4つのゼミの学生をシャッフルして班を構成し、短期集中型フィールドワークのための事前調査、フィールドワーク、事後調査を行いました。

成果：2016年11月12日に、合宿成果合同報告会を4ゼミ合同で行い、地域開発の問題とコミュニティ形成の条件についての調査の成果をとりまとめ報告しました。

対象演習：演習A・B・C

実施日：2016年9月14日（水）～ 9月16日（金）

実施都市：山梨県笛吹市

実施施設：笛吹市役所、石和図書館、青少年センター、春日居郷土館・小川正子記念館、八代郷土館、八代農産物直売所、モンデ酒造、マルスワイナリー他

実施内容：4つのゼミの学生をシャッフルして班を構成し、短期集中型フィールドワークのための事前調査、フィールドワーク、事後調査を行ないました。

成果：2016年11月12日に、合宿成果合同報告会を4ゼミ合同で行い、地域開発の問題とコミュニティ形成の条件についての調査の成果をとりまとめ報告しました。

## FLP演習C

### <テーマ>

Think planetary!!——「3.11以降」の“惑星社会の諸問題”に応答するためのコミュニティ形成とフィールドワーク

### <授業の概要>

地球規模のグローバル化・ネットワーク化と同時に根本的な有限性の問題である“惑星社会の諸問題”は、「3.11以降」の日本社会の問題としても立ち現れています。地域社会の潜在力をすくい取り、問題解決の道筋を探求する“社会のオペレーター”が求められています。“社会のオペレーター”とは、個々の住民生活にとってホームドクターのようなひと、地域生活者の渾然一体とした要求の真意をつかみ、他の「専門家」にもわかる言葉に「翻訳」して、「専門的な対処」へとつなげるひと、様々な「専門領域」をつなぐひと(オペレーター)です。“社会のオペレーター”として社会で活躍していく力を身につけるため、2年次には、前期から夏休みの合宿にかけてフィールドワークの「技法・作法と倫理」「理論と方法」——生身の現実への理解力、フィールドへの入り方、ひととの接し方、関係のつくり方、所作、マナー、エチケットなど——を学び、サマースクールに参加、低関与型フィールドワークを体験します。後期以降は、サマースクールの成果をとりまとめ、3年次からは、他の新原ゼミ(院・学部・FLP国際協力)の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」を中心に、関与型フィールドワーク(参与観察)を実践し、4年次には個人のプロジェクトを立ち上げ実践することをめざします。ゼミ生有志の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」は、院・学部・FLP(国際協力と地域公共)ゼミ有志で立川や砂川地区、被災地での活動に参加させていただいています。関与型フィールドワーク(参与観察)は、質的調査による事例研究、あるいはマルチメソッドによるフィールドワークによって調査研究の成果をもたらすための必須のメソドロジーです。これらのトレーニングを通じて、“たったひとりで異郷／異教／異境の地に降り立ち”、その土地やひととききちんとしたかかわりをつくっていける力を身につけます(こうして先輩たちは、地域社会に巣立っています)。

### <活動内容>

「新原ゼミ」は、文学部の学部と大学院、FLP「地域・公共マネジメント」と「国際協力」という、多様なゼミの総称です。4つのゼミには、中央大学のすべての学部(法、経、商、文、総合政策、理工)から多才な学生が集まり、総勢60名以上で、社会学の理論やフィールドワークの方法を学んでいます。

フィールドワークは、文献から学ぶとともに、実際に身体をうごかし、生の声を聴くこと、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ともに考え・かく〉ことを大切にする学問です。大学の外に出て、あらゆることに耳をすまし、出来る限りそれらを記憶・記録し、その意味を考え、調べ、ふりかえます。一つ一つのことを慎重に行い、地域で暮らす人たちの想いや歴史を丁寧に理解し、信頼関係を築きあげていくことを心がけています。

新原ゼミの特徴は、一人一人が「自分で道を切り開く」こと、そういうひとたちが「ともに場を創る」ところです。年間のスケジュールから毎回のゼミ、司会進行、記録まで、誰が何をやる

のか、フィールドワークの成果をどうまとめていくのか、合宿は何のために行き、何をするのか——〈教えられたり指示されたりする前にまず自分で始めてみる〉こと、〈チャレンジしたからこそ直面する「困難」や「危機」から学ぶこと〉を大切にして、毎年ゼロから、ゼミ生皆で話し合っ  
て方針を決めてきました。

そうして、山梨県笛吹市で4ゼミ合同の夏合宿・フィールドワークを行い、夏・秋・冬の節目には、文学部・大学院・地域・国際・「立川プロジェクト」が合同で、報告会や懇親会を開催しました。普段は別々のゼミで活動する学生が、ゼミをこえた「場」をともに創ることによって、自分とは異なるものの見方や、自主的に何かを創ることの大変さ、大切さを学んだのではないかと思います。

こうした活動のなかで、地域Cゼミは、群馬県沼田市でのサマースクール、山梨県笛吹市でフィールドワークを行い、地域開発の問題とコミュニティ形成の条件についての考察を深めました。さらに、ゼミ生各自は、様々なかたちのフィールドワーク——一人で海外に出て行ったり、じっくりと一つの場所でボランティアをつづけたりして、3年間のまなびの成果をとりまとめ、論文を執筆しました。

#### ＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：演習A・B・C

実施日：2016年9月5日（月）～ 9月7日（水）

実施都市：山梨県笛吹市

実施施設：笛吹市役所、石和図書館、青少年センター、春日居郷土館・小川正子記念館、八代郷土館、八代農産物直売所、モンデ酒造、マルスワイナリー他

実施内容：4つのゼミの学生をシャッフルして班を構成し、短期集中型フィールドワークのための事前調査、フィールドワーク、事後調査を行いました。

成果：2016年11月12日に、合宿成果合同報告会を4ゼミ合同で行い、地域開発の問題とコミュニティ形成の条件についての調査の成果をとりまとめ報告しました。

対象演習：演習A・B・C

実施日：2016年9月14日（水）～ 9月16日（金）

実施都市：山梨県笛吹市

実施施設：笛吹市役所、石和図書館、青少年センター、春日居郷土館・小川正子記念館、八代郷土館、八代農産物直売所、モンデ酒造、マルスワイナリー他

実施内容：4つのゼミの学生をシャッフルして班を構成し、短期集中型フィールドワークのための事前調査、フィールドワーク、事後調査を行ないました。

成果：2016年11月12日に、合宿成果合同報告会を4ゼミ合同で行い、地域開発の問題とコミュニティ形成の条件についての調査の成果をとりまとめ報告しました。

## （９）黒田 絵美子（総合政策学部・教授）

### FLP演習A

#### <テーマ>

地域文化振興の実践（1）

#### <授業の概要>

沼田市におけるサマースクールでのフィールドワークのテーマを決めることから始まった。「地域活性化」の要素として、沼田市の木材に着目し、市民が憩える場の構築手法と市外からの観光客を誘致する手法を模索して、政策提言につなげた。研究を行うなかで、沼田市は林業が盛んであること、商店街に空き店舗があること、新宿区との植林活動での交流があることの3つの要素を抽出し、これらを組み合わせて、人々が集い交流出来る場とイベントの具体的実施プランを作った。中でも、空き店舗を活用した市民交流スポット「ぬくぬくハウス」におけるイベントプランのチラシ案は、説得力がある良い成果物となった。

9月には、黒田ゼミが毎年協力しているパルテノン多摩主催のフェス（今年度より名称が「パル多摩フェス」となった）において地域文化振興のフィールドワークを行った。これに先立ち、4月の準備段階からパルテノン多摩のスタッフ（多摩市職員、パルテノン多摩事業部職員）との会議、ゼミ内での上級生たちとの企画立案とイベント運営方法の詳細についての打ち合わせを重ねた。本番は事故もなく、多くの来場者に興味を持って参加していただき、来場者からも主催者からも大変感謝された。実施後の反省会と次年度へ向けての調整にもすでに着手している。

2月には、多摩こども劇場主催の「ぽこぽこフェスタ」にスタッフとして参加した。子供たちを安全な環境の中で楽しませるさまざまな手法を学びつつ、実際に運営スタッフとして、円滑な実施に尽力した。

#### <活動内容>

黒田ゼミは、地域文化振興をテーマに、主に文化複合施設パルテノン多摩を活動拠点として、実際に行われるイベントでのフィールドワークを通して、地域文化振興の実態を研究している。

#### <実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習A・B

実施日：2016年4月20日（水）

実施都市：東京都多摩市

実施施設：関戸会館

実施内容：多摩市議会議員との地域活性化に関するディスカッション

成果：学生ならではの視点から率直な疑問や意見を提示し、実際に施策に携わる議員らから現場の実態について説明を受け、ひとつの問題を解決するにあたって勘案しなければならないさまざまな要素について学ぶことが出来た。



対象演習：演習A・B

実施日：2016年7月6日（水）

実施都市：東京都多摩市

実施施設：パルテノン多摩

実施内容：パル多摩フェス実施に向けての打ち合わせ

成果：9月に実施したパル多摩フェスで黒田ゼミが任されたオリジナル・スタンプラリーの実施方法について検討を行った。

対象演習：演習A・B・C

実施日：2016年8月5日（金）・6日（土）、8月9日（火）、8月11日（木）、8月17日（水）・18日（木）、  
8月23日（火）、8月25日（木）、8月31日（水）、9月1日（木）、9月6日（火）、9月8日（木）、  
9月12日（月）、9月14日（水）～18日（日）

実施都市：東京都多摩市

実施施設：パルテノン多摩

実施内容：パル多摩フェス実施に向けての打ち合わせ

成果：9月に実施したパル多摩フェスで黒田ゼミが任されたオリジナル・スタンプラリーの実施方法について、具体的に検討・準備を行った。とくに、限られた予算の中で、いかにオリジナリティーに富んだイベントにするか、工夫を重ねて、「ヒューマンアーチスト」というコンセプトを考え出し、通常のスタンプラリーとは違う形での実施方法にたどりついた。

## F L P 演習 B

### <テーマ>

地域文化振興の実践（2）

### <授業の概要>

黒田ゼミが毎年協力しているパルテノン多摩主催のフェス（今年度より名称が「パル多摩フェス」となった）において地域文化振興のフィールドワークを行った。今年度は、主催者側より黒田ゼミに対し、スタンプラリーの実施を全面的に任せたいとの要請を受け、他に例を見ないオリジナルな形のスタンプラリーを提供すべく、企画立案に多くの時間を費やした。

ラリーの台紙の代わりにエコバッグを用い、スタンプはゼミ生手作りのものとして、参加者がオリジナルのエコバッグを作れるような形のスタンプラリーを考案し、「ペタンぷ」と名付けた。4月の準備段階からパルテノン多摩のスタッフ（多摩市職員、パルテノン多摩事業部職員）との会議、ゼミ内での企画立案とイベント運営方法の詳細についての打ち合わせを重ねた。本番は事故もなく、多くの来場者に興味を持って参加していただき、来場者からも主催者からも大変感謝された。実施後の反省会と次年度、主体となって活動するA生への伝達事項の整理・調整にもすでに着手している。

2月には、多摩こども劇場主催の「ぽこぽこフェスタ」にスタッフとして参加した。子供たちを安全な環境の中で楽しませるさまざまな手法を学びつつ、実際に運営スタッフとして、円滑な実施に尽力した。

### <活動内容>

黒田ゼミは、地域文化振興をテーマに、主に文化複合施設パルテノン多摩を活動拠点として、実際に行われるイベントでのフィールドワークを通して、地域文化振興の実態を研究している。

### <実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習A・B

実施日：2016年4月20日（水）

実施都市：東京都多摩市

実施施設：関戸会館

実施内容：多摩市議会議員との地域活性化に関するディスカッション

成果：学生ならではの視点から率直な疑問や意見を提示し、実際に施策に携わる議員らから現場の実態について説明を受け、ひとつの問題を解決するにあたって勘案しなければならないさまざまな要素について学ぶことが出来た。

対象演習：演習B

実施日：2016年5月21日（土）

実施都市：東京都立川市

実施施設：たましん事業センター

実施内容：多摩の大学まちづくりコンペティション説明会

成果：コンペ参加に向けて説明を聞きに行ったが、コンペ実施日が「パ尔多摩フェス」と重なっていることが判明し、コンペへの出場を断念した。

対象演習：演習B

実施日：2016年6月1日（水）

実施都市：東京都多摩市

実施施設：パルテノン多摩

実施内容：パ尔多摩フェス実施に向けての打ち合わせ

成果：9月に実施したパ尔多摩フェスで黒田ゼミが任されたオリジナル・スタンプラリーの実施方法について検討を行った。

対象演習：演習A・B

実施日：2016年7月6日（水）

実施都市：東京都多摩市

実施施設：パルテノン多摩

実施内容：パ尔多摩フェス実施に向けての打ち合わせ

成果：9月に実施したパ尔多摩フェスで黒田ゼミが任されたオリジナル・スタンプラリーの実施方法について検討を行った。

対象演習：演習A・B・C

実施日：2016年8月5日（金）・6日（土）、8月9日（火）、8月11日（木）、8月17日（水）・18日（木）、8月23日（火）、8月25日（木）、8月31日（水）、9月1日（木）、9月6日（火）、9月8日（木）、9月12日（月）、9月14日（水）～18日（日）

実施都市：東京都多摩市

実施施設：パルテノン多摩

実施内容：パ尔多摩フェス実施に向けての打ち合わせ

成果：9月に実施したパ尔多摩フェスで黒田ゼミが任されたオリジナル・スタンプラリーの実施方法について、具体的に検討・準備を行った。とくに、限られた予算の中で、いかにオリジナリティーに富んだイベントにするか、工夫を重ねて、「ヒューマンアーチスト」というコンセプトを考え出し、通常のスタンプラリーとは違う形での実施方法にたどりついた。

対象演習：演習B

実 施 日：2016年12月8日（木）

実施都市：東京都多摩市

実施施設：パルテノン多摩

実施内容：ぽこぽこフェスタ説明会

成 果：2月に行われる「ぽこぽこフェスタ」（多摩こども劇場主催）への参加に向けての打ち合わせを行った。

## F L P 演習 C

### <テーマ>

地域文化振興の実践 (3)

### <授業の概要>

B 生が中心となつて行う「パル多摩フェス」のサポート的存在として、過去 2 年間の経験から適宜アドバイスをを行った。また、A 生の沼田市サマースクールでのフィールドワークに関しても、中間報告、期末報告に向けてのアドバイスをを行った。

C 生独自の活動として、大学周辺のお薦めグルメマップを作成した。お店への取材、候補店の選択、配布チラシのレイアウトの検討、内容の検討に多くの時間を費やし、2 月末の完成を目指した。

### <活動内容>

黒田ゼミは、地域文化振興をテーマに、主に文化複合施設パルテノン多摩を活動拠点として、実際に行われるイベントでのフィールドワークを通して、地域文化振興の実態を研究している。

### <実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習 A・B・C

実施日：2016年8月5日（金）・6日（土）、8月9日（火）、8月11日（木）、8月17日（水）・18日（木）、8月23日（火）、8月25日（木）、8月31日（水）、9月1日（木）、9月6日（火）、9月8日（木）、9月12日（月）、9月14日（水）～18日（日）

実施都市：東京都多摩市

実施施設：パルテノン多摩

実施内容：パル多摩フェス実施に向けての打ち合わせ

成 果：9月に実施したパル多摩フェスで黒田ゼミが任されたオリジナル・スタンプラリーの実施方法について、具体的に検討・準備を行った。とくに、限られた予算の中で、いかにオリジナリティーに富んだイベントにするか、工夫を重ねて、「ヒューマンアーチスト」というコンセプトを考え出し、通常のスタンプラリーとは違う形での実施方法にたどりついた。

## (10) 小林 勉 (総合政策学部・教授)

### FLP演習A

#### <テーマ>

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

#### <授業の概要>

Jリーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなってきています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中でなされてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。それと同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えようとする際の様々な課題についても検証します。

地域で展開されるスポーツの実情を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的な観点から検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

#### <活動内容>

小林勉ゼミは、地域・公共マネジメントプログラムとスポーツ健康科学プログラムの双方に属したゼミナールである。今年度は地域・公共マネジメントプログラムの群馬県沼田市へのサマースクールに並行して、CCRCという我が国で現在取り組まれつつある高齢者に重点を置いた社会政策について検討を行った。文献調査による先行研究だけでなく、実際に千葉県、山梨県、福岡県のCCRCへ訪れ、その実態や今後の展望などについて現地調査を展開した。地域・公共マネジメントプログラムとしては沼田市に「スポーツで挑む地域活性化」という政策提言を行い、各活動報告会及び報告書作成においては、それに加え「新日本版CCRCの検証」というテーマのもと、CCRCへの調査結果を報告した。

#### <実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習A

実施日：2016年6月22日（水）

講演者：須崎 智也 氏（株式会社アセットメイク代表取締役）

演題：グラスルーツレベルから見たシニア自立支援事業の実際

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 11440教室

実施内容：八王子市で不動産を営む(株)アセットメイク代表取締役須崎智也氏に、高齢者の自立支援を目的とした賃貸アパート経営に取り組むことになった経緯、現在の高齢者住宅をめぐる政策の盲点について、草の根レベルからの課題提起を行っていただいた。

成果：須崎氏の取り組む高齢者自立支援事業が、当ゼミが取り組む高齢者向け住居コミュニティ政策と合致する点が多く、政策を構想する上で多くの重要な視点を習得することができた。

対象演習：演習A・B・C

実施日：2016年7月8日（金）

講演者：今村 貴幸 氏（常葉大学講師）

演 題：脳活運動のすすめ

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 11400教室

実施内容：秋田市4カ所のコミュニティーセンターにて、リハビリテーション医学専門家である今村貴幸氏を交えて、「運動による脳の活性化」というテーマで講演会を開催する意義、秋田市民をプロジェクトに巻き込む戦略等について検討した。

成 果：秋田市内4カ所の市民サービスセンターで実施し、より多くの高齢者の方が足を運べるような機会作りを提供することのプロジェクト意義、マネジメント上での戦略について多くの知見を習得することができた。

対象演習：演習A

実施日：2016年8月16日（火）

実施都市：千葉県千葉市

実施施設：スマートコミュニティ稲毛

実施内容：日本版CCRCに先駆的に取り組まれているスマートコミュニティ稲毛へ訪れ、その実態や今後の展望などについて現地調査を行った。

成 果：政府に注目され始めているCCRCを行っている施設を見学し、職員の方に話をヒアリングすることで、運営状況や施設の雰囲気、マネジメント上の工夫など様々な点について、現場感覚で感じる事ができた。

対象演習：演習A

実施日：2016年8月18日（木）

実施都市：山梨県都留市

実施施設：企画課 つる創生推進室

実施内容：行政が先導し日本版CCRCに先駆的に取り組み始めた山梨県都留市へのヒアリング調査を行った。

成 果：これまで日本ではあまり馴染みのない取り組みであることから、住民への認知、共同事業者の獲得が難しく、また行政が取り組む前例として国内にほとんど存在しなかったため、多くの点で困難を強いられる状態が多いといった課題点を明らかにすることができた。

対象演習：演習A

実施日：2016年9月7日（水）～ 9月11日（日）

実施都市：秋田県秋田市

実施施設：秋田市八橋運動公園

実施内容：J3チームのブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトに参加し、その運営補助を行うなかで、来年の自分たちのプロジェクトへ向けて、現地スタッフの方々から運営上の留意点等について現場指導を受けた。

成果：その運営概要や、秋田という場所でプロジェクトを行う意義等を、現地スタッフや地域の人々とのやり取りの中で肌身でも感じ、来年の自分たちのプロジェクトへの取っかかりとして、貴重な経験を積むことができた。



## F L P 演習 B

### <テーマ>

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

### <授業の概要>

J リーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなってきています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中でなされてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。それと同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えようとする際の様々な課題についても検証します。

地域で展開されるスポーツの実情を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的な観点から検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

### <活動内容>

スポーツによる地域活性化が日本各地で目指される中、本年度の研究対象地となった秋田県秋田市もその例外ではない。そのような地域の中で、実際のスポーツ振興はいかに実施されているのか。市民や市役所の担当者にヒアリング調査を行い、様々な視点からスポーツによる地域活性化の有り様について検討を行った。また8月から9月にかけて行ったJリーグクラブ・ブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトにおいては、現地のNPOや行政機関と協力し、秋田市の高齢者のコミュニティ形成を促進するプロジェクトを実施した。

### <実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習B

実施日：2016年5月20日（金）～ 5月23日（月）

実施都市：秋田県秋田市

実施施設：秋田市八橋運動公園

実施内容：ホームゲーム観戦者へのアンケート調査

成果：サッカー観戦者の実態について年齢層や観戦頻度などを調査し、スタジアムを通じた高齢者コミュニティの創出に関する基礎的データの収集を行った。

対象演習：演習B

実施日：2016年6月6日（月）～ 6月8日（水）

実施都市：秋田県秋田市

実施施設：ブラウブリッツ秋田

実施内容：秋田市グラウンドゴルフ協会会長と秋田市8人制バレーボール連盟理事と意見交換を行い、プロジェクトを運営する上での協力関係を構築した。

成果：地元根づくスポーツネットワークとの接点を構築することで、余所者では感受し

得ないローカル・アクターからのアドバイスのもと、現地の住民に受容されやすいイベントのあり方について意見交換を行った。

対象演習：演習B

実施日：2016年6月19日（日）

実施都市：静岡県藤枝市

実施施設：藤枝総合運動公園

実施内容：アウェーツーリズムを行うサッカー観戦者へのアンケート調査

成果：サッカー観戦のために長距離移動をいとわない観戦者を中心に、その動機やJリーグチームに期待することなどヒアリングし、アウェーツーリズムの実態について検証した。

対象演習：演習A・B・C

実施日：2016年7月8日（金）

講演者：今村 貴幸 氏（常葉大学講師）

演題：脳活運動のすすめ

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 11400教室

実施内容：秋田市4カ所のコミュニティーセンターにて、リハビリテーション医学専門家である今村貴幸氏を交えて、「運動による脳の活性化」というテーマで講演会を開催する意義、秋田市民をプロジェクトに巻き込む戦略等について検討した。

成果：秋田市内4カ所の市民サービスセンターで実施し、より多くの高齢者の方が足を運べるような機会作りを提供することのプロジェクト意義、マネジメント上での戦略について多くの知見を習得することができた。

対象演習：演習B

実施日：2016年7月13日（水）～ 7月15日（金）

実施都市：秋田県秋田市

実施施設：ブラウブリッツ秋田クラブ事務所

実施内容：8月から9月にかけて実施するプロジェクトに関する意見交換会をクラブ担当者らと行った。

成果：小林ゼミが本年度行うプロジェクトに関する概要説明を行い、それに対する意見交換を行った。プロの興行試合を実際に運営するクラブ経営側の視点からプロジェクトに対する貴重な意見を提示してもらったことで、プロジェクト準備を多角的に検討することができた。

対象演習：演習B

実施日：2016年7月31日（日）～ 8月3日（水）

実施都市：秋田県秋田市

実施施設：ブラウブリッツ秋田

実施内容：プロジェクト準備ために、使用する各施設の施設確認を行った。

成 果：今後使用する施設の視察を行い、施設運営者に対してプロジェクトへの協力要請とヒアリング調査を行った。施設利用頻度などから秋田市民のスポーツ施設利用率は明らかにすることができた。

対象演習：演習B

実 施 日：2016年8月9日（火）～ 8月12日（金）

実施都市：秋田県秋田市

実施施設：ブラウブリッツ秋田

実施内容：ブラウブリッツ秋田職員へのヒアリング調査及びローカル・アクターとの意見交換会

成 果：職員たちへのヒアリング調査から、Jリーグクラブの地域貢献の実態を浮き彫りにした。また、プロジェクトに協力するローカル・アクターの郷土料理サークル「銀あんの会」会長と意見交換会を行い、郷土料理づくりを通じて多世代交流を図るイベントの運営イメージを両方で共有することで、マネジメントの詳細を詰めることができた。

対象演習：演習B

実 施 日：2016年8月17日（水）～ 8月20日（土）

実施都市：秋田県秋田市

実施施設：秋田市中心サービスセンター

実施内容：1週間後に主催する講演会活動の事前準備を行った。

成 果：1週間後に控える今村貴幸氏を招いた講演会に向けて現地に於て最終調整を行った。また、秋田市の通信制高校と意見交換会を開き、秋田市に住む若者の考え方や、彼らの将来構想についてヒアリング調査を行い、高齢化の進む秋田県における若年層世代の特徴を明らかにすることができた。

対象演習：演習B

実 施 日：2016年8月22日（月）～ 8月27日（土）

実施都市：秋田県秋田市

実施施設：秋田市中心サービスセンター

実施内容：秋田市内4か所のサービスセンターで講演会活動を行い、市民の健康への意識付けを行うとともに、高齢者世代のコミュニティづくりへ向けたインセンティブ形成を図った。

成 果：4か所の市内サービスセンターで、延べ60人ほどを対象に今村貴幸氏による運動と脳の活性化を内容とした講演会を実施し、秋田市内の高齢者に対して、運動や交流の有する意義について啓発活動を行うことができた。

対象演習：演習B

実施日：2016年9月2日（金）～ 9月12日（月）

実施都市：秋田県秋田市

実施施設：秋田市八橋運動公園

実施内容：7つのイベントを運営し、秋田市内における健康増進、またはコミュニティの活性化を図った。

成果：7つのイベントを主催し、小学生から高齢者世代まで幅広い世代を含め、延べ343名の市民を参加させることに成功した。

対象演習：演習B

実施日：2016年11月17日（木）～ 11月21日（月）

実施都市：秋田県秋田市

実施施設：秋田市八橋運動公園

実施内容：8月と9月に行ったプロジェクトのフォローアップ調査を行った。

成果：秋田県庁や秋田市役所、秋田市八橋運動公園に赴きヒアリング調査を行った。プロジェクトが及ぼした効果や今後の課題についてローカル・アクターらと意見交換を行い、来年度に向けた課題を浮き彫りにすることができた。

## FLP演習C

### <テーマ>

「スポーツによる地域活性化の可能性」に関する研究

### <授業の概要>

J リーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなってきています。こうした捉え方はいつ頃から、どのような経緯の中でなされてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、「スポーツによる地域活性化の可能性」について検討していきます。それと同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えようとする際の様々な課題についても検証します。

地域で展開されるスポーツの実情を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的な観点から検討できるようになることが本授業の大きな目標です。

### <活動内容>

今年度は、以下3点の活動を展開した。

1. 「中大杯・めでるくんスポーツフェスタ」におけるイベント企画・大会運営のサポート  
…7月第1・第2日曜日に、FLP スポーツ・健康科学プログラムに所属するゼミ生合同で開催した「中大杯・めでるくんスポーツフェスタ」において、大会でのイベント企画・当日の大会運営サポートおよび過去2年間の同大会での活動経験を生かした助言を行った。
2. 「ブラウブリッツ秋田まめの木プロジェクト」での事業推進・研究のサポート  
…演習Bの行った「ブラウブリッツ秋田まめの木プロジェクト」において、プロジェクト推進及び研究のサポートを行った。2015年度と同プロジェクトでの活動経験を活かし、本プロジェクトの事業・調査研究に関する運営補助および助言を行った。
3. 「群馬県沼田市における地域活性化へのスポーツツーリズムの活用可能性」の検討と同市への政策提言  
…演習Aの学生と共に、群馬県沼田市を対象にして、「近年地域活性化の文脈においてその有用性が唱えられているスポーツツーリズムは、沼田市の観光面での地域活性化に寄与しているのか」について、現地でのフィールドワークと関係各所へのヒアリング調査・研究に関するサポートおよび助言。なお、調査結果については、同市へ政策提言として提出した。

### <実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習B・C

実施日：2016年4月15日（金）

講演者：今村 貴幸 氏（常葉大学講師）

演題：高齢者を対象としたイベントに関するプロジェクトマネジメントについて

実施都市：東京都八王子市

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 11430教室

実施内容：プロジェクトマネジメントの手法に関して学んだ。

成 果：昨年度本ゼミで行ったプロジェクトマネジメントに関してのフィードバックと本年度プロジェクトに向けて、高齢者を対象とした運動プログラムの留意点（想定し得るトラブルの回避法と発生時における対処法）について意見交換を行った。

対象演習：演習B・C

実 施 日：2016年4月15日（金）

講 演 者：外山 新平 氏（株式会社ブラウブリッツ秋田常務）

演 題：Jリーグクラブの地域貢献活動について

実施都市：東京都八王子市

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 11430教室

実施内容：Jリーグクラブの展開する地域貢献活動に関して、その実態と課題について概説していただき、本年度のプロジェクト準備を行った。

成 果：Jリーグクラブの地域貢献活動を念頭に、当該プロジェクトとの接点を浮き彫りにすることができた。

対象演習：演習A・B・C

実 施 日：2016年7月8日（金）

講 演 者：今村 貴幸 氏（常葉大学講師）

演 題：脳活運動のすすめ

実施都市：東京都八王子市

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 11400教室

実施内容：運動が脳の活動に及ぼす影響と、脳活動の活発化に向けた有効な運動方法などについて専門的知識の提供を受けた。

成 果：「まめの木プロジェクト」の一環として2016年9月10日に行ったイベントの企画段階において、高齢者の認知症予防としてのトレーニングをイベントに盛り込む際の留意点について明らかにすることができた。

対象演習：演習C

実 施 日：2016年9月6日（火）～ 9月12日（月）

実施都市：秋田県秋田市

実施施設：秋田市八橋運動公園

実施内容：「まめの木プロジェクト」でのイベント実施における事前準備・当日マネジメント及び事後処理のサポート。

成 果：昨年度の経験を活かし、プロジェクトが計画通りに推進していくようにサポートしたことにより、イベントと調査研究を円滑に展開することができた。

## (11) 堤 和通 (総合政策学部・教授)

### FLP演習A・B・C

#### <テーマ>

地域における犯罪予防と再犯減少策の調査研究

#### <授業の概要>

現行の制度によるものに加えて、犯罪要因について、地域の自治体や近隣地域、それに、児童福祉、家庭支援、精神衛生、教育など地域を拠点とする各機関が、どのように取り組んでいくことができるのかを考えます。

#### <活動内容>

ゼミでは、犯罪・非行に対処する制度として少年法の概要を学び、その特徴を捉えることを第一とし、次に、少年法制の生成期からの社会変容と関連学問分野の蓄積を一方に、今の社会が継承しているはずの法の支配の理念を他方に念頭において、何が子どもにとって最善なのか、社会が引き受けるべき役割は何かという問いを考えます。その際には、犯罪や非行は他の多くの行為、選択と同様、真空状態の中でなされるとみるのではなく、時間（縦断）的にも横断的にも多層にわたる要因を背景にとらえます。出産前の母親の状態から、出産後の生育環境、乳幼児期の子どもと親、養育者との関係などの時間縦断的な積み重ねと、その時点での（横断的に捉えられる）ミクロ（親子や交友関係）からマクロ（地域の子育て支援や教育機関でのいじめ対処体制）までの各層要因の作用の働きを背景に見ると、子どもが非行、犯罪に手を染めないために、換言すれば、社会化の課題を成し遂げるために必要とされる制度は、現在とはまた違ったものが構想できるかもしれません。

このように、少年法の概要、刑事司法に関連する法学、犯罪学に代表される行動科学を座学として学びますが、それが、サマースクールでの調査につながるの言うまでもありません。地域公共マネジメントに属していることから分かるように、ゼミでは、先に述べた新しい構想は子どもが住む地域の中にこそあると考え、調査をお願いしている地域、自治体のことを先ず、多摩キャンパスに居ながらにして調べられることはすべて調べるように求められます。そのうえで、他者を否定せずに自己を活かす術を身に着ける機会が遍く行き渡るのに必要なことは何か、という視点で課題を見つけ考えていきます。

日本の治安は刑法犯認知件数からみると「安定期」にあるといえますが、いじめやDV、ストーカー、児童虐待の問題は沈静化に向かっていているとはいえ、刑法犯でも再犯予防が近時の重要課題になっています。前者は、子どもの社会化で主要な働きを期待され、その不可欠ともいえるプロセスで機能不全がみられることを示し、また、再犯予防の難しさは最初に非行・犯罪に手を染めさせないことの重要性を示すものでもあります。ゼミのテーマには「犯罪」、「再犯」があがっていますが、社会的自己の自覚と自己表現の可能性の発見をニーズとみて具体的なテーマを決めますので、今年度のサマースクールでは心の健康増進を報告課題にしています。

安全は各国で重要課題とされ、日本では社会安全政策論という分野、アプローチが登場しています。ゼミの問題の立て方はこの分野の関心にこたえ、また、そのアプローチを取り入れるもの

でもあります。現在、警察政策学会に社会安全政策教育研究部会がおかれて3年ほど経ちますが、初年度に引き続き今年度末には、その部会でゼミの卒業論文発表をしています。



## (12) 細野 助博 (総合政策学部・教授)

### FLP演習A・B・C

#### <テーマ>

まちづくりの成功事例の定量的検証

#### <授業の概要>

近年の中心市街地の衰退は目を覆うばかりです。どうしてこのようになったのでしょうか。郊外に林立するメガモールだけの責任でしょうか？そうではありませんね。闇雲に注ぎ込まれる「補助金」という税金、それを取ってくることで自分の役目は終わったと勘違いし、それに異を唱えると「村八分」という商店街の雰囲気、一步下がって市民協働を唱えるだけで、調整も規制もできないよという行政の消極的な姿勢、地域の衰退など無関係と孤高を保つことだけに生きがいを見出す大学のプライド。こんなところ知るかとさっさと逃げ出す若者達の意識の低さ、皆でまちを壊しています。少子高齢社会の進むまちの中で、まちの「中心」として市街地が果たすべき役割を自覚していないところが問題なのです。ゼミはこの問題意識を共有し、理論と実践の両面から、まちづくりを調査研究します。

授業内容についてはおおまかに前期と後期に分けられ、前期は主に都市を調査・分析する上で必要となる基礎的な知識の習得を目標とし、Excel や統計、地図ソフトを活用した分析手法の習得や、都市を扱った代表的な論文の輪読などを通じて読解力・分析力を養います。そして後期では、前期で学習した内容を踏まえて実際のまちを「見る」(まちナビ) ことに主眼を置き、実地調査等を行いながら多くの事例を学びます。

2009 年度は、群馬県沼田市、宮城県仙台市や東京都福生市を調査対象として取り上げました。データ収集や現地ヒアリング等を通じて問題の実態を知り、グループワークによって分析検討し、具体的な政策提言を含んだ論文とプレゼンテーション資料等を作成しました。

2010 年度は、長野県富士見町との「都市農村交流」をはじめ、「学校跡地活用」に関して八王子のケースをもとに調査研究成果を現地に発表しました。現地でケーキの材料になるルバーブの採取、ジャムに加工されるほおずきなどの摘み取りも経験し貴重な体験をしました。

2011 年度は、宮城県小林市とのタイアップで六次産業化が地域振興にどのような効果があるかについて、現地でワークショップやシンポジウムを開催しました。

2012 年度は、横須賀市や立川市とのジョイントで、市政の課題について定量分析を行い、発表する機会を設けました。

2013 年度は、金沢市とのジョイントで「大学ゼミに金沢を研究対象にする」ためのパンフレット作りと、金沢の観光行政への提言書の取りまとめを行いました。

2014 年度は、福生市とのジョイントで外国人向けマップの作成、通行量調査、市報作成などを行いました。

2015 年度は、産学官連携組織のネットワーク多摩の調査事業に学部ゼミと共同で取り組み、立川市でアンケート調査をもとにワークショップ「立川のミライを考える」を実施しました。

<活動内容>

細野ゼミは、理論と実践を旗印に社会との開かれた調査研究を行います。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習 A・B・C

実施日：2016年8月8日（月）～2016年8月10日（水）

実施都市：群馬県沼田市

実施施設：沼田市

実施内容：沼田市とその周辺の町村の地域資源の発掘とデータ収集

成果：地域資源の発掘とデータ収集をもとに、沼田市と住民、商工業者とのワークショップを市役所内にて開催し、地元紙「上毛新聞」にもその様子が取り上げられた。この経験をもとに、さらなる調査分析により、サマースクールでの効果的な調査が可能となり、中間発表に精度を増すことができた。

対象演習：演習 A・B・C

実施日：2016年8月23日（火）～2016年8月25日（木）

実施都市：群馬県沼田市

実施施設：沼田市役所

実施内容：サマースクール in 沼田

成果：沼田市長、副市長、各担当部長の出席のもとで、各ゼミの発表を行った。

細野ゼミでは、定住人口の減少が沼田市の主要課題であることを確認した。「交流人口増大策」が人口問題の切り札であることから、データ分析と先進事例の調査に必要性を訴えた。

対象演習：演習 A・B・C

実施日：2016年10月22日（土）～2016年10月22日（土）

実施都市：東京都八王子市

実施施設：中央大学多摩キャンパス

実施内容：サマースクール in 沼田の中間報告会

成果：沼田市長、副市長、各担当部長の出席のもとで、各ゼミの発表を行った。細野ゼミでは、沼田市の主要課題である定住人口の減少に対して、地域資源と地域連携を通じた「交流人口増大策」が、沼田市の持続可能な発展を約束してくれることを、データ分析と先進事例の紹介によって示すことで、政策実施へのヒントとなったことを市長や商工団体幹部から告げられた。

対象演習：演習 A・B・C

実施日：2016年10月20日（木）と2016年10月30日（日）

実施都市：東京都立川市

実施施設：ららぽーと立川立飛

実施内容：来店者調査

成 果：2 日間で 1000 サンプル以上のアンケート票を回収し、給料日前平日と給料日直後の休日との客層の変化、購買行動の変化、意識の違いなどを、SPSS を活用したデータ解析によって確認し、仮設設定、仮設検定、政策提言にまでつなげる糸口をつかんだ。

対象演習：演習 A・B・C

実 施 日：2016 年 11 月 1 日（火）～2017 年 2 月 10 日（金）

実施都市：東京都八王子市

実施施設：中央大学多摩キャンパス

実施内容：データ解析と代表的ショッピングセンターの見学

成 果：ららぽーと立川立飛に近接する大型ショッピングセンターの見学を通して、ショッピングセンターの競争力比較を行うと同時に、GIS を活用して、各ショッピングセンターの商圈の推定、商圈人口、平均所得などの図誌を行い、将来的に有望な潜在的商圈を推定した。

対象演習：演習 A・B・C

実 施 日：2017 年 3 月 20 日（月）

実施都市：東京都八王子市

実施施設：中央大学多摩キャンパス

実施内容：アンケートの統計分析と GIS の商圈分析をもとに、報告書を完成した。報告書のタイトルは『ららぽーと立川立飛をもっと魅力的にする報告』であり、読売新聞多摩版に、その概要が紹介された。





## 中央大学全学連携教育機構

本報告書に関してお気づきの点等ございましたら、全学連携教育機構事務室（多摩キャンパス 5 号館  
ペデ下ー学生部学生相談室上）までお問い合わせください。

<問い合わせ先>

全学連携教育機構事務室

TEL:042-674-3663

FAX:042-674-3666

E-mail:flp@tamajs.chuo-u.ac.jp